



衛生指導員 ものがたり

松島松翠・横山孝子・飯嶋郁夫 共著

JA長野厚生連
佐久総合病院

『八千穂村全村健康管理の50年』別冊

衛生指導員 ものがたり

松島松翠・横山孝子・飯嶋郁夫 共著

まえがき

かつて「東の沢内、西の八千穂」という言葉が流行った。沢内とは、岩手県の旧沢内村のことであるが、どちらも殆ど同じ時期に、村ぐるみの健康管理を始めた村である。八千穂村の全村健康管理で、他に見られない大きな特徴の一つは、地域の保健リーダーとして、男性の「衛生指導員」を設置したことであろう。

ただ衛生指導員とは、やや古めかしい呼び方だが、それにはこんな事情がある。昭和28（1953）年から30年にかけて、穂積村と畑八村（後に合併して八千穂村となる）だけで340人の赤痢の集団発生があった。これを機会に一層の衛生知識の向上と衛生環境の改善が求められ、八千穂村では、8人の環境衛生指導員をつくって、改善につとめた。当時は、下肥を肥料として使うために、便所はどこでも外便所であった。ここがハエとウジの巣窟になった。薬剤散布と、農家への実質的な衛生指導が必要であり、そのための環境衛生指導員であった。

昭和34（1959）年、全村健康管理が始まるとともに、環境衛生の仕事を持ちながらも、健康管理、成人病対策にまでに役割が拡がり、正式に「衛生指導員」という名になった。

若月先生は、これを「保健活動家」と呼んだ。住民から選ばれて地域で保健のために活動す

ることに、大きな意義を認めたのである。

また衛生指導員の「指導」という言葉も、現代ではあまり適当な言葉とはいえない。現代は「指導」ではなく、「協働」である。住民が主体となって、皆の力でつくり上げていくのが、本来の健康を守る活動である。当初は上から指導する形であったが、現在ではそうではない。このことは、衛生指導員自身もよく納得している。

ついでに述べておくと、健康管理の「管理」と言う言葉もよい言葉ではない。これには若月先生も触れておられるので詳細は省くが、「管理」というとどうしても「上から」という意味になる。健康を守る活動はあくまでも「下から」の取り組みが基本でなくてはならない。

八千穂村は、平成17（2005）年に合併して佐久穂町となり、合併後は、衛生指導員は「地域健康づくり員」と名前が変わった。本書では八千穂村時代のことを述べるので、衛生指導員という呼び名で通すことにしたい。

衛生指導員は、期待に応えて、やがて全村健康管理の要^{かぎめ}となって活躍するようになる。しかしこの50年間、衛生指導員の活動が、必ずしもスムーズに運んだというわけではない。ときには衛生指導員同士で意見が割れたり、役場と対立したり、また一時は衛生指導員廃止問題も出た。これらについては『八千穂村全村健康管理の50年』にくわしく述べてあるが、いずれも衛生指導員の努力と団結で乗り越えてきた。これには、一つは地域から選ばれた衛生指導員とい

う名に、誇りと愛着があったからであろう。地域健康づくり員というハイカラな名よりも、衛生指導員という言葉の中に、多くの思い出がつまっているのだ。現に衛生指導員を辞めたあと、衛生指導員OB会をつくって、ボランティアで活動している方が大勢いる。

しかしこれからは新しい「地域健康づくり員」の活躍の場である。先輩たちの生き方を学びながら、地域のために頑張ってほしい。この別冊が、その一助となれば幸いである。

この『衛生指導員ものがたり』は、佐久病院の広報誌『農民とともに』のNo.85（2000年4月号）からNo.133（2003年3月号）まで、四年間にわたって連載したものをまとめたものである。

本書の発行にあたっては、佐久病院から多くの激励とご援助をいただいたことに深謝したい。また困難な事情の中で、短期間で発行に漕ぎつけていただいた(株)佐久印刷所に厚くお礼を申し上げます。

2011年3月

佐久総合病院名誉院長

松島 松翠

目次

まえがき

プロローグ・劇『見る』の衝撃

11 2

I. 健康管理が始まるまで

ノミ・シラミ・ハエの農家生活

赤痢大発生で村が変わった

ハエ退治と回虫駆除が最初の仕事

ヤギ・トリ・大豆で栄養改善

悲しい現実——結核と寝たきり

映画製作や農村調査に協力

II. 村ぐるみの健康管理が始まる

窓口徴収の反対運動の中で

健康手帳と健康台帳を備えて

48 44 37 33 28 24 20 16

小雪の中で健康健診始まる

52

結果報告会に力を入れて

56

毎月一回の学習会に取り組む

61

暖房入れて医療費が減った

65

農夫症対策に農民体操を始める

69

苦勞と悩み——受診率の低迷

74

Ⅲ、衛生指導員と手を携えて

トラさんと衛生指導員たち

80

春の息吹に英気を養う「タラの芽会」

85

体中浴びた農薬・ホリドール

89

健康知識は上がったけれど

94

納屋工場の広がり、村の中は大ゆれ

98

あいさつは「ズロース一丁!」

102

Ⅳ、新たな健康管理への模索

健康管理をあらためて考える

110

「ヘルス」移行でさかんに論議

114

世代交代の衛生指導員たち

全国から視察が相次ぐ

ピッカピッカの一年生

胃の施設検診をすすめて歩く

V. 演劇活動で健康づくり

自主的な取り組みがすべてだ

よく食べ、よく飲み、よく学ぶ

健康大会から健康まつりへ

皆でつくった第一回健康まつり

はじめての演劇に取り組む

劇の上演で仲間づくりができた

VI. 衛生指導員に激動の嵐

健診日程に指導員会が反発

衛生指導員廃止の動きが出る

村民ドックでまたひと揉め

乗り切った激動の四年間

118

123

127

132

138

142

147

151

156

160

166

170

174

179

激動の嵐は健康管理部にも

VII セミナーと地区ブロック活動

指導員たちとセミナーをつくる

地域活動の推進役はセミナー同窓会

女性推進員とともに手を組んで

さらに進む地区ブロック活動

VIII 八千穂村のよいところ悪いところ

健康管理に助っ人現れる

ユニークな茂松・恒人コンビ

酒は涙か生きがい

八千穂村のよいところ悪いところ

みんなで育てる八千穂の子

エピソード・主役は住民

あながき

プロローグ・劇『見る』の衝撃

八千穂村健康まつりで

平成元（一九八九）年十一月十二日、八千穂村福祉センター大ホールは、村の各地区から集まった人たちで異様な熱気に包まれていた。参加者のために床に敷かれた莫^も蔭^{かげ}は、すでに隙間なく埋めつくされている。第六回健康まつりの最後のプログラム、劇『見る』が間もなく始まろうとしていた。

健康まつりに劇を上演するようになったのは、第二回るときからだが、今や健康まつりの演し物としてすっかり定着し、村の人たちも毎回それを楽しみに集まるようになっていた。

「見る」というのは、看護する、介護するという意味だが、ここでは、家庭での寝たきり老人の介護のことを指している。今ではふつうのことになったが、当時としては漸く老人介護の問題が論議されるようになったときで、健康まつりでも、二年前にボケ老人の介護を取り上げて以来、二度目の取り組みであった。

やがて幕があく。農村に多い三世代家族の家が舞台である。

父が会社員で、母が寝たきりの祖父の面倒をみている。しかしもう十年も経つので、母は看

病疲れで体の具合が悪い。一度診察を受けようと病院へ行った留守に、祖父が息を引き取ってしまう。案の定、駆けつけてきた親戚や父の兄弟たちから「嫁のくせにちゃんと見ていなかった」「病人をほっぽりだして家を空けるなんて」とひどい叱責を受ける。

やがて父が帰ってきて母をかばうが、親戚は納得せず、とうとう喧嘩になる。母は非常にづらい立場になるが、やがて祖父の弟が現れ、「寝たきりで何もできない俺を、嫁は一所懸命に介護してくれた。俺はこの十年寝たきりだったが、嫁のおかげで生きがいのある生涯を送ることができた」と、祖父の生前の言葉を伝える。一同、母の長い間の苦勞をあらためて感じ入り、お互いに反省しあうという筋書きである。

婦人部活動を変えた劇

寝たきり者を介護する家の人の苦勞は並大抵ではない。親戚や兄弟は一向に姿を見せず、文句だけは言うというのは、よくある話である。手は出さぬが口は出すのである。これが介護する人をさらに苦しめる。

ところで、劇の進行中にハプニングが起こった。父の妹役をやった女性が演技ではなく本当に泣き出してしまったのだ。自分も介護をやったことがあり、母の苦勞や心情がよく分かる。その気持ちを察して胸にジーンときたらしい。劇と自分の体験が重なってしまったのである。

観客もいっせいに泣く。みな同じような体験を持っているのだ。劇は感動の渦の中で幕を閉じた。

当時、臼田町農協で生活指導員をやっていた武田巳智子さんもこれを見て大いに感動し、衝撃を受けた一人である。早速そのビデオを借りて、町の全地区を上映して回った。

どこでも皆泣いた。

机上でつくられた内容ではなく、言わば隣の家の問題が劇になっているため、これは他人ごとではない。自分のことと考えあわせて胸におちるのである。

武田さんは、この劇を見て以来婦人部活動のやり方が変わってしまったという。演劇ということな分かりやすい問題提起のやり方があったのかと、あらためて劇のすばらしさを感じた。

以来、自らも、また婦人部の役員も含めて、地域を回って劇を上演するようになる。お年寄りの問題はとても深刻だというのは、各人の胸の中にはあるが、近所の例は当たり障りがあるので、なかなか具体的に口に出しては言いにくい。しかし劇を見て考えるとなると、これは当たり障りなく物が言える。劇で問題提起しながら、その後で話し合うという健康教育方式でき上がった。

劇は衛生指導員のいのち

劇『看る』は、八千穂村衛生指導員のときに高見沢佳秀さんが作った第五作目の劇である。健康まつり当日上演したのも、衛生指導員全員が取り組んだ。女性の配役は保健婦さんや婦人の健康づくり推進員の手を借りたが、その他の配役や裏方は衛生指導員が中心となつてつくり上げた。

高見沢さんは以後も劇を作り続け、その数は現在三十以上になる。その度ごとに衛生指導員が皆で協力して上演している。

十五人いる衛生指導員は、八千穂村の全村健康管理の中でさまざまな活動を行っているが、演劇活動はその中の重要な活動の一つになっている。高見沢さんは次のように言い切る。「健康教育にとって劇の上演は最もよい方法だ。だから衛生指導員にとっては演劇活動はいのちだ」と。衛生指導員の演劇活動の詳細については、また稿を改めて述べることにしたい。

住民の中の保健活動家である衛生指導員、これは八千穂村独自の組織だが、もう四十数年の歴史を持つ。任期は四年だが、何期も続ける人もいる。当初とメンバーは全く変わっているが、その活動はずっと受け継がれている。

衛生指導員というのはどうして生まれたか。今までどんな活動を行ってきたか。その歩みを一つひとつ辿ってみることにしよう。

I

健康管理が始まるまで



小川でナベやカマを洗う家族

ノミ・シラミ・ハエの農家生活

ノミ、シラミとりの毎日

衛生指導員の生い立ちを語る前に、当時の村の衛生状況を少し説明しておかねばならない。話は四十数年前に遡る。

昭和二十年代もそろそろ終わりに近づこうとしていたが、農村の生活環境は依然として悪かった。食料も十分とは言えなかったし、衛生面ではさらにひどかった。

ノミやシラミは家の中のどこにでもいた。当時開業していた出浦公正医師によれば、往診に行くと、患者の側に座って布団をまくって診察するものだから、座っているうちに靴下の方からシラミが移ってきて、家に帰ってからムズムズ痒くて困ったという。

夜になれば、布団の中にノミやシラミが何処からともなく集まってきて痒くて眠れない。誰かが痒いといえは一斉に起きてシラミとりをやる。布団や毛布にたかっているシラミとその卵をみつけて、手でつぶしていく。また週に一度は、着た物を全部ぬいでたらいに入れ、そこへ熱湯を注ぐ。するとシャツの衿などにシラミが一行になり白くなって死んでいるのが見つかった。

とくに女の子の髪はいつもシラミでいっぱいだった。DDTができてからは、子どもの頭が真っ白になるほど、プカプカDDTをかけて、風呂敷で頭を縛って一晩経てばシラミはみな死んでしまった。

ハエを手で払い払い食事

ハエも家の内外を問わずブンブン飛んでいた。その発生源の一つは便所だった。便所はみな外便所で家の外にあったが、これは尿尿をすぐ肥料として使う必要性からだった。従って尿溜は露出していて、ハエが発生し増えていく温床となっていた。

それに大抵の農家は、主に農耕用に牛や馬を飼っていたが、畜舎は家と接して作られていた。というよりはむしろ家の中にあつたといつてよい。台所と土間続きだったからだ。牛馬の糞便にハエがたかる。それがもろに台所へ押し寄せる。だから家の中にハエが絶えることはなかった。

いざ茶碗にご飯を盛ると、待ち構えたようにハエがいつせいにたかってくる。それを手で払い払い食事をする。そのことを誰も不思議とは思わなかった。

当時は水道はなく、井戸水か川の水を使用していた。川がない地区では井戸水しか使えなかったが、川でいろいろな物を洗うのがふつうだった。

ナベやカマを洗ったり、茶碗など食器も洗った。野菜も洗ったが、野沢菜などは川で洗ったまま漬けることもあった。水の澄んだところは飲むこともあった。「三尺流れれば水はきれいになる」というのが常識とされていた。しかし一方では、川でおむつを洗ったり洗濯もした。これが問題で後日の赤痢発生のもとになった。

穂積の穴原地区は地下水も川もないところである。ここでは生活用水として、地区のほぼ中心にある「石舟」というのを利用した。石舟というのは、湧き水を樋（とい）で引き、貯水のために石でつくった水槽である。ナベ、カマ、洗濯物などを籠に入れ、背負ってきて石舟で洗う。飲み水にも使ったから汚染がやはり心配だった。

据え風呂は肥料づくりに

風呂桶も便所と同じく、みな戸外にあった。尿溜の上に立てた据え風呂である。これも風呂の残り湯を尿と一緒にして肥料として使うためだった。

当時は風呂は一週間に一度ぐらい立てるのがふつうだった。その代わり近所で交代で立てて、一つの風呂を共同で利用した。

嫁さんが風呂を立てると、姑さんが「今晚風呂を立てたから、来ておくんなんしょ」と近所に言って歩く。すると夕食後、近所の人たちが、「おつかれでやす。ふろを貸しておくんなんし」

と次から次へと訪れる。いろいろで順番を待つ間に、お茶を飲みながら世間話をする。嫁さんは火を燃やしたりお茶を入れたりして、一番最後に風呂に入る。その頃は風呂の湯も少なくなり、大分汚れている。

一回に十五人も入るのだから当然ともいえるが、できるだけ多くの人に入ってもらって、汗や垢でとるところになった、つまり肥料効果たっぷりの湯を尿溜に払うのが良いとされていた。体を洗うのはすべて風呂の中で、外で洗ったり石鹸を使うのは許されなかった。肥料効果が落ちるからである。それ以前、石鹸のない頃は、洗濯するにも頭を洗うにも、藁を燃やし灰をザルに入れてお湯をかけて灰汁を取り、その水で洗ったという。こちらの方がむしろ肥料効果があるとされた。

外便所や戸外の据え風呂の衛生上の問題点はもう一つあった。冬の寒さの害である。

いろいろと炬燵こたつだけの暖房では、部屋の中自体もそう暖まるわけはなかったが、冬の夜の戸外はさらに寒く、大体が零下十度近くになる。外便所では夜中に温まった体を急に寒い外に曝すことになるので、急激な血圧上昇を起こし脳卒中の引き金になった。

昔は今のような布団はなく、みな藁布団だった。秋取り入れの後に十センチくらいにきざんだ藁を詰め込んで厚さ三十センチの藁布団をつくる。その上にせんべい布団を重ねて寝る。これは案外温かったが、埃が多く出るのが欠点だった。

ともかく、いろいろな面で当時の農村環境は現在では想像もできないくらい悪かった。衛生面からいえば、いつ伝染病が発生してもおかしくない状況だったが、やがて穂積地区で、県下随一といわれる赤痢の集団大発生が起ることになる。

これが村を揺るがす大事件となった。

赤痢大発生で村が変わった

赤痢が二百二十二人発生

畑八村と穂積村が合併して八千穂村になったのは、昭和三十一年のことだが、その少し前、昭和二十八年に穂積村で赤痢が集団発生した。患者はあわせて二百二十二人に達したが、この大発生は県下第一ということで、村中大騒ぎになった。

発生源は穂積小学校で、患者の大部分は児童だった。そのうち児童から家庭へと広がり、ついには穂積村全村にまで及んでしまった。保菌していた子供が学校で相撲をとって遊んだだけで、村中に移ってしまったという噂があったが、原因は学校の水からの感染であった。

学校に簡易水道が入っていたが、断水に次ぐ断水で十分消毒できない状況であった。これが、

小中学校の児童、生徒に多くの患者が出た原因とされた。学校給食はまだやっていなかったから食べ物からではない。各地区の発生は生徒の媒介によるものとされた。

早速、保健所が来て全村検便と消毒を行うことになった。役場の担当はもちろん、地区の衛生委員（後の衛生部長）も呼び出されて手伝うことになった。しかし、衛生委員自身も赤痢にかかった人も多く、なかなか手がなくて困ったという。

お尻だけ出して一列に

保健所は泊まりがけで夜を徹して検査した。後に衛生指導員になった佐々木喜一郎さんは、当時衛生委員をしていたが、早速呼び出されて検便を手伝った。村民みなお寺に集まってもらって、便をとって菌の培養検査をするのだが、そのやり方がいっぽう変わっていた。

一列に並んでカーテンからお尻だけ出して並び、検査者がガラス棒をお尻の穴へ突っ込んで便を採取し、シャーレに塗るのである。番号で処理し、カーテンで区切られているので、顔も名前も分からないが、今だったら人権問題になるかもしれない。

全村に赤痢が発生したということもあって、保健所の命令も強制的だった。とても恥ずかしいなどと言っておれなかった。

役場も赤痢発生にびっくりして、当時の衛生主任の間島誠さんや、学校を卒業して就職した

ばかりの井出今保健婦さんも、殆ど每晚幻灯機を持って地区を巡回し、伝染病予防の話をして回った。

各町村には「避病舎」という名前の、いわば隔離病舎が設けられていたが、穂積村では高岩地区にあった。患者は順次その避病舎に収容されたが、たちまちのうちにいっぱいになり、ついには病棟の廊下にまであふれ出る始末であつた。そこで、三、四力所の公民館にも分けて患者を収容した。

その後、患者は千曲川をはさんで、畑八村へも移り、昭和二十九年には上畑地区で二十四人、三十年にはまた穂積村で百十八人の発生があつた。

相次ぐ赤痢の発生に、当時の野沢保健所の防疫係は、後になって次のように記している。

「もう少し公衆衛生に対する知識があつたら、こんなことにはならなかつた。防疫のために我々が現地へ行って見てみると、村から川の水は使わないようにといくら言われても、平気で使っているし、手洗いは、造っておかなければ文句を言われるからと、申し訳的に造っておき、実際は殆ど使用した様子はなかつた。

いちばん驚いたことは、高岩地区で、夕食用のそうめんをゆでて、川で冷やしていたお婆さんがいたことで、これにはいささかあきれた。(後略)」（穂積公民報・三十年八月二十日号）
基本的には、村民の衛生知識の不足が原因とされた。

このような状況の中で、穂積村と畑八村は合併して八千穂村が発足した。井出幸吉氏を村長に新しい第一歩を踏み出したのである。

環境衛生指導員を置く

八千穂村にとって、この赤痢大発生は大事件だった。その教訓を生かして二つのことがなされた。

一つは簡易水道の建設だった。それ以前にも八郡区や筆岩区にはすでに出来ていたが、赤痢発生を機会に各地区で次々と簡易水道がつくられた。従来は申し訳的な消毒装置が多かったが、維持管理を完全にとり保健所の指示で、その点にも力が入れられた。

これがやがて、佐久地区全体に上水を供給する佐久水道の建設（昭和三十五年竣工）へと発展していくことになる。

もう一つは、昭和三十年になって環境衛生指導員というものを県環境衛生連合会の指示で人口千人に一人置くことになったことである。これは八千穂村だけではなく各町村でも同じだった。八千穂村では人口は六千人程度だったが八人置くことにした。それだけ力を入れたのである。

他の町村では環境衛生指導員をおくことには、あまり乗り気でなかった。区長が兼ねてやる

とか、名目だけのものが多かった。しかし八千穂村では違った。赤痢発生の経験で、みな地域の衛生環境を良くし、伝染病の予防に力を入れなければという気持ちが強くなっていた。

結局、専任の環境衛生指導員において積極的に取り組んだのは八千穂村だけだった。赤痢大発生が村の意識を大きく変えた。後に彼らは環境衛生面だけでなく、成人病予防も担当する衛生指導員として、全村健康管理発足の際には大いに活躍することになるのだが、赤痢発生がその土台をつくったといえる。

まさに赤痢さまさまであった。

ハエ退治と回虫駆除が最初の仕事

ハエの習性も利用して

赤痢大発生が契機となって、昭和三十年に、八人の専任の環境衛生指導員が選ばれたのだが、大半が二十歳代の青年たちだった。

といっても役場の常勤職員ではない。ふだんはそれぞれ自分の仕事を持っていて、ある人は農業に、ある人は自営業に、ある人は会社勤めに精を出している。時期に応じて環境衛生の仕

事を、それぞれ分担の地区を受け持つて行うのである。

環境衛生指導員の第一の仕事は、伝染病予防のために、まずハエを駆除することであった。ハエの多いところはまず便所である。便所は外便所で、今と違って「溜め」の周りはコンクリートでなく土だから、そこにハエが卵を産んでサナギができる。放っておくとそれからウジが生まれる。春早いうちに冬眠中のサナギを土ごとかき取って、新しい土と入れ替えるのである。

もちろん指導員だけでは、とても全戸はできないので、地区の衛生部長さんにも指導していっしょに実施してもらう。そのあとへオルソ剤（有機塩素剤）という殺虫剤を一戸一戸散布して歩くのが指導員の役目だった。

牛小屋もハエの多いところだった。指導員の井出守さんは、ハエ退治の変ったやり方を考えた。牛小屋の入り口に縄のれんを張り、のれんに殺虫剤を撒くというやり方である。ハエは低いところは飛ばない。高いところを飛ぶので、のれんに一回とまってから牛小屋へ入る。出てくるときもそこへとまってから出てくる。そういうハエの習性も利用した。

もちろん牛が出入りするときは、殺虫剤のついたのれんをくぐるので背中に薬剤が付く。そこで背中にハエがとまると死ぬ。しかし人間が触るとあぶない。牛小屋の出入りには注意が必要だった。

もう一つ、薬剤を使わないハエ退治の面白い方法があった。ご飯を炊いておかまを置く。そ

こへワツとハエが集まって真っ黒になる。そこで麦藁に火をつけてパツと被せる。ハエは一斉に焼けて死んでしまうというのだ。

日頃の実践結果を発表

ノミ退治には床下消毒をやった。これは主に粉剤でDDTを撒いたという。器械でものすごい勢いで噴出するので、下手をすると体じゅう浴びてしまう。殺虫剤散布もなかなか危険な作業だった。

環境衛生指導員が消毒に力を入れたおかげで、その後赤痢の大発生はなくなったが、他の伝染病も含めて散発的に一年に数件程度の発生はあった。その度ごとに指導員は呼び出されて、患者の家はもちろん近所周辺まで、消毒を繰り返して歩くのだった。

年齢が若かったこともあって、指導員たちは研究熱心だった。毎年、県の主催で環境衛生大会というのが長野や松本で開かれたが、それには全員で参加し勉強した。その佐久地区の研究発表会が海ノ口の和泉館で開かれたときに、井出守さんが研究発表を行った。テーマは「便所のハエの駆除について」である。

日頃実践していることを発表すればよいので、それは難しいことではなかったが、会場からは質問が相次いだ。どんな消毒方法でやっているのか、散布器具はこのメーカーのものか、

どこで買ったか、値段はいくらかなど、具体的な質問が多かった。他の地区では、あまりそういうことはやっていなかったらしい。大会へ出てみると、八千穂村が相当進んでいることが分かった。

回虫が鼻からニューツと

ハエの駆除とともに、環境衛生指導員が力を入れたもう一つの仕事は、回虫の駆除であった。検便の手伝いと、駆虫剤を配って歩くことである。

当時は回虫卵保有者は村平均で五〇%を超していた。時々回虫を口から吐き出すことは珍しくなかったが、たまには回虫が鼻からニューツと出てきて皆をびっくりさせた。腹痛で病院に入院し、手術を受けて、初めて原因が回虫によるものと分かった人もいる。

回虫が多かったのは、下肥を直接畑へ撒いたからである。家族の誰かが回虫を持っていれば、下肥には必ず回虫卵が含まれる。それを肥桶で汲みだしてそのまま畑へ撒くものだから、当然野菜にその仔虫がついてしまう。その野菜を食べてまた感染する。悪循環だった。

寄生虫には回虫だけでなく鉤虫（十二指腸虫）も多かった。村平均で数%もあった。これはひどい貧血を起こすので、病院での治療が必要だった。

そこで寄生虫の検査が始まったのだが、検査は上田の寄生虫検査所に頼んだ。まだ全村健康

管理が始まる前のことである。

検便には、マッチ箱を利用して便を提出してもらった。それを集めるのも指導員の仕事だった。ところが村の人は真面目だから便をたくさん取ってくる。マッチ箱一杯に詰めてくる人もいる。だから便の匂いが部屋中に広がって臭くてとても大変だった。

回虫の駆虫には海仁草（マクニン）を主に使用した。薬は役場で用意して保有者にはただで与えたから、村の人は大人も子どもも進んで便を提出した。

環境衛生指導員は保健婦と協力して、各地区を回って回虫予防の映画をやりながら、検便や駆虫剤投与を精力的に行なった。そのとき下肥を生のまま撒かずに野溜をつくって熟してから撒けという指導もした。しかし野溜をつくったのは大きな農家だけで、一般の農家はとてもそんな余裕はなかった。

みな貧しい時代だった。

ヤギ・トリ・大豆で栄養改善

赤痢がきつかけで栄養改善

「あの頃はみんな貧乏だった。俺の家は昭和二十七年から魚屋をやっていたが、魚なんて誰も買わない。菜っぱとみそ汁が当たり前の食事だった。今じゃ竹輪なんてごちそうじゃないが、これさえ盆と正月くらいしか食わなかった」と、初代衛生指導員会長になった山浦虎吉さんは語る。

村の保健婦として長年活躍していた井出今さんは、「私はちょうど穂積に赤痢が大流行した昭和二十八年に役場に入ったけれど、その赤痢で穂積の女衆が目覚めちゃったんです。赤痢にならない体力をつけるために、栄養をとらなくちゃあと、穴原の内藤よしえさんたちが工夫して、みんなが集って大豆で豆腐をつくって分け合う『お豆腐の日』を始めたんです。そして、若妻会で食生活改善講習会などをよくやりました。そしたら昭和三十二年に保健所の『栄養改善指定村』を受けることになって、これが栄養グループに発展したんです」と、栄養グループ誕生のいきさつを語ってくれた。

さらに、佐口の衛生指導員だった井出佐千雄さんも、「そう、俺たちの部落にも、栄養グループの篠原てる子さんたちが指導に来てくれていたが、赤痢にならないために栄養が大事だと、環境衛生指導員だった俺たちも、頑張ってPRしたんだ」という。

なんとこの栄養グループも、赤痢が発端で始まった住民の活動が原点にあったのだ。

ナベ・カマ持参で伝達講習

役場衛生係の間島誠さんや井出今さんも栄養改善の指定村としての活動に力を入れた。栄養グループは、各地区の婦人会から二、三人ずつの代表が参加し、総勢五十人にもなった。毎月一回保健所の栄養士による調理講習が行われ、ここで習った知識や料理法を、各人が持ち帰り、地区ごとに伝達講習をして回るのである。公民館に鍋・釜を持参で苦勞もいとわず皆ががんばった。

会員一人あたりの材料費は三十円で、各自が負担するところや、婦人会で負担してくれるところといういろいろだった。みんな比較的ひまはあったので、伝達講習の連絡を出すと、公民館の調理室がいっぱいになるほどで、にぎやかによく集まった。現代のようにまだプロパンガスという、ハイカラなものもなく、コンロと炭、鍋、まな板、包丁と、材料からすべてを籠に入れて背負い、会場に出向いたものだった。

グループの中心的な牽引役だった横森幸子さんは、「料理も終わって試食会の後は、みんなで楽しく歌ったり踊ったり、今考えるとずいぶんのんびりしたものだった」と当時の様子を語っている。

実際、子ども連れで集まるのだから、ワイワイがやがや賑やかで、できたそばから子どもが食べたがり、大人の分をまた作ったりして楽しかった。マヨネーズの作り方もよくやったと、

今でも懐かしく語るグループ員が多い。

ずっと後のことになるのだが、昭和三十七年の全国栄養法施行十周年記念大会で、八千穂村栄養グループが厚生大臣賞をいただくことになる。

食糧難のなか、畑からとれる手近かで栄養価の高い大豆を使ったこと、協同で自家用豆腐を定期的につくって分け合うこと、冬にはこれを凍み豆腐にして、一戸に五箱ずつ作り、農繁期の保存食にまで利用したことなどの、すばらしい実践が注目されたのである。

山羊の飼育と鶏五羽運動

やがて代表十二名の研究グループもでき、年間の活動計画やテキスト作成、栄養実態調査もやった。栄養調査は無作為抽出の三十戸について、みんなで一週間の調査をして歩いたが、その結果は野菜とタンパク質不足・塩分過多がはっきりした。

そこでグループは、豆腐だけでなく動物性のもものと、全戸に山羊の飼育を推進する。

濃厚飼料を必要とせず、草だけで栄養価の高い乳を出す山羊は、当時大いに注目されだしていた。

わが国唯一の山羊牧場（現在の長野種畜牧場）が近くにあり、山羊を飼うのを村の条例にしたほで、どこの家も毎日の草取りは子どもの仕事、管理は男の役だった。この山羊乳が乳幼

児の栄養をかなりカバーしたと思われる。

さらに、卵を売るだけの養鶏ではなく自家用にも卵を食べようと、栄養グループは「鶏五羽運動」を提案する。村中でやるところに意味があり、これで多少は卵が人々の口に入ったらしい。

鶏については今でも思い出すことがある。後に私どもが全戸訪問を計画して、下畑集落を回っていたときのこと。カンカンと石をたたくような、かん高い音がするので行ってみると、真つ赤な血が石から滴たっていて、おじさんが何かをしきりにたたいている。手でもケガしたのかと驚いて聞くと、「鶏をつぶしたから、骨をたたいて団子にしているんだ」という。盆に客が来るからとのことだった。

庭の石にじかに肉片を置いて、金槌でたたいているその大らかさ。初めて見る光景のすごさに驚きつつも、非農家だったわが家の暮らしにはない豊かな行事食で、農村のたくましさを感じ、印象深い思い出として残っていたのだが、あれが鶏五羽運動だったのかと、ずっと後になって思い当たった。

村ぐるみの健康管理は昭和三十四年から始まったのだが、これよりずっと早い段階から、住民自ら健康づくりを考え、村民全体を視野に入れた活動が始まっていたのだった。環境衛生指導員と栄養グループの組織が、健康をまもる牽引車の両輪となって、道を切り開いていったと

いえる。

悲しい現実——結核とねたきり

入院の第一位は結核

環境衛生指導員たちは、主にハエ、カの駆除とか、赤痢など急性伝染病の予防のために、環境衛生に取り組んでいたが、人体の病気には直接手を下すことはなかった。これはあくまでも保健婦や看護婦の仕事だった。

その中で、当時の農村の病気としてどうしても見逃すことのできない病気が二つあった。結核と脳卒中である。

八千穂村の昭和三十三年度の国保疾患統計を見ると、国保加入者約六千人のうち、なんと入院では結核が第一位で二百五件（延べ人数）で、二位の精神病の七十三件を大きく離している。また人口千人あたりの結核患者数をみると、昭和三十年で十一人、昭和三十五年には二十人で、佐久管内では最も多かった。

そこで結核対策が村の急務とされたのだが、合併した八千穂村に、新しく保健婦として入っ

た井出今さんも、赤痢の問題が一段落した後、真先に結核に取り組んだ。当面したいちばんの問題といえば、結核の家族内感染だったという。

家の消毒でひどい目に

ある日、井出今さんは、一軒の家で三人も患者が出た家へ保健所といっしょに消毒に出掛けた。家を密封して徹底的にフォルマリンで消毒するのである。赤痢の大発生で住民は消毒には慣れていたが、結核の消毒は大きかりでとても嫌がられた。それに結核に罹患したことは他人には知られたくない。だから消毒にいくと、いつも家族から恨まれひどい目にあつた。

家族に「みなさん、消毒をするから外へ出てください」と言ったら、ちょうどその時、その家の総領の息子と二番目の息子が来ていた。そして消毒が終わったあと、井出今さんはその二人に強引に部屋へ閉じ込められてしまった。後でなんとか出してはもらったが、とても怖い思いをした。

そこで助役さんに、「こんなことでは、とても怖くて仕事ができないからもうやらない」と言つたところ、助役さんがその家まで行ってくれて、「これは村としての仕事なのだから、保健所と村の衛生係に任せて貰わなければ困る」と家族を説得してくれた。それからその家は何も言わなくなったが、長い間そのしこりはとれなかったという。

衛生指導員ができる前、各区には、衛生担当の衛生部長さんという組織がつくられていた。そして月に一回は役場へ集まって衛生部長会議というのを開いていた。これは村中から出ていたから、いろいろな点で保健婦と衛生部長さんとの連携はとれていた。

ともかく結核をなんとかしなければと、井出今さんは各地区を回って、一人ひとりに胸部エックス線検診の受診をすすめて回った。これには衛生部長さんも協力してくれた。受診率はたちまち上昇して遂に九八％に達し、これは佐久管内では第一位の成績となった。約十年の取り組みで結核患者は次第に下火になっていった。

これには、何といっても井出今さんの努力が第一だが、さらに当時の衛生主任の間島誠さんが、衛生部長組織をはじめ婦人組織など、全村の住民組織をいち早くつくり、それらをうまく利用したという点があげられよう。

布団の中はウジでいっぱい

もう一つの問題は、脳卒中である。当時最も多い病気といえば高血圧だったが、それが原因で脳卒中を起こす人が多く、家でねたきりが当たり前になっていた。

須田きみ子さんは、昭和二十七年から三十二年まで、村の畑八診療所に看護婦として勤めていた。午前は診療、午後は往診という日課だったが、ある日、長年ねたきりの病人の家族から

往診の依頼があり、診療所の太下先生と一緒に出掛けた。

家へ入るとなんだか変な匂いがある。寝ている病人の布団を取ってみると、陰部から異様な悪臭が漂ってきた。よく見るとウジ虫がいっぱい湧いていて、ハエが出入りしている。先生が火箸でウジ虫をはさんで出したら、中型のマッチ箱に一杯とれた。さらに尿でびっしょりと濡れていた布団を上げたら、布団の下の畳が腐り、またその下の床板まで腐っていた。

誰かが倒れると、一カ月ぐらいは家族は心配し、三日おきぐらいに往診の依頼があるが、これが二カ月、三カ月となると往診の依頼もなくなり、家族も全く面倒をみなくなる。その家も久しぶりの往診だった。

訪問しても門前払い

別な家へ行ったとき、褥瘡じよくそうに新聞紙が当ててあった。「どうして?」と聞くと、「どうしてって、何も無えだもの」という返事だった。「こんなことで、バイ菌がはいったらどうするの」と須田さんは怒ったが、「何も無え」というのは本当だった。

病人というものは、なるべく表へ出さず、人目につかない一番奥へ隠しておくというのが村では普通であった。それは農村のしきたりといってもよかった。とくに尿失禁があると、どうしても臭くなるので子どもも嫌がる。ときにはしんばり棒をかけて、戸が開かないようにして

おくこともあった。

だから保健婦や看護婦が訪ねて行っても、病人を見せてもらえない。ひどい場合は門前払いを食わされたうえ、「もう来なくもよい」と言われた家もあった。そういう家ほど病人の面倒をよくみていないのであった。

平成の今でも、これに似た話はなくもないが、当時はどこにでもみられた。農村の悲しい現実がそこにあった。

映画製作や農村調査に協力

配役はすべて素人で

佐久病院と八千穂村が協力して教育映画「農村の病氣」（製作・ファースト映画社）を製作したのは、昭和三十三年のことである。

この映画は、農村病の原因として若月院長（当時）が提案した、肉体的疲労、精神的緊張、栄養不足、冷え、不潔な環境という、農村に多い五つのストレス要因を解説し、それらをなくすことが農村病の予防に大切だということをテーマにしたものである。

従来の衛生教育といえ、せいぜいポスターやスライドで行うことが主だったので、初めての教育映画の製作には、村からも大きな期待が寄せられた。

舞台は八郡区が選ばれた。後に衛生指導員会長になった山浦虎吉さん、通称トラさんも、その製作に協力してもらった一人である。

トラさんは八郡区で商店を営んでいるが、衛生部長もやったことがあり、顔が広く地区の世話役的存在だった。そこで映画に出演する配役を選ぶ相談を受けた。今度の映画は、プロの俳優は出演せず、ナレーション以外はすべて村の人と佐久病院の職員でやることに決まっていた。トラさんは、自分のメモ帳から何人かの出演可能な人を選び出したが、その上、監督から頼まれて、自分自身も映画に出演することになった。

映画は、佐久病院の日向幸子総婦長（当時）が扮する村の保健婦が、自転車で山道を走っていく場面から始まる。目指すはトラさんの家。トラさんに赤ん坊が生まれたという設定である。産湯をつかう赤ちゃん。それをニコニコと嬉しそうに眺めるトラさん。若きトラさんの演技もなかなかのものだった。

真夏に冬の身支度で

撮影はリハーサル一回ですぐ本番だった。なにしろ赤ん坊は裸でいるのだから、カゼでも引

いたら大変である。そう時間をかけて何回も撮るわけにもいかない。

ところが撮影中にとんだハプニングが起こった。他の区から、「子どもが具合悪くなったから、保健婦さん至急来てくれ」と全村の有線放送が入ったのだ。村の保健婦役を演じた日向さんを本物の保健婦と間違えたいらしい。撮影途中に抜け出すわけにもいかず、これには日向さんも大変困りはてた。

映画の中で、農家の食事風景を撮影する場面があつて、小林スイさんは、三人の子どもの母親役で出演した。

撮影したときは真夏の暑い日だったが、撮影は冬のシーンなので冬の身支度をしなければならなかった。衿元を何枚も出すために着物を何枚も重ね、その上に半てんを着て、その半てんに黒の袴をわざわざつけて、またその上にチャンチャンコを着る。その上何百ワットという電球で上から照らされているので、水玉のような汗が顔からしたたり落ちる。それを病院の係が拭き拭き撮影した。

農家の「一升めし」を表現するために、茶わんに山盛りのご飯を食べるシーンもあった。監督が、「もっと高く、もっと高く」と言うので、茶わんに盛れるだけ盛ったところ、一番小さい娘は、茶わんに口を当てたときに、目からは全く見えなくなってしまった。これだけは、ちよっと演出のしすぎだったようである。

映画は半年がかりで完成し、村の各地区をまわって上映会が持たれた。特筆すべきは、これを機会に、佐久病院映画部が次々と自ら映画をつくるようになったことだろう。「冷えとたかう」、「農民体操のすすめ」、「中気の老人たち」などの映画が続々とつくられたが、この「農村の病氣」製作が大きなきっかけになったといえる。

村の人との間に立って

その頃佐久病院では、農村へ出掛けていろいろ調査をやるが多かった。それも多くは八千穂村が対象だった。「早老調査」もその一つである。

それより以前、若月先生が若い男女の性についての調査をやったこともあって、今度は「早老の調査」かと早合点した向きもあったようだが、そうではなく農村の人が都市の人に比べて、どのくらい早く老けているかの調査だった。八郡区と佐口区で行ったが、これもトラさんが面倒を見てくれた。

老け方といっても、外見上のことではなく、目の調節力（老眼の度合い）、関節可動度（肩、背骨、股関節の動く角度）、立幅跳び、肺活量、握力、背筋力などを測定して、総合して生理的年齢を出すというかなり科学的な分析であった。

年齢別に対象を選ばねばならぬので、これはトラさんに任せた。結果の分析では、農村は都

市に比べて五年は早老で、とくに女子に著しいという結果が出た。

トラさんも検査を受けたが、なんと年齢よりも六年老けていると言われてガックリ。ほぼ同年の間島衛生係長さんに、「俺はお前より六年早く死ぬから、そのつもりで付き合え」とやけになった。早老と寿命とは違うことはトラさんも先刻承知のはず、これはトラさんの照れかくしであろう。実際、後になって間島さんは早く亡くなられたのに、トラさんは頭がツルツルになりながらも、なおピンピンしている。

その他、栄養調査などもやったが、村の人との間に立って、調査がうまくいくように協力してくれたのは、それぞれの区を受け持つ後の衛生指導員や衛生部長さんたちであった。この人たちは後に健康管理が始まったときも、大きな力になってくれたのであった。

Ⅱ

村ぐるみの健康管理始まる



一家そろって有線放送を聞きながら「健康手帳」の記入のしかたを勉強

窓口徴収の反対運動の中で

村と病院とのつながり

村ぐるみの健康管理がなぜ八千穂村でできて、佐久病院の地元の白田町でできなかったのか、という質問をよく受ける。

当時の若月院長は、最初は白田町でやりたかった。しかし白田町ではそういう雰囲気になかなかならなかった。当時、白田町は再建整備とか合併問題を抱えていて、そちらが忙しかったし、また病院がすぐ近くにあるから、いざというときに病院へ行けばいい、健診なんてという気持ちが、担当者の中にあつたということもある。

では八千穂村でなぜそういう雰囲気できたのか。

一つは、赤痢の大発生で予防に対する関心が高まっていた上に、佐久病院の出張診療班がたびたび八千穂村を訪れ、映画や演劇を上演しながら、健康教育をしていたということがある。それで自然に後の衛生指導員や村民とのつながりができた。

もう一つは、当時八千穂村には村営の畑八診療所というのがあり、若月院長が月一回、定期的に診療を手伝っていたということがある。若月院長のことだから、診察が終わると必ず一杯

飲む。当時の井出幸吉村長とも杯をかわしながら、大いに語りあった。この中から、村長との結びつきが次第に深まっていったことが大きい。

国保の半額窓口徴収の問題が起こる

そのような中で、国保半額窓口徴収の問題が起こり、八千穂村では村をあげて反対運動を行なった。これが、村ぐるみの健康管理を行う直接のきっかけとなった。

当時の国民健康保険は、窓口ですぐ自己負担分を払う必要がなく、現金を持っていなくても医者にかかれた。五割の自己負担分は後払いで、後で役場の人が集めに来たときに払えばよかった。

ところが戦後、農家の生活は苦しく、それが払えない人が多くなって、役場は大変困った。未収は全部役場の負担になってしまいうので村が赤字になる。その原因は国保にあるというので、「国保は村のがんである」などという声も出てきた。昭和二十年代の初め、多くの町村長は、できれば国保をやめたいと考えていた。

しかし、国保を廃止するのは困るという声も一方ではあった。国も対応が必要と思いながらもそれを延ばしていたが、町村の財政赤字が次第に膨らんでくるに及んで、ついに昭和三十二年に、国保半額窓口徴収の方針を打ち出した。

医療費の半分をすぐ医療機関の窓口で払ってもらえば、町村としては取り立てをしなくともよいし、赤字も減る。

これには南佐久郡の各町村は諸手をあげて賛成した。地元の医師会も賛成だった。「現金が半分でもすぐ入るのだから、この方がよい」というのだった。国保が赤字で、医師に対する医療費の支払いも滞りがちであったのである。

ところがこれに対して、井出村長は真先に反対の手を上げた。その当時は、今と違って農家には農外収入がなかった。養蚕のお金が入る盆とコメの代金が入る暮れ以外は現金がない。医療費の五割負担といえは相当な額になる。これでは貧しい農民は、病気になるっても医者にかからない。受診抑制になって、ますます「がまん型」が増える心配があるというのが、その理由であった。

村長は、村会議員を引きつれて県庁に何度も押しかけ、この制度を止めるように要望した。しかし国が決めたことなので、長野県だけではどうにもならなかった。一年以上反対運動を続けたけれども、結局この要望は通らず、窓口徴収の制度は予定どおり実施された。

村ぐるみの健康管理へ

しかし八千穂村だけは、窓口支払いをすぐには実施しなかった。村の出浦医師も、金のない

人は支払いの後でよいという主義だったから、窓口徴収などんでもないという考えだった。医師会で、「村医の私が言うのだから、八千穂村だけは窓口徴収を延期してほしい」と要望、医師会も八千穂村だけは特例として、窓口徴収を延期することを認めた。

井出村長は、衛生係の間島さんと呼んで、「お前、少し金を用意しておけ。村で立て替えるだぞ」と指示した。個人負担の分は村の木を売って、村で負担しようという考えであった。

八千穂村がやむを得ず窓口支払いを認めたのは、他の町村より一年半ばかり遅れてからであった。しかも自己負担は他の町村では五割負担だったが、八千穂村ではとくに四割負担とした。

それでも現金収入のない時代に医療費を払うのは大変だった。当時環境衛生指導員だった井出佐千雄さんは、窓口徴収が実施されてから、村民のいろいろな声を聞いた。医療費の工面のためにブタや牛を売ったとか、入院料は十日ごとに支払わねばならぬので、遂に金が続かず、やむを得ず中途退院をしなければならなくなったとか。

井出村長が手おくれの増加を心配していたときに、若月院長から、手おくれをなくすために、いつそのこと全村の健康管理をやってはその話があった。

井出村長は「なるほど、それはよい。私どもは、今までは病気になった人を何とかしようとして、窓口現金徴収の反対運動をしてきたが、それよりも病人をつくらないように、佐久病院

の援助を受けて、村をあげて、この健康を守る運動に取り組もうではないか」と決心した。

そこで村民に呼びかけて、村ぐるみの健康管理を始めることになったのである。昭和三十四年七月のことであった。

健康手帳と健康台帳を備えて

地元の出浦医師に会う

村長と若月院長（当時）の合意によって、いよいよ八千穂村で村ぐるみの健康管理がはじまることになった。しかし、そう簡単には事が運ばなかった。

まず地元の出浦公正医師の承諾が必要だった。当時、佐久病院で健康管理の仕事を担当していた寺島重信医師（当時は外科）と井出秀郷さん（後に健康管理課長）が出浦医師のところへ出掛けていって、「今度、八千穂村で、毎年一回の健康検診をやりたいと思うので認めてほしい」と頼んだ。

出浦医師は八千穂村でただ一人の開業医で、もう三十年以上も村医として村中を飛び回っていた。「どの範囲をやるのか」と出浦医師が聞いたので、寺島医師は得意になって「全村です！」

と答えた。日本のどこでもやっていないすごいことを、八千穂村でやるんだという意気込みがあった。胸を張ってその意義について滔々と説明した。

出浦医師はすぐ賛成してくれるものと、寺島医師は軽く考えていたのだが、彼はなかなか返事をしない。ややあって、「あんたたちは、そんなでかいことを言っているが、本当にできるのか。八千穂村の村民のことは俺がいちばん良く知っている。親父の名前を言えば孫の名まで全部分かる。どんな仕事をしていて、どんな生活をしているかすぐ分かる。そんなことも知らずに、ただ一回だけちよつと来て診察するだけで、その人を診断できるのか」と言うのだった。病気のいちばんのものと生活背景も知らずに診断などするのは、おこがましいと言うのである。村民の一人ひとりを長い間診てきた開業医としての自負がそこにあった。なるほど出浦医師の言うこともよく分かる。二人は、そのまますごすごと帰ってくるしかなかった。

医師会も反対したが

しかしこれで引き下がっているのは村の健康管理が出来ない。寺島医師と井出さんは十分な資料を備えて、もう一度出浦医師を訪れた。若月先生が作った「健康手帳」と「健康台帳」の二本を見せて、こういう手帳を村民に配って、単に健診の記録だけでなく、自分の健康の記録を自分自身でも記入するようにするのだと説明した。

しばらく眺めていた出浦医師は「よし分かった。健康管理の件は承知した。俺も時々は健診に行くよ」と言ってくれた。やっとOKが出て、寺島医師と井出さんはほっとして帰ってきた。だが、もう一つの難関があった。南佐久医師会が反対だというのである。出浦医師が医師会へ出て、寺島医師からもらった健康検診の資料を見せて説明したところ、「こういう内容であれば賛成できない」という。

その理由は、健診をやって患者を病院へ引っ張ってしまうのではないか、開業医の患者が減ってしまうのではないかという危惧からである。病院としてはそんなつもりはないが、開業医としては心配だったのであろう。

しかし、出浦医師はひるまなかった。出浦医師はちょっと頑固な面もあるが、道理が分かればとことんまでやる人である。「村医である私がいいといっているのだから、ぜひ認めてほしい」と頑張った。その結果、ついに医師会も折れ、承諾してくれたのであった。

健康手帳を皆が持つて

役場でも、保健衛生係の間島さんを中心に、健康管理への準備がすすめられた。

特筆すべきは、今まで主としてハエや力退治の仕事に従事してきた環境衛生指導員を、あらたに「衛生指導員」として、健康管理の担当としたことである。環境衛生の仕事も引き続き受

け持つのではあるが、主たる仕事は村民の健康管理のほうへ移った。

初代の衛生指導員は全部で八人いた。その中には、もう四十年も経つのだが、今もOB会として活躍している山浦虎吉（トラさん）、井出佐千雄、出浦経幸、井出守、渡辺一明さんなどがいた。

衛生指導員の初仕事は、まず年に一回の健康健診のPRをすることであった。地区の衛生部長さんや病院の井出秀郷さんといっしょに、各地区を回って個別訪問をした。昼間は誰もいないので、回るのは主に夜であった。

八千穂村全村健康管理の特徴は、健康手帳と健康台帳をそなえて、年に一回の全村民の健康健診をやるということである。

健康手帳や健康台帳は若月先生が考えたものだが、その発想の原点は、家畜には健康台帳（いわゆる「家畜台帳」）があるのに、いちばん大事な人間様のほうにはそういう記録はない、不合理ではないかということだった。

家畜もいろいろ病気になるし、予防注射もやるので、検査した結果をきちんと記録しておかねばならない。また売買したりするので家畜台帳が早くからつくられていた。それに貴重な労働力であるし、もし病気で倒れれば大損害だった。人間様より家畜のほうが大切にされていたのである。

この健康手帳の考えは、昭和五十八年に老人保健法が制定されるときに受け継がれ、国民の四十歳以上の者全員に配付されることになった。これはすべて八千穂村が発点になっている。健康手帳には自分で書き込む欄が多く設けられてある。自分で自分の健康を管理しようという考えからだ。若月先生は、役場の放送室に出向き、その記入の仕方を有線放送で直接村民に説明した。それを聞きながら、村民は予め配られた健康手帳をみながら記入をすすめた。自らの健康管理の第一歩であった。

小雪の中で健康健診始まる

地域の人々に助けられて

期待と不安のなか八千穂村健診の第一日目は、昭和三十四年十二月十四日、うその口区から始まった。

標高一〇〇〇メートルのうその口区は、気にしていたとおり小雪が舞っていた。

地区担当の衛生指導員さんや区長さん、婦人会の方々が、昔からの知り合いのように、人のよい顔で迎えてくれた。

会場の公民館は、大きな玄関から入るとそのまますぐ大広間で、ほとんど氷点下の外気と変わらない気温。区長さんたちがこの寒さに負けまいと、いろりにたくさんの薪をくべて、暖房を気づかってくれている。

急いで健診会場の設営をするが、なかなか思っていたようにはいかない。診察ベッドは長い座り机を二段重ねて、これに布団を敷いてできたが、三組の診察分の机や椅子が集まらない。何しろ椅子は六脚は必要で、近くの家から子どももの勉強机や椅子、ミシンの椅子、踏み台まで借りてもらう。

診察室のしきりは柱から柱へ綱を張ってこれにカーテンを吊す。じきに暗くなることを考え、電気のコードを巡らして、各診察や検査コーナーに電灯やスタンドなどを設置する。

村の人たちとてんやわんやで設営が終わり、検尿検便のコーナーをみると、いつの間にか、検査後の検尿コップを捨てる入れ物に、なんと肥え桶が据え置かれていたのには、驚きつつも感心した。

それでもスムーズに準備が整った陰には、前日からの衛生指導員さんや衛生部長さんのご苦労があったからだ。公民館の床やトイレ、台所の掃除や、障子の破れの繕い、水が凍り付いていないかの点検、いろりの薪の準備、さらに診察用の布団や枕などを予め用意してくれていた。

受付は衛生指導員で

この寒さに出足を心配したがそれは杞憂で、開始より三十分も早くから、人々が雪道をついて集まって、いろいろや火鉢の周りで賑やかに話を弾ませている。収穫や蚕のできぐあい、誰それさんがケガをしたなどなど。

村じゅうの人が一緒に顔を合わせることは滅多にないわけで、この健診は村で初めての一大行事になっている様子である。私たちもまたこういう井戸端会議から、仕事や暮らしなど、身近にいろいろな話が聞けて勉強になる。

受付では、衛生指導員の井出佐千雄さんが、衛生部長さんらと受付名簿をにらんでいる。まだ何人かの人が来ていないとのこと。

衛生指導員は来ない人の家を訪ね歩いて受診を勧めながら、村の人の思いなどの情報を集めてくる。うその口区は営林署の山仕事に就いている人が多く、冬は山に泊まり込みで家にいない人もいる。

初めての珍しさでほとんどの人が出てきていたが、雪道で老人が外に出たくないとか、「病気でもないのに医者に診てもらうなんて嫌だ」という人もいた。

もうもうとたつ煙と人いきれ。耳の遠いお年寄りの耳元に、大声で話しかける問診係の声。「これにおしっこをとって来てください」と、尿コップを渡したおばさんがなかなか戻らない。

「こんなきれいなコップにもったいない」と、なんと家まで壊れた急須を取りに行き、それに尿をとってきたのだった。また、体重計の上に乗ってくださいというと、これに腰掛けて動くともしないおじいちゃんもいる。

受ける人も検査の側も初めての体験であれば、説明も慣れないためか、真面目になっておかしなことが起こる。ざわざわと活気のある健診風景である。

血圧も上がるすきま風

炭や薪で暖はとっていても、戸や壁と柱のすきまから寒い風が入ってくる。腰や背中がジーンと冷えてきて、腕をまくって血圧を測るのさえ寒くて気が引ける。

しかし受診者は、防寒用に綿入れやネルの厚い下着で着ぶくれていて、袖をまくるぐらいでは測れない。やむなく「少しだけ脱いでネ」というそばから、バサツとそっくり肌着まで一気に脱いでしまうおばあさん。これでは血圧が上がってしまうと、あわててももう遅く、案の定血圧は一八二の九八とひどく高い。

血圧の高い人が続くが、国道から最も奥にあるこの山の中で、すぐ医者にかかってくださいとも言いかねる。この寒さでは脳卒中も多いはずだ。予防の難しさを教えられる。

衛生指導員の渡辺米人さんのところへ、「血圧の薬がほしい」という人が現れた。渡辺さん

は「虫下しの薬はくれるのに、どうして血圧には出さないのかと言われて弱ったよ」と言ってきた。

病院から来て検査や診察をするのだから、治療の薬も出すのが当然と思うのも無理からぬことで、「予防のための健康診断」という意味の理解が難しいことがわかった。

健診が終わって健康台帳を数えてみるが、どうしても人員と合わない。あちこち探していると、外から帰ってきた衛生指導員さんが、「今この台帳を持ち帰るおばさんに出会ったからもらってきた」というではないか。自分の名前がついているから、持ち帰って良いと思ったという。

ようやく片付けが終ったのは夜八時すぎ。婦人会の方々が手づくりの夕食を用意してくれた。うどんや煮物、キノコなどの味は格別で、身も心も温まり、一日の疲れを癒してくれた。

結果報告会に力を入れて

泊まり込みの健診も

二年目になると、健診にも少し慣れてきて、会場整備も改良されてきた。もうもうと煙るい

ろりの火を見かねて、役場の間島さんが各会場に炭俵を配ってくれた。

しかし煙いからは解放されたが、どうもムカムカと調子が悪い。診察室から出てきた寺島医師の顔も真っ青だ。炭火による一酸化炭素中毒になったようだ。

何しろ蚕の共同飼育所でもある公民館は、風が入らないように目張りがされている。ここで炭火をおこして何時間もあるのだからたまらない。インターンのM医師は頭痛と吐き気に、とうとう耐えられずダウンしてしまった。Sさんも外でゲーゲー吐いている。

戸外は零下五度以下だから窓も閉め切って、換気など考えていられなかった。しかし、外へ出てみると、その空気の清々しさが症状を急速に改善してくれる。以来「頭痛を感じたら外で深呼吸」が治療法になった。

うその口区では泊まりで健診をするようになった。雪の不安を思えば、三日分を泊まりで二日にした方が能率もよい。ちょうどこの公民館は、夏には林間学校をやっていて、中二階が宿泊できるようになっていて、台所も広く設備が整っていた。

夜になると、村の婦人会の方々や区長さんたちが、たくさんのご馳走を持ち寄ってくれ、ビールの栓が抜かれて、にぎやかに酒盛りが始まった。

村の男衆の冬の狩猟の手柄話には、身を乗り出して聞き、イワナ釣りのコツに笑い転げ、出されたおいしい料理の作り方などの話に花が咲く。ついに踊りや隠し芸まで飛び出し、井出秀

郷さんはお得意のカンカン娘を踊り出した。

外はしんしんと雪が降っており、村の人たちとの触れあいで、お祭のような楽しい時が過ぎていった。

雪に閉じ込められて

松井地区の健診ではとうとう雪に閉じこめられてしまった。大雪で迎えの車が下から上がって来なくなり、私たちが夜道を国道まで歩くことになった。

暗い雪の路、身体が冷え切らないように、皆で腕組みをすると自然と歌い出していた。「農民とともに」や「ともしび」「黒い瞳」などのロシア民謡、歌謡曲など知っているのを何でも歌っていた。

みんなでこんなふうによく連帯感がわいて、誇らしい気分にもなる。充実した気分でした。しか国道に出ると、懐かしいジープが待っていた。

受付の問診では、健康台帳に沿って卵や肉を摂る回数、酒・たばこなどを聞く。「新聞は毎日読むか」とか、精神環境として「家庭内・対外的・政治にはそれぞれ満足か不満か」などという項目もある。かなり立ち入った内容で、聞く方も聞きづらいが、当人は近所の人がそばにいれば、当たり前障りのない返答をすることになる。

反省会るとき、ある衛生指導員が「食事の問診はあそこではダメだな、おら家もそうだが、卵は病気のときぐらいで、週に何回なんてとらねえぞ」と、気がかりでいたことを指摘してくれた。そこで、食事も自覚症状といっしょに、カーテンの中の血圧のところで聞くことにする。

病人には往診して健診

穴原区の健診でのこと、衛生指導員の渡辺一明さんが、雪道を隣のおばあさんを背負ってつれてきた。「風邪っぽいし、雪で嫌だ」というのを、ようやく説得して来てもらうことができたという。

これにはみな感激し、指導員会で相談し、これを機に病気で家にいる人には、診察の切れ目を利用して、訪問診察の「往診」をすることになった。

この日衛生指導員の案内で訪ねた家は、天井が高く構えが立派で大きな家である。しかしそれだけに土間が広く、かまどや風呂が据えてあって、これに続く居間の温度はほとんど外と同じくらい寒い。

市川英彦医師は聴診器を自分の脇の下で暖めて、おばあさんの襟の間からそと胸の音を聞く。カゼは大したことはなく、暖かく寝ていればよいのだが、むしろ血圧がひどく高くて、放っておけない状況である。紹介状と処方箋を書いて、家族の方に病院へ薬をもらいに行ってもら

うように、手配することになった。うまく外来で受け止めてもらえるようお願いながら、細かくかかり方を説明する。

再び地区を回って結果報告会

三月初旬に全地区の健診が終わると、大急ぎで結果をまとめる。

健診はその結果をどう活かすかが大事なので、再び地区を回って結果報告会をするのである。地区ごとに問題がわかるようなグラフや、主な病気への注意などを図に示し、健康教育として力を入れる。

預かっておいた健康手帳に各人の結果を記入してこれを返しながら、結果の見方や数値の意味などを説明する。何しろ二人に一人は何らかの病気を持ち、高血圧が二五%、胃腸病、神経痛などの運動器疾患も多く、回虫卵保有率は二七%もある。しかも異常の八割ががまん型や気づかず型で、医者にかかっていない、いわゆる「潜在疾病」である。

大門・高根区の会場には約二百人もの参加者が集まっていた。

自分たちの地区の回虫卵が村で一位だとか、高血圧が何番目に多いなどとグラフで示されたりすると、会場はざわざわとどよめいて、医師の話を熱心に聞いている。「だから健診は結果が出たときからが出発で、この一年どう過ごすかで、来年の結果が楽しみになるんですよ」と

松島医師が締めくくると、みんな納得とうなずいて、夜の更けた会場を後に行った。

毎月一回の学習会に取りくむ

地域の保健活動家として

若月先生は、衛生指導員のことを「保健アクチーフ」と呼んでいる。アクチーフとはロシア語で活動家ということである。つまり衛生指導員は住民の中の保健活動家として、地域の中へ入り込んで、住民といっしょに健康管理活動を展開する役目があるというのである。かつてのロシアではこういう運動がさかに行われていた。

「保健活動家として役目をはたすには、少しは医学的知識も持たなきゃだめずら」と言ったのは役場衛生係の間島さんだった。それじゃあ、衛生指導員の学習会をやるうやということ、毎月一回、役場と病院の会議室で交互に学習会を持つことになった。

講師は佐久病院の医師や保健婦たちである。早速、寺島重信医師や磯村孝二医師たちが中心になって「明るい健康な村をつくるために」というテキストがつけられた。

衛生指導員は何をめざしたらよいかという基本的な点から始まって、人体の解剖や具体的な

病気の症状や予防についての知識を学ぶようになっていた。規模は小さかったが、ちょうど今実施している「佐久地域保健大学」のはしりといった感じであった。テキストはたちまち二十冊を超えた。

病気としては、農村で多かった脳卒中、胃の病気、腹痛、貧血、がん、救急処置などがとりあげられた。寺島医師は、「われわれは常に村にいないし、衛生指導員は地区で住民といちばん接しているわけだから、いちばん住民のことが分かる。住民の症状を聞いてちょっとおかしかったら、すぐ出浦医師のところか病院へ送ってほしい。そのために大ざっぱでよいから基本的な知識を身につけてほしい」と強調した。

学習会は大体夜にやったが、衛生指導員は自分のふだんの仕事を終えると、バイクを飛ばして会場に集まってきた。早く知識を得ようと、衛生指導員は競争で勉強に打ち込んだ。

病名はドイツ語で話す

ここで問題になったのは病名のことである。衛生指導員は地区で患者が出た場合、それを医療機関へつなげる役割もする。その場合病名を表に出してはいけない。それは他人には秘密にしておく必要がある。つまりプライバシーを守らなければいけないということであった。

これはとても大事なことで大分議論したが、結論として、病名はドイツ語で話そうとい

うことになった。そこでドイツ語の勉強が始まった。例えば、急性虫垂炎は「アッペ」、がんは「カルチ」、胃は「マーゲン」、手術は「オペ」等々である。

やがて病院との連絡には、衛生指導員は得意になってドイツ語を使うようになった。「あの人、アッペだったね」とか「カルチでオペしたけど、経過はよいようだ」とか。しかし住民には悟られないように注意した。ときどき住民から「カルチって何だ、おい」と聞かれると、「そんなことは、おめえたち知らなくてもいいんだ」という調子だった。

衛生指導員に病院のカルチを見せて、どんな病気かという実習をしたこともある。ところが、指導員の渡辺一明さんは、「ドイツ語どころか日本語で書いてあっても、医者の字は読めねえ」という。たしかにそのとおりだった。医者自身、他の医者が書いた字が読めないこともあるのだから。この実習は失敗だった。

この学習会は、衛生指導員に大いに評判はよかったし、また役に立ったようだ。

後に衛生指導員会長になった小宮山則男さんによると、指導員活動のなかでいちばん印象に残っていることは、この夜の学習会だったという。とくに農村に多い高血圧、心臓病などの初期の手当法を図解で説明してもらったことが健診活動に大いに役立ったとのことである。

指導員の名刺をつくって紹介

井出守さんは、村に保健婦が一人しかいなかったもので、保健婦の下ばたらき役になって担当地区をたび回っていた。ある家で腹が痛いといって温めていた人がいたので、これは学習会で聞いたとおり、盲腸（急性虫垂炎）かもしれないと思い、すぐ病院へ行けとすすめた。病院で検査をしたところやはり盲腸で手術をした。そういう人が二人ばかりあって、それからは衛生指導員ということで、信用されるようになった。

このようなことで、具合が悪くなったら、まず衛生指導員のところへ行けということが、各地区では当たり前になっていった。

病人を紹介するのに、役場では衛生指導員の名刺をつくってくれた。これは、どの衛生指導員から紹介されたか分かるようにというためであった。

衛生指導員はもちろん診断はできないけれど、こういう症状があるからと名刺の横に書いて病院へ送る。言わば紹介状で、それを持っていくと、病院では優先的に診てくれた。これは急病の場合には村民にとっても喜ばれた。まだ消防署などない時代に、指導員は当時の救急医療の一端を担っていたわけである。

地域の中での衛生指導員の役割は次第に大きくなっていった。単に年に一回の健康健診の人集めをしたり、手伝いをするというだけではなく、保健婦を支えながら、住民のふだんの健康

上の相談役となっていた。これが医療の専門家ではなく、地域の住民から生まれた活動家であるということに大きな意味があった。

学習会の大きな成果の一つといえようか。

暖房入れて医療費が減った

寝ている布団に霜がつく

佐久の寒さは格別で、寝ている襟元の蒲団に霜がつき、茶碗の水も凍る。洗濯物は干す前に瞬時に凍りつき、ぴんと立って曲がらない。健康どころか性格や趣味などの文化も、歪むのではないかとさえ思えてくる。

この寒さと身体との関係に着目した若月院長は、動物実験で寒冷の影響を科学的に分析し、暖房の必要性を訴えた。そこで昭和三十六年の冬から、農家にストーブを使ってもらい、暖房の心身への効果を調べることになった。

対象地区は、衛生指導員の井出佐千雄さんがいる佐口区が選ばれた。佐口区の八十六戸の農家のうち、構造が似通っていて、ストーブを使う十五戸と、何もしない対照の十五戸の家を、

佐千雄さんや区長さんに推薦してもらった。

このストーブ実験には、なんとしても衛生指導員さんに指導と協力をしてもらう必要がある。「この前若月先生が来て、やり方や準備の指図などをしてくれたから、俺も本気でやらなきゃと思ってるだよ」と、佐千雄さんから頼もしい答えが返ってきた。

そこで佐千雄さんが案内して、健康管理部の井出秀郷課長や保健婦たちが名簿と地図の家を確かめながら各家の事前調査を始めた。役場から借りた各家の間取り図を参考に、寝室や居間、食事の場所などを聞いていく。土間やトイレ、風呂、居間の室温も測定する。

零下五度から一〇度という厳寒の中で、どの家も北側の部屋は障子一枚で外と隔てられているにすぎず、寝室もたいがいそういう北側にあった。夏場は蚕を飼う大きな家でも、風呂やトイレは母屋から離れた外にあって風がよく入る。

「昔から冬は寒いのが当たり前、いろりとコタツで暖まればよい」と誰もが思い、室温を上げるという発想もないところへ、石炭ストーブがやってきた。

北海道式ストーブを入れる

はじめは躊躇した家もあったが、石炭も配ってくれるなら悪い話ではないし、面白そうだと、該当農家はみんな引き受けてくれた。ストーブをたく部屋は、目張りなどですきま風をなくし、

熱が逃げない対策をし、室温測定や生活の記録をしてもらうことにした。

ストーブは「北海道式炊飯兼用貯炭式」で、一度火がつけば夜通し少しづつ燃えている。翌朝は石炭を追加するだけで燃え続け、ナベをかけて煮炊きもできるという、北海道ならではの優れたものだ。

しかし、石炭の扱いに慣れない村人には、火の焚き付け方が難しい。それに、いっぺん夜中に火を落としてしまい、早朝改めて石炭をたくというような面倒なことをしていた農家が多かった。

あるおばあさんは次のように言う。「ストーブ屋さん、このストーブダメだから薪ストーブに代えてもらえねえかい。おらちには薪がたくさんあるし、薪だとコタツの火もとれるし、第一石炭ストーブは火がつきにくくて、朝と夜二回も火おこしをしていやす」。

とうとう井出課長は「ストーブ屋さん」にされてしまったが、それではと、佐千雄さんの家に連日泊めてもらい、佐千雄さんといっしょに石炭のたき付け方などを指導して回ることにした。保健婦たちも毎月二回は佐口区に通い、生活の様子や室温記録などを見せてもらった。

しかし、部屋の温度はなかなか上がらない。「おばあさん、ストーブの燃え具合はどうでやすかい」と聞くと、「実は、おじいさんに消しとけと言われてとめやした。一〇度もあるし、あまり暑いと具合が悪くなりやすでなあ」との答え。

室温十度は画期的な暖かさ

石炭は月平均六かます呎分配され、一日中焚いて部屋の中を常に暖めておいてもらいたいのだが、厚着のくせもあって、よく燃え出すと暑すぎると言って消してしまうことがしばしばだった。「ストーブを入れない農家の日中室温が零下二度から四度だから、一〇度はまだ低いけれども、画期的な暖かさだ」と佐千雄さんも言う。

一方、ストーブを入れない家からは不満が出た。対照農家の家は何かしないわけだから、以前と同じく寒いままである。自分の家も同じようにストーブを入れてくれという。しかし実験を始めたのに、対照農家をすぐにやめるわけにもいかない。これには佐千雄さんもさすがに困ったようだ。

厳冬期を過ぎた三月の訪問では、「今年の冬は本当に助かりやした。仕事ははかどるし、炊事が楽になってうれしかった。一番助かったのはヒビができなかったことでやす」とか、「肩こりもなく、農協のトクホンは買わずじまいでやした」などと、お母さんたちのうれしい答えが返ってきた。「今までコタツで食べていた食事も、ストーブ囲んで楽しく食べれるし、部落の寄り合いには、ストーブの家が選ばれているそうだよ」と、井出課長も情報を集めてきた。

実際の家のにも煮物のナベやゆげの立つやかんがかかっていて、ストーブ生活の快適さが見

えていた。

アンケートをまとめたところ、足腰の痛みが取れ、血圧値の改善や風邪など病気になる人が少なくなっている。そのため医療費もストーブを入れない家に比べて減っている。夜なべ仕事がかどる、みながその部屋に集まり団欒が持てるなど、心身に健康をもたらすことが示された。

実験が終了して、対照農家をはじめ他の農家もストーブを入れる家が多くなった。暖房がなくても体にいいということが、実感として分かってきたのだ。この実験はまたとない実践的な教育となった。

農夫症対策に農民体操を始める

雪道の中の農民体操

芽を吹きはじめたばかりの白樺林が山道を覆うように続いている。八千穂村大石区にも、ようやく春が訪れようとしていた。だが、木立から洩れてくる僅かな陽の光を打ち消すかのよう、周囲を流れる風は頬を切るように冷たい。遠くに霞む八ヶ岳は、しっかりと雪をかぶった

まだまだし、屋根の雪も坂道の多い道路の雪も、まだ多くを残したままである。

やがて、その寒さを払い除けるように、「一、二、三、四、…」と林の向こうから元気な掛け声が聞こえてきた。見ると、道の真ん中で、約二十人の人たちが掛け声に合わせて体操をしている。野良着の人も、割烹着を着たままの人も、赤ん坊を背負ったままの人もいる。毎日大石区で続けられている農民体操である。

体操を終えてさわやかな顔つきのおじいさんに「体操をやってみてどんな具合ですか」と聞いてみた。「いやあ、肩こりも腰の痛みもだいぶよくなりやしたなあ」との返事。「だいいち疲れがとれるねえ。体が軽くなった感じだ。中には便秘しなくなったという人もいるよ」とのこと。大石区の人たちは農民体操をとっても楽しんでいるようだった。

体操の音楽に民謡やわらべ歌

佐久病院で農民体操をつくって、八千穂村の大石区でそのテストを始めたのは、村ぐるみの健康管理がはじまって三年ほど経った昭和三十七年のことである。

当時の農作業はまだまだ筋肉労働が主だったから、過労からくる肩こり、腰痛などが非常に多かった。検診の問診で聞く「農夫症」の調査でもそれははっきりしていた。それをなんとか解消しようという若月院長の考えで農民体操が始められた。

実際に体操のやり方をつくったのは、当時院長室係だった内田直人さんで、「家の光体操」などを参考にして、疲労回復のために農家の人が日常生活の中で気軽にできる体操をつくりあげた。また親しみやすくするためには音楽も大事だということで、当時佐久病院にいた永田泉さんが、ふだん皆がよく知っている日本民謡やわらべ歌をもとにピアノ伴奏をつけた。

これを八千穂村全体で広める前に、本当に体操が効果があるかどうか、一年間テストしてみようということで、対象地区として大石区が選ばれたわけである。

大石区では、衛生指導員の菊池勇治郎さんがその担当をやることになった。テストをやるには、まず農民体操そのものをよく覚えてもらわないといけない。内田さんは何回となく大石区へ足を運んで指導したが、その都度、菊池さんとその妻つる子さんが熱心に区を回って人集めをしてくれた。

はじめは、「いい年をして今さら体操なんて」とか「そんなこと恥ずかしくてできるか」とか「そんな暇なんかないよ」とためらいがちな人が多かった。だから内田さんも菊池さんも、まずその意義を理解してもらうために、足繁く区を回らねばならなかった。いろいろを囲んで話し合いをしたり、劇や映画などをみてもらって、その意味をよく説明した。

また、実際に体操を教えるにしても、みんなが集まって体操をやる恰好な広場がない。やむなく公民館前の道路を体操場にした。現在の道幅の半分もなく、石がゴツゴツ、雨が降れば流

れになり、雪が降ればぬかるみとなる道路だったが、区の人たちにとっては大切な体操場になった。
た。

村の有線放送で号令と音楽を流す

二、三カ月経つうちに、みんなすっかり体操を覚え、体操をやるのが楽しみになってきた。一日三回、あちこちから農民体操の掛け声が聞こえてくるようになった。

しかしちょっと困ったことが起きた。皆で体操をやるようになって、これを聞きつけた新聞、雑誌、放送などのマスコミが、時間を問わず大挙しておしやるようになったのである。写真を撮るから、いますぐ大勢集めて体操をしてくれとか、田んぼの畦道で体操をしてくれとか、ともかく注文が多い。これには菊池さん夫妻も困った。とくに忙しい蚕の時期には一刻も手を離せない。

しかし考えてみると、マスコミに取り上げてもらうことは、体操を普及する意味では大変有難いことである。菊池さん夫妻は、忙しい仕事の合間をぬってできるだけ協力することにした。そのお蔭で、後になって全国からいろいろ問い合わせが来るようになった。

特筆すべきは、三十七年秋の小学校の運動会には、大石区のおっ母さんたちが、総出で農民体操の特別出演をしたことである。これが運動会始まって以来の出来事ということで、村中の

評判になった。

一年間のテスト期間が終わり、その効果がはっきりしたので、全村でそれを実施することになった。朝、昼、晩と一日三回、村の有線放送で体操の号令と音楽が流れるようになった。やがて農民体操のソノシート（ビニールでできたうすいレコード盤）がつくられ、販売されて、農民体操は次第に全国に普及していった。

今でこそ、体力づくりとか運動の必要性とかが叫ばれているが、当時はそんなことは殆ど省みられない時代だった。その中で、農民体操が先頭を切って、そのきっかけをつくった役割は大きいと言わねばならない。

現在は朝一回となったが、八千穂村では、以来四十年間も放送が流れている。菊池さん夫妻の努力のお蔭である。今でも毎日体操が続いているというつる子さんは、「あの当時はみな体操を喜んでやったねえ。私も今でも元気なのは体操のお蔭だよ」と、八十二歳になる体をピョンと飛び跳ねて見せた。

苦勞と悩み——受診率の低迷

人に裸を見せるのはいやだ

村ぐるみの健康管理が始まってから五年の歳月が流れた。年一回の健康診断は、次第に住民の中に定着しつつあったが、必ずしも全部が全部そうとはいかなかった。中には健診はどうしてもいやだという人もかなりいた。

衛生指導員会長だったトラさんは、こう述懐する。「あの頃は、人に裸を見せるというのは本当にイヤだったんだ。それに食事の状況を人に聞かれることはなによりもつらかった。とくにお年寄りには余計そうだった」と。

裸を見せるのはイヤだということのなかには、裸自身よりも、ボロボロの垢だらけの下着しか着ていないのに、それを見せるのはとても恥ずかしいという気持ちもあったと思われる。それだけ皆が一様に貧しい時代だった。

健診に來なかつた人を後で衛生指導員たちが回って、その理由を聞いてみたことがある。その結果次のような点があげられた。

いちばん多かったのは、「ふだん健康でどこも悪くないから」というのであった。「自分の体

は自分がいちばんよく知っている。現在どこも具合わるくないし健康だから、健診なんか受ける必要はない」というのである。

次に多かったのは、「病気がはつきりするのがこわい」という答えだった。すなわち「自分はいま具合が悪い。だから病気をみつけれられるのはとても怖い。もし入院して手術が必要だと言われたら困る」というのである。

当時は入院して手術になると、一家が破滅するくらい莫大な医療費をとられたから、それを恐れていたということもある。そのほか、「仕事が忙しくて受けるひまがない」とか、「病気で医者にかかっているの」というのもあった。

以上、根本的には、健康診断の意味がまだよく分かっていないということになる。まだまだ健康教育が必要であった。

俺たちはモルモットか

それに健診の際の問診、なかでも食事の状況を聞かれるのがイヤで、健診へ来なくなったという人もかなりいた。これはトラさんの言うとおりであった。食事の状況は昭和三〇年代当時はあまりよくなかった。なにしろ盆と正月しか肉を食べないという時代だったから、食事の内容を問診で聞かれるのは受診者にとってつらいことであった。だから決して本当のことは答えな

かった。

「家では卵はどのくらい食べていますか」という問いに、「大体皆毎日一個は食べてやす」とお嫁さんは答えるのだが、その家のおじいさんに聞くと「一週間に一個ぐらいかな」という返事。子どもにきくと「全然食べてないよ」という調子だった。そこで問診のやり方を大勢の前で聞かずに、一人ひとり分けて聞くやり方に変えたのであった。

一方、健診を機会に栄養調査なども本格的に始まって、地域の栄養実態が分かるにつれて、食生活に皆が気をつけるようになった。トラさんの家は店をやっていたが、やがて毎日肉や魚が売れるようになったという。

受診率はすぐ他の地区のものと比較される。衛生指導員の集まりのとき、「お前の所ばかりなぜそんなに受診者が少ねえだよ」とすぐ話が出る。「よしきた、こんちくしょう。来年をみておれ」とすぐケンカになる。

衛生指導員が受診勧誘に回るといろいろいや味を言われることもあった。「この健診は佐久病院がデータを集めるためにやっているんじゃないか」とか「俺たちは病院のモルモットか」とか、最後には、「お前たちまで病院の手下になってやっているだか」とまで言われることもあった。その度ごとに衛生指導員はくやしき思いをした。

だから衛生指導員たちはよく酒を飲んでうさ晴らしをした。「いやだという人はもういい

じゃねえか。早く死にてえだから、もうほっとけ」と、自暴自棄になってしまふこともあった。また「おれの地区の受診率が下がってきたのはおれの責任だ。おれは責任をとって衛生指導員を止める」と言い出す指導員も出てきた。そこで若月院長から、「あまり受診率の数字だけにこだわってはいけない。一人でもいいから健康の大切さを理解してもらうことが大事なのだ」と諭され、やっと納得したという一幕もあった。

夜八時までの検診をやることに

それでも受診率を上げることに衛生指導員たちはこだわった。それがすぐ衛生指導員の活動の評価につながると皆考えていたからである。衛生指導員たちは、自分の担当区の未受診者の家を毎晩尋ねては、健診の意味をよく説明して回った。ときには夜半すぎまで話し合うこともあった。

勤め人が増えて、昼間の健診が受けられないということもあったので、健診時間を延ばす工夫もした。病院と相談して、地区によっては健診の受け付けを夕方六時までと一時間延長した。その結果、勤めから帰った人がどっと健診に訪れるということにもなった。だから実際に健診が終わるのは八時近くになるのがしばしばだった。

それから寝たきりなどで、健診に來られない人には訪問健診も始めた。いわば往診による健

診だった。これはお年寄りにはとても喜ばれた。

ともかく衛生指導員たちは、受診率を上げるために競争で努力した。ケンカもよくしたが、これは仕事熱心の結果からであった。

納屋工場で電気部品の内職のしごと



Ⅲ

衛生指導員と手を携えて

トラさんと衛生指導員たち

飲むというより、酒を食った

衛生指導員会長の山浦虎吉さん（通称トラさん）と佐久病院の井出（秀）さんと役場衛生係の間島さんは、八千穂村のトラの三人組と呼ばれた。健康管理の中心的な世話役ということだけでなく、酒をよく飲んだということでの名がついている。井出村長や若月院長もよく酒を飲んだから、この二人を入ると五人組ということになるのか。

井出村長は酒を飲むと、よく「親沢追分」を歌った。小諸追分のルーツともいわれる親沢追分は、村長が歌うとまた違った味わいがあった。また村長は宴会で酔っぱらうと必ず「酋長の娘」を踊る。私のラバさん酋長の娘、色は黒いが南洋じゃ美人、という文句で始まる戦時中の歌謡である。赤い腰巻きをまとうてこれを踊る村長はいかにも天真爛漫で、日頃の怖いイメージは全く無かった。

トラさんの酒好きは村でも有名だった。「酒を飲みながらやっているうちにいい考えが浮かぶ。これを酒知恵と言うんだ。飲むというよりも酒を食ったね」とトラさんは言う。だが、酒を飲むと他の衛生指導員と衝突することも多かった。これがちょっと問題だった。

トラさんは間島さんともよく喧嘩した。ある日、衛生指導員会で、間島さんが「消毒液の予算がないから今年は消毒はやらない」といったので、トラさんが「馬鹿野郎！ 人をただ使っていて、消毒出来ないとはなんてことだ」と怒った。役場の食堂で間島さんと取っ組みあいになり、ようやく左千雄さんがとめた。

すぐ取っ組み合いになる

後日の指導員〇Ｂ会での会話。トラさんの他に井出左千雄、井出守、渡辺一明、佐々木喜一郎さんたちが飲みながら話している。

佐千雄「間島さんもトラさんも少し酒を飲むと酒乱になる。どっちも負けず嫌いだから。間島さんも『それならおめえ、やるならやってみろ』ということになって喧嘩になる。大体少し飲むところなる」。

トラ「少しじゃねえ。たと飲んだんだ」（笑い）。

佐千雄「たと飲んでならまだいいが、たと飲まねえうちにそうなるから困るんだ」（笑い）。

守「間島さんも酒癖が悪いところがあったが、会長のトラさんも強引なところがあった。会長の強引さにつられて、われわれも一所懸命に健診の手伝いには出てきた。『何でお前、

出て来ねえんだ』とすごく怒られたからねえ」(笑い)。

一明「たしかにそれはあるね。今でいう民主主義というもんじゃないな」(笑い)。

守「ありや資本主義だ。強引だもの」(笑い)。

トラ「でも、みんなよく俺についてきてくれたなあ。まあ、一杯飲んでくれや」(笑い)。

喜一郎「結婚しているのはトラさんだけだったからね。それだからよかったんだよ」。

佐千雄「あとはみな独身だったからね。トラさんには頭があがらなかった」。

トラ「強引と言われるけど、俺と間島と村長はいつも一緒にいて話していたから、やり方が似てきた点があったかもしれないな」。

佐千雄「俺は直接村長のところへ行つて、トラさんと間島さんがいるからいやだ。指導員をやめさしてくれと言ったことがある。そしたら村長に大変怒られた」。

トラ「後で村長に呼ばれて、『お前、だいぶ酒飲んで悪たれたそうじゃないか』と言われたが、『酒飲めば誰だって悪たれるわい。村長が酒飲んで踊るのと同じだわい』と言ったら、『そりゃそうだ』と村長が納得した。これで一件落着き」(笑い)。

トラさん大いに怒る

トラさんは思ったことは何でも率直に口に出す。それがけんかになる原因でもあるのだが、

また一面、表も裏もないのが彼の良いところでもあった。

当時、健康管理を担当していた松島医師が、トラさんからひどく怒られたことがある。衛生指導員の同僚であった菊池勇治郎さんが亡くなったときと、それからずっと後になって、役場の間島さんが亡くなったときである。いずれも悪性腫瘍による手遅れであった。

「健康管理をやっている、なんで手遅れで死なせなきゃならねえんだ。本人の不注意もあったかもしれないが、こんな健康管理なら止めてしまえ」とトラさんはいきまいた。松島医師は返す言葉もなかった。全くトラさんの言うとおりであった。

当時の健診内容のこともあるが、がんの早期発見はなかなか困難で、健診を受けていても、たまには手おくれが出ることがあった。これでは健康管理の意味も薄れてしまうことはたしかだ。

とくに農民体操を熱心に推進してくれた菊池雄治郎さんは、トラさんの姉のご主人というところもあって、トラさんは全く機嫌が悪かった。その後、一カ月は口も聞かなかった。

間島さんの死は、トラさんだけでなく、病院の担当者たちにも相当ショックを与えた。間島さんは村の健康管理の実際の責任者であったし、本当のところ間島さんがいたからこそ、ここまで健康管理が進んだのだった。最後は助役になったが、「将来は村長をやるんだ」と意気込んでいただけに、その夢が叶えられず、さぞかし悔しい思いだったろう。トラさんも長年のけ

んかともだちを失ってすっかりしょげていた。

新しく佐々木庫三村長に

やがて昭和三十九年、村長選があり、井出村長にかわって新しく佐々木庫三村長が登場することになる。

井出村長は多少ワンマンのところがあったが、佐々木村長はおだやかで、強引なところは少しもなかった。ただいちばん心配したのは、村ぐるみの健康管理がこのまま続けられるかどうかということだった。しかし、心配は無用だった。健康管理の方針は少しも変わることはなくそのまま継続された。

佐々木村長は、衛生指導員の活動を高く評価していた。「健康管理のことはもちろんだが、村長が何かやろうとすると、指導員のみなさんは、殆ど手足となってよくやってくれた。だからとてもやりよかった」と当時のことを語っている。トラさんについては、「口は悪いけど、足まめでみな面倒をよく見ていたね」と。

トラさんは、翌四十年、衛生指導員会長のまま村会議員に初当選した。衛生指導員の村会議員第一号であった。

春の息吹に英気を養う「タラの芽会」

健診の反省会を兼ねて

八千穂村と佐久病院との交流の場として、「タラの芽会」という集まりが毎年持たれているが、このことについて少し触れておかねばなるまい。それを持つようになったのは、次のようないきさつがあった。

山間部である松井区や大石区の健診では、夕飯時によくいろいろな山菜料理がいただけた。衛生部長さんは、「これはタラの芽だ。幹はトゲがあつて採るのに大変だが、春一番の出たての芽は柔らかくて旨いんだ。たくさん採って塩漬けしておいて、お客さんが来たときとか正月などに、塩抜きして、こうしてゴマ和えなんかにして食べるんだ」「これはウドだよ。ぜんまいもあるだろ」などと紹介してすすめてくれた。聞けば、春のうちから冬の健診に向け、たっぷりと確保しておいてくださっている貴重なもの。

昭和四十年代の私たちの暮らしには、山菜採りなどのゆとりもなく、それまで食べたこともなければ、生の姿も知らなかった。それで興味深くあれこれ聞きこむことになって、ついに誰ということなく、「今年の春はみんなでタラの芽採りをしよう」ということになった。

それがきっかけとなり、役場、健康管理部、衛生指導員と、大石区や松井区、八郡区の衛生部長さんなどで、ひと冬の健診のご苦労さん会を兼ねた自然に親しむ交流の場「タラの芽会」となった。

青い空のもとの「山の味」

まずみんなで手分けしてタラの芽を採りにいく。大石区からかなり奥まった静かな駒出池のほとりに荷を下ろして、造林小屋のあたりまで山道をたどる。

トゲだらけのタラの木にも驚いたが、Yの字の形に工夫した木の枝で、トゲの幹をたぐり寄せて、芽が出たてのやさしい形のタラの芽を、難なく採っていく衛生指導員らの、手慣れた名人ぶりにも驚かされた。

女性たちがトゲに引っかかれてキャーキャーとタラの芽に気を取られているうちに、うその口区の衛生指導員古屋光信さんが、いつのまにか「ほら、ワラビとコゴミもいい時期だよ、病院のおみやげに持っていけや」と、どっさり抱えて森の中から出てくる。あのゼンマイみたいなシダの芽がおいしいコゴミだということも初めて知った。

ひと足先に天ぶらの準備をしてくれていた、役場の衛生係佐々木房子さんたちの所に集まって、いよいよ収穫物をいただく番になった。大鍋にたっぷりの油に、採りたてのタラの芽やウ

ドの葉、コゴミなどを粉にくぐらせてどんと豪快にあげてゆく。そのほくほくとした山の味は、身も心も浄化してくれる。まさに「山の味」のおいしさだった。

でも本当は、「こんなに大きな葉になっているのを採ってきて」と、困りながら揚げたと笑い話にされたりした。男性軍はジングスカンに取り組んで、さかんに焼けたのをサービスしてくれる。山歩きの後のビールのうまさと相まって、青い空のもと、健診での失敗談などに花が咲いた。

そして、運転免許を取りに山梨に泊まり込み、二週間で取ってきたなどと、井出佐千雄さんが、その時の顛末をおかしく披露してくれる。「じゃあ、オレもそこに行く」と身を乗り出して聞く指導員がいたり、最近できた村の工場の仕事の様子や、近くにスキー場ができるといった話を聞くチャンスになったりする。何かの力で村が変わっていく様子が感じられた。

自由なふれあいの良さ

また、「あのとき保健婦さんが、洗剤を止めて石鹸にしたかどうかと調べてくれて、すっかり手の荒れがなくなって良かったです」と、衛生部長さんの家のお嫁さんが手を見せてくれて、何年か前の健診でのことを確認できたりすることもある。

健診や報告会では、そのことに追われてせかせかと時間が過ぎてしまうばかりで、本当の交

流とはいえず、こうした自由なふれあいこそ、みんな仲間といった連帯感も醸し出され、理屈を越えた交流の重要性が実感される。

やがて八ヶ岳の空が真っ赤な夕焼けとなり、みんなで輪になって「朝霧晴れて」と病院の歌を歌い後かたづけをするのだが、村の人たちの豊かで優しい包容力に包まれ、心から癒されて解散しがたい思いが募ってくる。

やがて、もっと多くの職員が参加して、毎年恒例にしていこうということになり、健診に係わってもらっている院内各科に呼びかけ、医局や研修医も参加するようになった。役場からも村長さんや助役さんも見え、総勢四十人を越える大交流会になった。

昭和五十年代には、午前中は松井のグラウンドでソフトボール大会で汗を流してから、山菜採りをし天ぷらに取り組むといったパターンが定着してきた。

指導員の上手なピッチャーぶりや、村の担当係が良く打てる野球人だったといった、今まで知らなかった側面が知れて、これもとても楽しい交流である。

まあお蔭で自分たちの運動神経の弱さも披露することになったのだが、似たような人が何人かいると、これもまた仲間意識が強まるから、捨てたものではない面白さがある。大らかな昭和の時代ではあった。

現在では参加者は百人を越え、会場も山ではなく、平地の老人福祉センターの横に移ってし

まったが、ちょっと残念な気がしないでもない。

体中浴びた農薬・ホリドール

除草剤で大やけど

昭和四十一年の九月のことである。八千穂村の森林組合から、佐久病院の松島医師のところへ電話がかかってきた。「今、除草剤で体じゅう大やけどした人が出た。病院へ送るから、すぐ診てくれ」と言う。

やがて二人の男性が担架に乗せられて病院へ運ばれてきた。診察の結果、とくに下半身のやけどがひどく、早速入院となった。事情を聞いてみると次のようである。

二人は、村有林で除草の作業をしていた。使った薬剤はクロレートソーダ（塩素酸塩）という除草剤だった。これは山林の木々の間に生えるササやススキなどを枯らすためによく使われていた。

ところがこの薬剤は発火しやすいというのが特徴である。ズボンに薬剤がついていたのを知らないで、タバコを吸ったところ、それが引火したということだった。

後になって、村の保健婦の井出今さんが「私、除草剤で大やけどしたと聞いてびっくりしたんだけれど、除草剤が燃えるなんて知らなかった。除草剤といっても随分こわいものだわね」と述べたくらいだから、撒いた本人もそんな危険な除草剤だとはよく知らなかったであろう。これは山林除草剤として古くからあった薬剤だが、ふつうの田畑には使っていないので、一般の人が知らないのも無理はない。だが、この種の薬剤はアメリカがベトナムの枯葉作戦で大いに使ったものだ。空から撒いて灌木や草が枯れたところで、全部焼き払ってしまうのである。二人はかなりの重症であったが、幸い命だけはとりとめた。

園芸作物の団地化へ

かつての八千穂村の農業といえば、コメとカイコ（養蚕）が主であった。山間地とあってコメの収量は限られている。カイコの収入でなんとか生計も保てたので、村の人は「おカイコさん」と呼んでカイコを大事にした。しかしカイコの仕事は、主に女性にまかされていたので、女性にとつては大変な重労働であった。

当時のことを佐々木庫三村長さんは、「嫁さんなどはみなやせ細ったね。稚蚕のときは夜昼なかったし、早蚕になつてもいい繭をとろうとすれば、夜も目をこすりこすり、がまんして桑をやる。そういうがまんが重なるから、繭があがったときには、皆げっそりとしていた」と述

べていた。

そのうち繭の値もだんだん下がり、コメとカイコだけではやっていけないということで、穂積農協と畑八農協（後に合併して八千穂農協となる）では、園芸作物の団地化を図るという方針を立てた。

昭和三十年代後半から四十年代にかけて、リンゴの団地、キクの団地、野菜の団地が次々とできていった。だがこれを機会に、一方では農薬の使用量が飛躍的に増えていったのは当然だった。

古くから使われていた硫酸ニコチンやボルドー液と並んで、果樹や花には、戦後開発された新しい合成化学農薬が次々と使われるようになった。

最強の農薬・ホリドールが登場

キクの栽培にいちばん使ったのはホリドールであった。殺虫剤として当時ではいちばん強い薬剤だった。

しかも皮膚からの吸収がとてもよい。諏訪地方で、ホリドールを希釈するのに、素手でかき回しているうちに意識がなくなり、ついには亡くなったということが新聞に出て大きな話題になった。

健康管理を始めた八千穂村の住民といえども、農薬についての知識は十分ではなかった。農薬を撒くのは朝夕が主だったが、夏場の散布だからどうしても薄着だし、上に着るものもふつうのカップだった。マスクも簡単なガーゼマスクだから、どうしても体に吸収してしまう。

当時、農協の営農技術員として八千穂村を担当していた清水喜一郎さんも、防具のことは十分指導はしたけれども、なかなか思う通りにはいかなかった。

だからホリドール散布後、多くの人は「具合が悪いや」と言って、午後は半日家でごろんとして寝ていた。「ホリドール撒いたから、今日は半日休みだ」と決めている人もいた。皮膚障害も多く、キク消毒を毎年続けて全身の皮膚病を起こし、三十年経って未だに治らない人もいる。

リンゴには硫酸ニコチンをよく使ったが、これもしばしば中毒を起こした。清水さんによれば、夏場になると、ホリドールと硫酸ニコチンだけで、入院や病院通いをする人が村だけで十人はいたという。

四人に一人が中毒症状を経験

そういうなかで、衛生指導員会では、「もう少し、農薬のことを知らなきゃいけないのではないか」ということで、勉強会で農薬のことを取り上げることにした。佐久病院の松島医師た

ちを呼んでいろいろ話を聞いた。その結果、農薬の影響は散布者だけでなく、農作物に残留したり、環境を汚すこともあるということを学んだ。

しかし、なんと言っても直接農薬を撒く散布者自身の健康上のことがいちばん心配である。しかも実態はよく分からない。そこで佐久病院といっしょに「農薬使用者健康カレンダー」を作って、散布した後にどんな症状が出るかを毎日つけてもらうことにした。

これは、カレンダー式になっていて、毎日、散布の有無、散布した場合はその農薬名、散布時間、防具の状態、散布した後どんな症状が出たかなどをつけることになっている。それに合わせて健診もやることにした。

対象地区は、キクを主に栽培している穴原・崎田区と佐口区である。担当は前者が衛生指導員の渡辺一明さん、後者は井出佐千雄さんがやることになった。

調査は、昭和四十一年の六月から九月まで行われた。その結果はとてもショッキングなものだった。頭痛や頭重感などの軽い症状も合わせると、農薬を多く使うその四カ月間に、男性では三人に一人、女性では五人に一人、平均して四人に一人が中毒症状を経験していたということが分かったのである。

また、マスクや手袋は殆どつけず、顔に液がかかっても直ぐ洗うどころか、「涼しくて気持ちいいや」などという人もいて、農薬知識の不十分さが浮きぼりにされた。

これではいけないと、早速調査した地区では、散布者の健診報告会も合わせて、農薬使用にあつての防具の徹底など、予防教育に力を入れることになった。

その結果、次第に農薬の怖さが分かつてきて、防具にも注意するようになったのはよかったのだが、逆に「あれを飲めば死ねるぞ」ということが伝わって、自殺に農薬が使われることが多くなった。農家だから、農薬はいつでも手に入る。自殺を防ぐ手だては甚だ難かしい。一難去つてまた一難であつた。

健康知識は上がったけれど

潜在疾病が七割もあつた

衛生指導員たちの懸命のとりくみによって、村ぐるみの健康管理も漸く軌道に乗ってきた。検診によつて次々と病気が発見され、早期に治療がなされるようになった。ところが驚いたことに、発見された病気の七割が、今まで医師の治療を受けていないということが分かつたのである。

その理由を調べてみると、いろいろ社会的な理由があることが分かつた。医療費の一部負担

が払えないこと、医療機関が遠いこと（当時は交通の便が悪かった）、農繁期は忙しくて暇がないこと、お嫁さんが姑に気兼ねして医者に行けないこと、そして健康に対する一般的な無関心さがあった。

若月院長はこれを社会的な意味で「潜在疾病」と名づけた。そして、「がまん型」と「気づかず型」の二つに分類した。「がまん型」とは、症状があるのにがまんして医師にかからないもの、「気づかず型」とは、検査や診察も受けないので、自分が病気であることが分からないものをいう。これらが手おくれにつながっていることは明白だった。

だが、健診が始まってからは早期に医師にかかる人が増え、手おくれが少しずつ減ってきた。とくに脳卒中中、なかでも脳出血による死亡が著しく減少した。健診の効果が出てきたのである。当時の農村では、八千穂村に限らず、死亡原因の第一位は脳卒中だった。がんとか糖尿病などは現在に比べるととても少なかった。がんになる前にみな脳卒中で死んでしまったのである。また食生活も悪かったから、糖尿病にもならなかった。脳卒中が減ったのは、血圧測定で高血圧を早くみつけ、治療や生活指導がなされたせいである。

村会議員から怒られる

ところが、健康管理が始まって村の国保医療費がぐんとはねあがってしまい、これが村の議

会で大きな問題となった。健診をして病気をみつけ、治療が必要と言われた人が医師にかかるようになった結果だから、これはある程度やむを得ないことである。しかし国保が赤字で厳しい時代だったから、国保の医療費が増えるとなると、議会はだまっておれなかった。

衛生指導員の渡辺一明さんは議員たちから随分と怒られた。「手めえたちがあんなことをやるから、見ろ、ほれ！」といって数字を目の前につきつけられた。別に衛生指導員のせいではないのだが、指導員がいちばん活躍していたから目についたのであろう。

しかし、これは一時的なことであった。健康管理をはじめて七年目くらいから、村の国保医療費は、他町村にくらべて次第に低くなってきた。早期発見、早期治療で手おくれが減ってきただためと考えられた。まさに「予防は治療にまさる」であった。

一方では、健診の意味も少しずつ理解されてきた。婦人会や老人クラブの集まりのときに、こんな話が出るようになったと、保健婦の井出今さんが聞かせてくれた。

「他の村では、五人の子どもがいる父親が、ある日脳卒中を起こして死んでしまったが、今まで一度も血圧を計ったことはなかった。それに比べて八千穂村では、毎年健診があるし、予防的なことも話してくれるので大変有難い」とか、「うちの嫁は、私の血圧が高いので、塩辛いものはつくらないようにいつも注意してくれているし、無理な仕事はしないほうがいいよと言って、細かいことにも気を配ってくれる。健康診断というものはなかなかいいものだ」と。

村民の健康意識未だ上がらず

村ぐるみの健康管理がそろそろ十年目を迎えようというある日、これを機会に村民の意識がどのくらい上がったか、調べてみたかどうかとトラさんが言い出した。

今まで村民の意識をアンケートなどで調べたことはなかったから、松島医師らは一も二もなく賛成した。「けどあまり難しい質問はだめだよ」と、井出守さんが早速クギをさす。「アンケート出しても、きちんと答えを書いてくれねえぞ」と一明さんは心配顔。

どのような形でやるか、いろいろ議論した末、最終的にはインタビュー調査でやることになった。

だが、誰がインタビューをするかが問題だった。佐久病院のメンバーでは、それを意識して本当のことは答えてはくれまい。衛生指導員も顔をよく知られているからダメだ。結局、佐久病院の看護学生さんをお願いするということになった。

質問項目は皆で相談して、健康知識と健康意識の両方に分けて十項目がつけられた。そして八千穂村と比較対照するために、まだ健康管理を始めていない村として、八千穂村と規模がほぼ同じ程度のK村が選ばれた。看護学生たちは、毎晩二人一組になって両方の村をインタビューに歩いた。K村はふだん知らない土地だったから、家を探すのにはとても苦労した。

結果はどうだったか。

ひと口に言えば、八千穂村のほうがたしかに健康知識の点ではK村より上だったが、健康意識の点では、両村の間に殆ど差はなかった。言いかえれば、病気を予防するための日常生活上の注意についてはよく知っているが、自分たちの健康を守るためにみなでどう活動すればよいかということについては、まだ十分な意欲が上がっていないという結果だった。

納屋工場の広がり村の中は大ゆれ

母ちゃんたちの五割が勤めに

「どうも最近は、母ちゃんたちの集まりが悪くなったぞ」「検診報告会にもさっぱり出なくなつたね」「村にできた工場に働きに行っているらしいよ」などと、母ちゃんたちの集まりの悪さが衛生指導員の話題になり始めたのは、昭和四十四年頃のことだった。

小さな電気部品工場が、村に増えてきたのは確かであった。指導員たちがザツとあげてみただけでも、国道沿いだけでなく山間の佐口区に四つ、八郡区も四つ、崎田区に四つなどと、村全域に五十くらいが広がっていた。

そこへ農家の母ちゃんたちが近所のよしみで頼まれたり、みんなが行くから自分もと希望したりで、あれよあれよという間に広がったらしい。健診報告会によく集まっていた女性たちが来なくなった理由は、やはりこれだった。

そこで衛生指導員会で話し合い、健診時に工場通いの実態を聞いてみることにした。その結果、驚いたことに、昭和四十四年の健診時には、三〇歳代、四〇歳代の主婦の五割が、村内の工場勤めか、その内職をしていることが分かった。

しかし、健診会場ではいろいろ聞かれてただでさえ嫌われ気味の受付で、「工場に勤めていますか、どんな作業をしているの、一日にいくらくらいの稼ぎになるの……」などと、根ほり葉ほり質問するものだから、母ちゃんたちからはますます嫌われてしまった。「これは税金に係しちゃうかなあ」「親類の家の工場だから変なことは言えないよ」などと曖昧な答えばかりで、なかなか実態がつかめない。

そこで村の工場を直接回って、体調や生活などをインタビューすることになった。

コイル巻きやハンダ付け

佐口区の工場を案内しながら指導員の井出佐千雄さんは、「あのKさんのところは旦那は農業中心で、工場は奥さんが取り仕切っているだよ」などと予備知識を入れてくれる。

だいたい山間部では農家の納屋や二階を改造したいわゆる納屋工場が多く、五人から九人くらいがテーブルを囲んでいる。小さな部品にコイルを巻いたり、ハンダ付け、製品の洗浄などが多く、いかにも器用な女性に向く仕事である。

主婦たちは「私の仕事はこのミシン針みたいな棒の頭を、プレス機でつぶして箱に並べてゆくんだけど、つい頑張つてしまつて、一日二万本くらいやつてしまふ。家に帰ると、もう目を開けていられないほどぐったり疲れてしまつて」とか「自分のやつた分を日毎に記録して、給料に計算されてゆくんです。不良品が多いといろいろ言われるんで、集中するから肩もこつて」と、慣れない細かい仕事に神経を使つて大変らしい。

国道沿いにはやや大型の独立工場も建てられている。弱電関係の中小企業の下請けや孫請けである。内職もここから出される。ハンダ付けの煙がもうもうと立ちこめていたり、洗浄に使うシンナーのような有機溶剤の匂いが漂うなかで、主婦たちが黙々と手を動かしている。

「肩こり」「目の疲れ」「視力が低下した」という主婦のほか、「薬品による皮膚かぶれ」も見られた。しかし「体質のせいだ」くらいにして、問題にすることを避けている。

労働条件も良いとはいえず、体調も壊れる。それでも文句も出さずに働くのは、工場主への遠慮だけではなさそうである。

仲間と働くのは楽しいのだが

時給は百円から百五十円というから、一カ月二万円くらい。この頃の中卒初任給の三万円と比べてもかなりの低額だが、主婦が自分で自由にできる現金を手にするこの魅力は大きい。それに、会社に出れば友だちとの交流も生まれ、旅行など職場の催し物に参加でき、ストレス解消になるので楽しいという。

家事や農業もあって、三つの役をやるのは大変じゃないかと聞くと、「朝か夕方に農業はするし、いまの方が規則正しい生活ができて、時間を有効に使っている感じで充実している」といった答えが返ってくる。

しかし一方、「でも、食事が簡単になったり出来合いを使うようになったのも事実だね」「子どものズボンに継ぎを当てるより、働いて新しい物を買った方が子どもも喜ぶし、自分も楽だワ」と使い捨て時代到来の声。

しかし不景気も足早で、「俺の家のそばの工場は出遅れて大きく設備投資したために、じきに回転しづらくなって倒産して、大変な目に遭っていた」と語るのは衛生指導員の佐々木喜一郎さん。

昭和四十五年に五十一あった工場が、四十六年には四十六社と減少し、新設もある代わりに廃業した会社が一年間で十三社もあることが分かった。はじめは冬の農閑期だけの労働が許さ

れていたのが通年型になり、やたらに休む者は首を切られるなど、労働条件も厳しくなった。

主婦のいない家で病弱な年寄りと子どもが、ひっそりとテレビを見ている光景がよく見られた。「カギっ子」という言葉も流行り出していった。

指導員と一緒に、調査をまとめていた健康管理部の萩原篤さん（元事務長）は、「電化ブームが安い労働力を求めて農村に進出してきた結果こうなった。農業収入は頭打ちだし、日本全体が大きく変化し、農村が揺れ動いている感じだった」と語る。

折しも昭和四十五年に減反政策が始まった。

あいさつは「ズロース一丁!」

田んぼの中の国際会議

村の健康管理に取り組んで十年、衛生指導員たちも、いよいよ国際的に活躍する 때가 やってきた。などというところとちよつと大げさだが、実は、佐久病院で第四回国際農村医学会議（会長は当時の若月院長）が開かれることになり、農村視察の案内役をやることになったのである。

昭和四十四年十月のことであった。

当時は国際会議というと、大抵は東京とか大阪とか大きな都市でやるものと決まっていた。それが長野県白田町という、こんな片田舎でやるというので日本中が驚いた。農村医学の会議だから農村でやるのは考えてみれば不思議ではないが、当時としては画期的なことだった。

若月院長がわざわざ会場を佐久病院にしたのは、外国の人たちに日本の農村や農村病院を見てもらいたい、とくに八千穂村の健康管理を見てもらいたいということがあったと思う。だから当然、農村視察は八千穂村と決まった。

衛生指導員たちは案内役を頼まれたものの、どう説明したらよいかわい悩んだ。

「ドイツ語は患者紹介のために多少は習ったけれど英語はからつきしダメなんだ」「でも、ドイツからも来るらしいよ」「ほんとか。だけど実をいうとドイツ語も忘れてしまった」「じゃあ何も喋れないということじゃない」「はっきりにええそうだ」「まあ通訳がつくからなんとかなるさ」「だけど、挨拶の言葉だけは習っていたほうがよいよ」などと、打ち合わせ会議ではけんけんごうごう喧々囂々だった。

まずコタツに眼をつける

この国際会議には、外国からはドイツ、フランス、チェコスロバキア、イギリス、ソビエト、アメリカ、インドなど二十五カ国から約八十人、日本の参加者を入れると、合わせて五百人が

参加した。

会議は十月一日から四日まで行われたが、最終日には農村視察が行われた。五台のバスに乘して、上畑、佐口、八郡、大石、崎田の五つの区に分かれ、農家を見て回った。

外国人学者にとつて、日本の農村を見るのは初めてである。

上畑区では、会長のマツツフ教授をはじめ、理事の方が中心。農家へ入るなり、まずコタツに眼をつけた。「こんなふうに座っているんじや、さぞ腰が痛いだろう」と早速腰痛症についての質問がとぶ。そういえば、むこうの人は年をとると背中から曲がるが、日本人は腰から曲がるのが特徴。これには座る生活が関係している。

冬の間はどう遊ぶんだというので、家の人が花ガルタをもってきたら、「これはすばらしい。浮世絵的だ」と妙に感心。

佐口区へはソビエトの人たちが訪れた。今回の国際会議には英語の他にロシア語が公用語に採用されたので、ソビエトからも大勢参加したのが珍しかった。

井出佐千雄さんが案内した農家には、大きなイロリがあり、これに上から自在鉤（かぎつるし）がつるされていた。「これに鉄瓶や鍋をかけて、自由に上下できるんだ」と説明すると、なるほどと感心していた。

ロシア語で「こんにちは」というのは「ズドラーストブイチェ」と言う。ふつうはもっと短

く発音するので、この通りには聞こえない。事前の勉強会で衛生指導員たちは、講師から「ズロース一丁」と言うほうが実際の発音に近いと教わった。講師は半ば冗談のつもりで言ったのだが、衛生指導員たちは本気にした。「ズロース一丁!」「ズロース一丁!」。佐口区の空に高らかな声が響きわたった。

山の中の水道完備に驚く

チエコスロバキアの人たちは八郡区へ。百年以上も経つ旧家を訪れ、コタツへ入ってお茶を一杯。漬物をどうぞとすすめられ、その匂いにちよつと首をかしげる。欄間らんまの彫刻を見て、こんなに空いていれば冬は寒いんじゃないかと細かいところに目がいく。ある家では寢室に三〇センチのマットレスが敷いてあるのを見てうなずいていた。

大石区では、アメリカの学者夫妻が便所についていろいろ質問。ちょうど大石川に張り出して建った家があったので、便を川へ流していると思つたらしい。しかし、別に立派な便所があったのでようやくなつとく。こんな山の中でも、みな水道が完備していると驚いていた。

農民体操をやっているかと聞かれた六十五歳のおばあさん、ええやっていますよと手を前へ伸ばしたら、かるく畳までついてしまったので、みなびっくり。さすが体操モデル地区だけのことはあると感心。

崎田区では、花の栽培がさかんで当然農薬を多く使う。農薬中毒はどのくらいあるとか、どんな防除衣は使っているかとかいろいろ質問がとぶ。

風呂は多くは内風呂だったが、一軒だけ外風呂の家があった。これは冬はとても寒いんだと説明しようとしたが、あいにく通訳が見当たらない。とたんに説明係の某君、「アイス、アイス……」と叫んだが、みな怪訝な顔。別に凍つてもいいのだから無理もない。

誇り、やりがいがあった

村の子どもたちは、外国人の学者をとりまいてはサインをせがみ、せがまれた外国人たちもうるさがらずに気軽に応じていた。サインをしてくれた外国人に、ポケットからクルミをとり出して一つ一つやっている子どももいた。

とくにインドから参加した黒人の学者は子どもたちに人気があった。この山の中では滅多に黒人にはお目にかからないからであろう。黒人の学者もニコニコと握手を交わしてくれているところがある男の子、握手したあとと自分の手を開いてジッと見ていたのには、みな笑ってしまった。手が黒く染まってしまったんじゃないかと思つたらしい。

農村視察のあと、村の中学校の体育館で、地域の人も交えて大交流会が開かれ、衛生指導員たちも参加して大いに盛り上がった。当時衛生指導員だった出浦経幸さんは、「指導員たちは

国際会議を手伝うことにとっても誇りを持っていた。とてもやりがいがあった」と感慨深そうに話してくれた。



八千穂村の農家を視察（左よりエリオット博士、東田教授、ワッサーマン教授、若月学会長、ワッシュ教授）

IV

新たな健康管理への模索



衛生指導員とともに村と病院との担当者会議

健康管理をあらためて考える

大挙して沢内村へ見学に

健康管理も十年を過ぎて、国保医療費の減少など、ある程度成果は上がっていた。しかし受診率は横ばい状態で一向に上がらない。とくに若い人の受診率がよくなかった。実際、衛生指導員たちは、健康管理のマンネリ化に悩んでいた。ここで新しい空気を入れ、健康管理のあり方をもう一度考え直そうと、衛生指導員会で沢内村の見学をすることになった。昭和四十五年秋のことである。

沢内村は、岩手県の山奥にあつて、冬になると三、四メートルも雪が積もる豪雪地帯。八千穂村と相前後して健康な村づくり始めた村だが、特に乳児と六十歳以上の老人の医療費無料化を実施しているということでも有名であった。

視察旅行には、衛生指導員会だけでなく、佐々木庫三村長をはじめ、役場関係者、保健委員も参加することになり、それに佐久病院健康管理部の職員も加えて、一行十七人がバスで沢内村に向かった。

険しい山道を越え、長時間かかって沢内村の役場へ着く。早速担当者から、健康管理の取り

組みについて説明を受ける。沢内村を語る上で、故深沢晟雄村長抜きでは考えられないとは、担当者の言葉だった。（深沢村長は残念ながら昭和四十年に食道がんで亡くなられた）。

深沢村長が村長に就任した昭和三十二年当時、沢内村は、あまりにも雪が多く、あまりにも貧しく、そしてあまりにも病人が多い村であった。そこで深沢村長は「生命尊重は政治の基本だ」「住民の生命を守るために私は命を賭けよう」と、生命を守るために果敢な政策を次々と実行に移していった。

この取り組みの経過を聞いて、保健委員の小山亀蔵さんは、「健康管理の内容の面では八千穂村とは違いがないが、乳児と六十歳以上の老人に医療費の十割給付をしているのがすごい。せめて八千穂村でも七十歳以上の人に無料化できないか」と早速提案に及んだ。

婦人中心に実践活動

村の唯一の病院、沢内病院は役場のすぐ隣にある。

案内された病院の外来には、村民全員の健康管理台帳もおかれていて、保健と病院が直結するしくみができていた。何といっても増田進副院長（後に院長）が村の健康管理課の課長を兼ねていること、そして人口五千人足らずの村に保健婦が六人もいて、健康教育や家庭訪問、母子対策などを行っていることにみなびつくりし、これなら予防と治療の連携は上手くゆくねと

目をみはった。

衛生指導員の井出守さんは、「沢内村では、地区の衛生委員に毎月月報を出させて、村の健康状態を報告させているが、八千穂村でも指導員がそのような月報を出したらどうか」と感想を述べた。

乳児死亡率は地域の健康度を示すバロメーターと言われているが、昭和三十年の沢内村の乳児死亡率は、千人生まれたら六十九人死亡といった高い状況だった。この実態に対して、女性たちが「自分たちの健康は自分たちで守る」と活発に取り組みを始め、若妻学級や婦人学級を各地で月二回以上も開き、子育てや栄養の取り方など、学習と実践を重ねたという。

この結果、昭和三十七年に初めて乳児死亡率ゼロを達成し、それがほぼ定着し自信がついてきたと増田副院長が話してくれた。

八千穂村は恵まれ過ぎ

視察を終わって反省会を持ったが、婦人グループの活動にはみな心を打たれたようだった。

指導員の渡辺一明さんは、「沢内村では婦人層が主体となって非常に活躍していることに感心した」と述べたし、また井出今保健婦さんは、「沢内村では、地区組織や婦人会、老人会、若妻会、青年団などを活発に利用している。その点、八千穂村ではまだまだだと思う」と反省

の言葉を述べた。

また村民の意識については、トラさんは「たしかに八千穂村の場合、健康に対する意識がまだ欠けているように思う」と認めたが、その理由については、出浦経幸さんは、「八千穂村は交通機関や医療機関に恵まれ過ぎている。沢内村は交通の便も悪く、かつて無医村だったということで、根本的に環境が違う。これが住民の健康に対する考え方に、大きく反映していると思う」と答えた。

保健委員の内藤久太郎さんも、「豪雪地帯で保健活動をするのに非常に苦労があると思う。その点、私たちの方がずっと交通の便もよくやりやすい。だから保健活動の大切さがかえってよく分からない面もある」と述べている。

発足当時の気持ちに返って

佐久病院の松島医師は、「ともかく健康管理は病院が主体ではなく、村が主体なのだから、八千穂村自身がもっと自発的に、組織的に活動しなければならないと思う。これには村民自身がもっと『健康は自分自身で守らなければいけない』という意識を持って、積極的に村の健康管理の仕事に参加することが必要だ」とつけ加えた。

最後に佐々木村長が、「沢内村の健康管理事業から、学ぶべき点は数多くあると感じた。す

ばらしい指導者と協力者がいて、今日まで事業を継続している。八千穂村の場合、医療機関に恵まれすぎていて、やや安易な気持でいた面もある。生命、健康を守るということは、非常に大事な仕事なので、発足当時の気持にかえって取り組んでいきたい」と結んで、反省会は終わった。

八千穂村にあって沢内村にないものが一つある。それは衛生指導員という組織だ。今度の視察に衛生指導員たちは大きな感銘を受けつつも、自分たちの仕事に大きな誇りを感じたようであった。帰途に着く指導員の顔はいつになく晴々としていた。

「ヘルス」移行でさかんに論議

束の間の老人医療費の無料化

沢内村見学からしばらくして、老人福祉法が改正され、昭和四十八年には、七十歳以上の老人医療費の自己負担分が全額給付されることになった。沢内村のように六十歳以上というわけにはいかなかったが、これには老人たちが喜んだ。

当時、開業医だった出浦公正医師もこう話している。

「一部負担金を村で払うから、病院では払わんでもいいということになって、入院した人たちは感謝したですよ。おれたちは金を払わなくても、看護婦さんたちが玄関まで送ってきてくれて、お大事にといってくれるといつて。他の人は十日ごとに一部負担金を払わなければならぬし、たとえ明日退院していいと言われても、そのお金を払わなければ帰れないから」と。ところがこれが長くは続かなかった。やがて昭和五十八年に老人保健法が施行されることになって、老人福祉法が改正になり、老人医療費の一部負担が復活した。老人医療費の急速な増加がその理由とされた。束の間の老人医療費の無料化だった。

しかし沢内村では、国の反対にもかかわらず、その後も六十歳以上の医療費無料化をずっと続けているのはさすがだといえよう。

全県各地から要望が高まる

八千穂村の健康管理もまだまだこれからであったが、年に一回の健康診断を村ぐるみで行っているということで、他の町村の人たちは羨ましがった。

検査内容も、年々貧血検査や肝機能検査、心電図検査などを追加して、次第に充実していった。当時の村の検診というと、ふつうは結核検診と血圧検診ぐらいだったから、あちこちから八千穂村のような健康管理をやってくれという要望が高まっていった。

とくに要望が強かったのは農協婦人部であった。婦人部は以前から、年一回の健康診断を健康保険でみるように国に要望していた。しかし八千穂村だけでも、全村を回って健診をするには約三カ月かかる。各地でやってくれと言われてもとても無理だと思われた。

ところが技術革新がそれを可能にした。オートアナライザー（血液自動分析装置）の開発とコンピュータの発達である。

早速、長野県厚生連では、昭和四十八年に佐久病院に「健康管理センター」をつくり、設備を整えて、新しい健康診断の方式を実施することにした。オートアナライザーでは、僅かの血液で十六項目もの検査ができるので、貧血はもちろん、肝機能、血糖、コレステロール、尿酸など、成人病診断に必要な多くの検査ができることになった。

この検診方式を「集団健康スクリーニング」（通称ヘルス）と名付け、市町村と農協とが協力し合って、どここの地域でも実施できるようになった。いわば八千穂村は、全県への集団健康スクリーニングを生み出す原動力となったといえる。ところが、当の八千穂村では、この新しい方式の採用にはかなり慎重だった。全県では今までの健康管理が発展して「ヘルス」という形ができたのだが、すぐそれに移行というわけにはいかなかった。

問題の一つは料金が大きく変わったことだった。昭和四十七年度の検診料金は、一人七百円だったが、ヘルスでは二千円となった。個人負担は三割なので今までの二百円が六百円と三倍

になる。そして村の負担が千四百円となる。「果たして全部の人に、それだけの金をかけてやる意味があるかどうか」という意見が村から出た。

一方、「検査項目が増えてこれで多くの病気が発見できれば、二千円でも決して高くない」という意見もあった。個人負担の増加については住民からとくに大きな反対はなかった。井出佐千雄衛生指導員によると、「住民はある程度村で出してくれるんだというような甘さもあったんじゃないか」ということだった。

活動のもとはずべて人だ

もう一つの意見は、検診が機械的になってしまうのではないかと心配だった。小沢保健委員は「新しい分析装置で多くの種類の病気が分かるし、コンピュータで結果が早く出るので、それはよいが、結果については医師が直接受診者に説明することが欠けてしまうのではないかと心配する。」

また出浦医師は、「機械化すれば、医者と住民が近づかないようになってしまふのではないか。受診率を上げるには、医者がよく結果を説明することだ」と述べたあと、「いい成績をあげている陰には、気遣いじみたくらいの熱心さの人が要る。これをやるには、少し狂ったようにやっていかなければだめだ」と言う。

出浦医師は、かつて予防注射を十年かけて村民一人残らずやった人だ。出ない人には、一軒一軒自分で訪ねて、なぜ出ないんだということを話し合ったが、話せば分らない人はいなかったという。

出浦医師の発言は、従来の検診についての反省でもあった。機械化が悪いというわけではないが、すべての活動は人が中心だ。その基本を忘れては困るというのである。「ただ衛生指導員も家の仕事も一応あるので、どうしても思うようにできない面もある」と井出佐千雄指導員は頭をかいたが、「いや衛生指導員は陰の力になってよくやっている。役場も苦勞しているが、これから皆でやっていこう」と慰めたのは、新しく住民課長になった佐藤辰男さんだった。約半年ぐらいろいろ議論した末、結局、昭和四十九年度から八千穂村もこの新しい検診方式を取り入れることになった。地区を回っての説明会が早速始まった。

世代交代の衛生指導員たち

村医の出浦医師が村長に

昭和五十年、今までの佐々木庫三村長に替わって、ずっと村医として診療されていた出浦公

正医師が村長に就任された。もちろん村の健康管理の方向には変りはない。出浦医師自身が開業医として、健康管理を支えてきた一人だったからである。

だが、出浦医師が七十歳という高齢で村長職におかれて、「経験のない行政の仕事の始めたのだから、その苦労は大変だったはず」というのは、そのとき住民課長補佐をしていた岩波英雄さん。「村の病人たちが、主治医が村長になって診療してもらえなくなつて困るというので、出浦村長は出勤する前の朝と、退庁後に診療したりして、頼ってくる人の面倒を見ていた。真面目でうそも言えない性格だったから、診療と政治の間で大変苦勞された」と語る。

衛生指導員たちも、八千穂村が無医村になつては困ると大いに心配した。公民館の脇に診療室を作つたらどうか、佐久病院から医師を回してもらつたらなどと氣をもんだが、實際大過なく過ごせたのは村長の努力による点が多い。

衛生指導員も世代交代が始まる

昭和五十年前後から、衛生指導員のほうも世代交代が始まつていた。

今まで衛生指導員には任期がなく、トラさんの十六年、井出左千雄さんの二十年など、長く務める人が多かった。これでは若い人が育たないというので、一期四年の任期を決めた。だが、ちょうど慣れてきた頃に辞めてしまうのはまずいということで、最低二期はやることを皆で申し合

わせた。

衛生指導員会長は小宮山則男さんに替わった。新しくなった指導員たちも同じような悩みを抱えていた。天神町担当になった青木秀夫指導員の悩みは、この集落が、出浦医師が開業されているお膝元で、病気になればそばに出浦医師がいるから、すぐ治してくれるので、健診なんか受けなくていいという村民が多く、受診率が最低に近い状況だったことだ。

青木さんは、「何しろ必死で、一軒一軒回って健診の必要性を説得して歩き、四〇%から八〇%にまで受診率を上げることが出来て、ほっとしたものだった。佐久病院の笠置保健婦さんが協力して、励ましてくれたのも有難かった」と語っている。

喜ばれた地域リハビリテーション

健康管理活動の効果の一つに脳卒中発症が減り、若くして倒れる人が減ったことがある。

そこで佐久病院磯村医師が中心となり、昭和四十七年から佐久地域では、脳卒中発症の早期に適切な治療とリハビリで、寝たきりや死亡を減らそうという、脳卒中登録システムが始まっていた。

この中で先進的な立場にある八千穂村では、「せっかく脳卒中から救われて家に帰った人が、自宅ではなかなか訓練を続けにくく、マヒが進んだり寝たきりになることがある」という悩み

が、保健婦の井出今さんや衛生指導員会で話題になっていた。

そしてついに昭和五十年、村の福祉センターの一室をリハビリ訓練用に改造して、毎週二回の地域リハビリが始まった。佐久病院から理学療法士が出かけ、村の保健婦がまとめ役となつて、定期訓練と健康相談が継続された。

小宮山則男さんは、「これは家族から本当に喜ばれた。家族が言ってもなかなか訓練しないけど、あそこに行けば仲間がいて、熱心に訓練したり、お茶のみの交流で人と話もするようになって、何しろ明るくなったって喜んでいたよ」と情報を寄せてくれた。好評なこのしくみに、やがて本人が訓練室に通うタクシー代の半額が、村から援助されることに発展した。

さらにこれにならって佐久地域の各町村も、訪問入浴サービスや訪問リハビリなど、いろいろ工夫が始まった。これはやがて制定される老人保健法や、さらに現在の介護保険制度のモデルになる取り組みであった。昭和五十年代のはじめにこれが展開されていたことはまさに画期的なことだったといえよう。

学童の健康管理も充実へ

八千穂村の健康管理がもとなつて始まった、全県集団スクリーニングの実施にあたって、佐久病院の健康管理部は県厚生連の健康管理センターを兼務することとなり、県内各地にフル

回転で健診に追われるようになった。

スタッフも今までのように八千穂村だけに係わっていられなくなったし、新たに加わったセクターのスタッフは、「八千穂村に追いつき追い越せ」とはり切って南信や中信地域に力を入れる。

しかし大事な衛生指導員勉強会には手を抜くわけにはいかない。「勉強会に日程を合わせるのがやっとで、この頃が一番辛かった」と横山孝子保健婦は語る。

指導員会で「大人の健診はヘルスになって内容が充実したが、子供のことがおろそかだ」という話題が出たことから、学童の健康管理の見直しも始まった。子供の肥満や貧血などがニュースになり出していたこともあった。

小中学校の養護の先生や教育委員会も加わって、小児科の神辺医師と協議し、貧血や脂質、血糖などの血液検査を入れ、ほぼ大人並みの内容の学童検診が、昭和五十三年度から実施されることになった。同時に学童健康手帳や健康台帳までつくられた。

栄養のあるものを何とかとって欲しいと願った頃を通り越して、いつのまにか肉や油をとりすぎる時代が来ていた。そして、八千穂村にも朝食を食べない子など、生活リズムの乱れも始まっていた。健診結果では高コレステロール児が中学生で九%もあり、成人病の予備軍が始まっていることが分かった。

かくして、子どもも含めて、生まれてから死ぬまでの健康管理、八千穂村の新たな取り組みがここに始まった。

全国から視察が相次ぐ

単なる「たのまれ仕事」でなく

昭和五十三年は、八千穂村にとって、乳幼児から成人まで一貫した健康管理ができ上がった画期的な年であったが、その頃から全国各地から視察団の来訪が多くなった。視察団は北海道から沖縄まで全国各地に及んだ。昭和五十一年は四十団体、五十二年は三十五団体という状況であったが、その他にも二人、三人という視察者は数多くあった。

ちょうどその頃、若月院長の著書『村で病気とたたかう』（岩波新書、昭和四十六年）が出版されたこともあり、その著書を読んだとか、また講演を聞いてということ、視察に来られた方が多かった。

それだけに、かなり事前に勉強された上での見学で、じかに住民と会って、住民の意識について聞きたいとか、衛生指導員の役割と地域における実践活動について、直接指導員から生の

声を聞きたいといった要望が殆どであった。

当時、役場の健康管理担当だった岩波英雄さんは、いつもその応対に追われたが、一方、衛生指導員会長の小宮山則男さんや副会長の青木秀夫さんも、たびたび説明のために呼び出されることが多かった。

昭和五十二年八月には、川崎医療生活協同組合のみなさんが大挙して訪れた。後日見学記が村へ送られてきたが、そのなかで企画調査部長の田畑さんは、見学の感想を次のように述べている。

「八千穂村の衛生指導員会長と副会長が、十八年間の取り組みと現在の苦勞など、何の気負いもなく述べてくれたが、他に仕事を持ちながら、村当局と心を一つにして、村民の健康をどう守っていくか、どうしたら健康管理にもっと関心を持つてくれるか、単なる『たのまれ仕事』ではなく、また『名誉職』でもなく、村民の要求を自分の要求として誠実に活動している姿が、説明する一語一語から伝わってきた」と。

衛生指導員の活動は、次第に全国の注目の的になって来ているようであった。

過保護の中では強い子は育たない

一方、なかなか厳しい感想もあった。昭和五十年に訪れた岐阜県上矢作町保健婦の西尾みよ

子さんは、実際に健診に五日間参加した後で、次のように述べた。

「健診態勢を整え、受診をすすめ、ああしよう、こうしようということまでは簡単だが、その根本である健康の大切さを分かってもらうということは、なかなか困難のようである。(中略) 今後の八千穂村にとって、最も基本となることは、住民自身が健康は自分で守るという意識を持つようになることであると思う。医療従事者や行政は、住民がいかにして健康を守りやすくできるかを考え、そうできるように援助していくものである。過保護の中では強い子は育たない」と。

システムは立派だが、村と病院が主体で、まだまだ住民主体の健康管理になっていないという指摘である。残念ながら当時は、まだそのとおりの状態であった。

衛生指導員の活動にとっても興味を持った人もいた。昭和五十二年、秋田県の上郷健康センターから見学に訪れた鈴木土身さんと斉藤喜也さんである。上郷健康センターは健康づくり活動に早くから取り組んでおり、とくにその「健康祭」は有名だ。

八千穂村の住民代表、とくに昔の衛生指導員に会いたいということで、横山保健婦さんが案内して、井出佐千雄さん宅を訪れた。佐千雄さんは、すでに衛生指導員はやめて、村の健康管理のことを協議する保健委員をしていた。

衛生指導員時代の苦労話をいろいろ聞いたあと、鈴木さんはこう尋ねた。「八千穂村では、

行政や衛生指導員、そして佐久病院が頑張って、すばらしい仕事をしているけど、住民の意識はどうなんだろうかと。同じく健康づくり運動に取り組んでいる立場から、やはりこの点が気になるらしい。

佐千雄さんは率直に答える。

「正直言って、住民は甘えていたところもあったね。自分たちの行動はまだまだできていない。これから、指導員OB会も含めてなんとかしなきゃいけないと考えている」と。佐千雄さんは指導員OB会長も兼ねているのだった。

八千穂村は私たちの宝だ

ふつうは、こういう保健関係の委員は女の人が多い。しかし八千穂村では男性の衛生指導員が頑張っている。鈴木さんは、佐千雄さんのような人が、この八千穂村の活動の中で生まれたことにとても感心した。

翌日、八千穂村を訪れた鈴木さんたちは、村の健康管理についてくわしく話を聞いた。住民課の方たちが総出で説明してくれた。

帰途、八千穂駅を背にして、村をもう一度見渡したとき、鈴木さんはなんとも言えない感激に身体がふるえる気がした。日本中の健康管理活動がこの村から始まったのだ。「健康を守る

運動のルーツかな？」と考えると、やはり八千穂村は私たちの宝だと思った。そして、まだいろいろ問題はあるにしても、過去の蓄積をもとに、八千穂村はいまさまざまな課題を乗り越えようと頑張っている。

鈴木さんは妙に感激している自分がおかしくて、誰にも分からないように「クスッ」と笑いながら、満足な気分で帰路についた。八千穂駅から、案内してくれた横山保健婦さんにお礼の電話。

「モシモシ、俺たち、これで帰ります。いろいろどうも有難うございました。白田の町を列車が通るとき、佐久病院に手を振りますからね……」。

ピッカピッカの一年生

いつも一からのやり直し

昭和五十二年には多くの衛生指導員が新しくなったが、馬越区の今井恭夫さんもその一人だった。今井さんの第一の仕事は、やはり受診者を増やすために、区を回って受診の勧誘をすることだった。

毎年多くの人が対象者として新しく登録される。だから毎年同じことを繰り返して説明しなければならぬ。検診を始めて二十年近くも経つと、対象者の半分近くは変わってしまうのだ。いつも一からのやり直しだった。

ちょうど高度経済成長の最中で、若い人は勤める人が多くなった。なかなか検診に来るひまもない。それに会社で、ある程度の検診はやってくれる。だから若い人の受診率はいつも低かった。

そこで指導員会では病院と相談して、勤めている人も来られるように、受付時間を午後六時まで延長してもらった。それで勤め人もかなり受診できるようになった。

それでも絶対検診はいやだということ、まだ頑張っているお年寄りもいた。今井さんが訪問すると、「そういう話だったらいいや」とか「やだもんは、やだ」と、玄関から絶対入れてくれない家もあった。危うく塩をまかれそうになったこともある。それでも今井さんは、訪問を欠かすことはなかった。

八郡区の高見沢佳秀さんは、五十三年に衛生指導員になった。トラさんから数えて三代目である。五十二年組の衛生指導員たちはすでに精力的に活動を始めていたが、高見沢さんは一年遅れたために何をやっていいかさっぱり分からない。ピッカピッカの一年生だった。

指導員は住民の代表だ

最初の指導員会で、「八郡区は大きい区で人口が多いのに、受診率は五〇%を切っている。これは八千穂村全体の受診率に響いてくる。おまえ、何とかしろ」と皆から責められ、苛められた。しかしどうすればよいのか、皆目見当がつかなかった。

はつきり言って高見沢さんは、村や病院がいろいろ計画立てるから、衛生指導員はただそのお手伝いをすればいい、早く言えば、行政の使い走りをするだけだよと思っていた。これだよいかという多少の不安もあったが、これが指導員の役目だと思っていた。

ところがその年の暮、佐久病院のクリスマスに招待されたとき、高見沢さんの考えをガラリと変える出来事が起きたのである。

佐久病院のクリスマスには、地域の人たちを始め、多くの人が招待される。衛生指導員も同様であった。

一次会が終わって、高見沢さんと指導員会長の小宮山則男さんと健康管理部の飯島郁夫さん（元事務長）の三人で中込へ飲みに行くことになった。大雪でタクシーも動かない夜であった。雪の中を転げ回るようにして何軒か梯子した後、飯島さんはこう高見沢さんに話しかけた。

「衛生指導員は役場や病院の使い走りではない。あなたは住民の代表なんだ。だから住民の

意見や様子を、役場や医療機関へ持ち上げなければならぬ。住民の代表として、いろいろなことがあなたの役目だ」と。

高見沢さんはがんと頭をなぐられたような気がした。「そうなんだ。おれは住民の代表なんだ。そうとすれば安閑としてはいられない」と思った。急に目が開かれた感じだった。高見沢さんは、自分の地区の人が可哀そうに思えてきた。自分は住民の代表なのに、住民の健康のために何もやっていないではないか。その晩は気が高ぶって、一睡もできなかった。

年が明けてからは、高見沢さんの行動が一変した。

住民の希望も入れて

まず区長と常会長のところへ行って、「とにかく八郡の地区は、大きいけれど受診率は非常に低くて、健康への意識は低いから、何とか考えなくてはならない」と訴えた。また区の総会や常会の総会に「ぜひ皆さん健診を受けよう」と話をした。

各組織の責任者にも健診受診をすすめるよう協力を仰いだ。若妻会などは、自分の会員のところを進んで歩いてくれた。

ちょうど検診時に必要な問診票を皆に配る時期でもあった。高見沢さんは、寒い雪道を毎晩頼かむりして問診票を配りながら、内容を説明して歩いた。その年の健診では受診率が四七%

から六一％に上がった。

さらに次の年の検診前には、公民館に集まってもらって、「学習会」を何回も開いた。その一つは「健診の内容をよく知ろう」というテーマにした。当時集団ヘルススクリーニング方式になって、随分検査項目が加わったが、良く内容が分からない住民も多かったからである。特に血液検査のことを説明すると、「へえ、そんな検査ができるのか」とびっくりした住民も多かった。学習会に来られない人には一軒一軒説明して回った。

また高見沢さんはなにか住民の希望する検査項目を入れたいと考えた。住民にいろいろ聞いてみると、「体力テストをぜひ入れてくれ」という意見が出た。それを病院に話して入れてもらうことにした。反復横跳びとか屈伸度とか握力などの検査だった。

そして年が明けて八郡区の健診となる。体力テストを入れたせいか、若い人の受診がぐんと増えた。あまり大勢来たので診察が間に合わず、もう一人医師を病院から呼んでもらった。最終的には、受診率が七〇％近くになった。

高見沢さんは述懐する。「地域の要望を取り上げていかなければ、衛生指導員の意味がない。衛生指導員、何やってるんだと言われても仕方がないからね」と。

新しい衛生指導員の誕生である。

胃の施設検診をすすめて歩く

がん死亡が第一位に

昭和五十年に就任した出浦村長は、四年後には健康上の理由で退任することになった。高齢だったこともあり、助役も置かず一人で村政を切り回していたことで、過労が積み重なったと思われる。

かわって昭和五十四年、佐々木澄雄村長が誕生した。佐々木村長は、生来健康には自信があったという。健康なんて当たり前のことで、病気やケガは自分の不注意の結果であり、自分には縁のないものだと思っていた。ところが五十過ぎになって、ある日、突然ギックリ腰になり大きなショックを受けた。以来、健康には十分注意するようになり、ジョギングなど体力づくりを熱心に心掛けるようになった。しかも村の健診受診は、最初から一度も欠かしたことはない。したがって村ぐるみの健康管理には初めから積極的だった。

村長のスローガンは「八十まで達者に生き、三日で死にましよう」というものだった。長生きするからには健康で長生きしたい、生きている限りは人手を煩わせないで、楽しい生涯を送りたいというのである。

さらに村長は「日本一の長寿村になろう」というスローガンをかかげた。しかし八千穂村の平均寿命はそう簡単には伸びなかった。その原因を調べてみると、若くしてがん倒れる人が毎年かなり出ていたのである。がん検診も、胃検診や婦人科検診も行われていたのだが、一般検診にくらべて受診状況は悪かった。とうとう昭和五十二年には、がん死亡が八千穂村の死因のトップになった。

全国でがん死亡が第一位になったのは昭和五十七年だから、八千穂村はそれよりも五年も早い。一般に健康管理が進むにつれて、脳卒中が減り、がんがトップに出てくるといわれているが、これはがんが脳卒中とくらべて、それだけ予防が難しいということであろう。

一人受けてもらうのに一晩かった

順調に減っていた村の医療費も上昇の気配を見せてきた。そこで村と佐久病院とで相談して、まず最も多い胃がんの早期発見をめざして、昭和五十八年からあらたに直接撮影による施設での計画検診を始めることになった。これは、四十歳から六十九歳までの村民全員について、病院へ出掛けて行って、直接撮影による胃の検査を受けてもらうというものである。当時はまだ内視鏡検査は一般的でなく、レントゲンの直接撮影が最も精密な検査であった。

早速、衛生指導員会で相談し、受診者の勧誘と取りまとめを衛生指導員が行うことになった。

しかし村民の中には、胃検診はいやだという人がまだかなりいた。

指導員の高見沢佳秀さんが、ある一人暮らしの家を尋ねたときのことである。受診をすすめたが、なんとしても胃検診は受けないという。しばらくして「がんというものは人にうつるもんかい」と聞くので、「がんは別に人にうつる病気ではないよ」と答えると、「じゃあ、おれががんになったって人に迷惑はかからねえじゃねえか。おれは一人ですまらねえから、がんになって死ぬだ。誰が受けるもんか」とやや興奮気味である。

高見沢さんはちよつと頭にきて、「あなたは保険は何に入っているのか」と聞く。「おれは国保だ」「あなたはがんで死んだっていいけど、国保のお金をうんと使ってしまうんだよ」と数字をあげて説明する。「がんの手おくれになると何百万になるよ。早期なら数十万ですむけど。結局みんなのお金を使うことになるんだ」と。

しかし相手はなかなか返事をしない。高見沢さんも簡単には引き下がるわけにはいかない。そのうち「まあ上がれや」ということになって、一杯飲みながらさらに話を続けた。夜半過ぎになって、漸く相手は胃検診を受けることを承知してくれた。帰り道、高見沢さんは「一人受けてもらうのにととうとう一晩かかったなあ」と、暗い夜空を眺めてため息をついた。

あとからはだいぶ感謝された

またある家を尋ねたとき、こうも言われた。「家には胃が悪い者は先祖代々誰もいないわい。胃がんなどになるわけがない。だから胃の検査なんて受ける必要はないわ」と。また「がんになればみな死んでしまうだろ。検査で見つけたってがんになればお終いだ」という人もいた。がんは早期がんの時期に発見すれば必ず治るということが、まだ一般には十分理解されていなかったのである。

しかし、高見沢さんによると、文句を言ったり、ごねたりする人は、いろいろ説明すれば最後は分かってももらえる人が多かった。逆に「ああ、いいよ。受けるよ」と気軽に答える人は、いざ当日になると受けない人が多かったという。

指導員の今井恭夫さんも、当日朝になつて、受診予定者の「飯食っちゃったよ」とか「お父さんの弁当を詰めていて、つい海苔があつたから口のなかへ入れちゃった」とのキャンセルの電話に、いつもくやしい思いをした。

施設検診では、病院へは村からバスで送迎した。また検診料金も六千円のところ四千円を村で負担したので、「こんなにまでやってくれるの」とか、「有難いことだね」と感謝した人も少なくはなかった。

結局、最初の二年間で四百人が施設検診を受け、七人の胃がんが見つかり、そのうち四人が

早期がんだった。いずれも前年は胃検診を受けていない人で、このうち三人は五年間一度も受けていなかった。命びろいした人は、「衛生指導員さんに誘われて受けてよかった」ととても喜んだ。あとで指導員はだいぶ感謝されたという。

V

演劇活動で健康づくり



衛生指導員の劇「ひとりぼっち」の上演

自主的な取り組みがすべてだ

松川町の実践活動を見学

衛生指導員たちは、健診が始まると、いかにして受診率をあげるかということに心血を注いだ。たしかに「村ぐるみの健康管理」というからには、受診率が低くては話にならない。

しかし健診活動を通して、指導員たちの誰もが悩んでいたのは、「住民の健康意識はまだまだ足りない。それを高めていくやり方はなにかないものか」ということだった。

ちょうどそのとき、県厚生連健康管理センターのスタッフから松川町の「健康を考える集会」の見学をすすめられた。健康管理センターは、全県で集団健康スクリーニングを進めていくなかで、早くから松川町での実践活動に注目していたのである。

そこで、指導員会長の小宮山則男さんを先頭に、副会長の青木秀夫、高見沢佳秀、佐藤義隆、今井恭夫さんら十人が見学に行くことになった。それに役場からは、飯出美智子保健婦さんが加わった。昭和五十五年の暮れのことである。

松川町は、伊那谷のほぼ中央にあり、梨、りんごなどの果樹栽培が中心の農村地帯である。人口は一万三千人ほどだが、比較的専業農家が多い。ここでは住民の自主的な学習活動がさか

んで、それぞれテーマを決めて学習グループをつくり、取り組んでいる。

そして、年に一回、それぞれの取り組み発表の場として、「健康を考える集会」を開催している。指導員たちが参加したのはその第五回目の集会だった。

自主的な学習活動に驚く

行ってみて指導員たちはまず驚いた。集まっているのは若い青年男女が中心だ。よく聞いてみると、青年団、4Hクラブ（農業後継者の会）、青年学級など青年たちの意欲的な活動と実践が推進力となっているということだった。それに町のあらゆる婦人組織が提携していっしょに取り組んでいる。

もうひとつ驚いたのは、学習グループが二十もあることだった（後には五十を越える）。テーマは農業、農作業、成人病、食生活、環境、健康管理、医療など多岐にわたっている。

面白いのはグループのネーミングだった。「血圧を楽しむ会」「通風の会」「二・三gの会」など。「通風の会」というのは最初、痛風の誤植かと思ったがそうではない。痛風・高尿酸の人がつくった会だが、通風の方が何となく痛みは軽そうだ。「二・三gの会」というのは、脳卒中後遺症を持つ人の集まりだが、一日の塩分摂取量を8g以内にしようということで、昼食の塩分の量を示している。ともかく、皆がなんとなく楽しそうに学習している様が伺える。

際立った若妻会の活動

発表は二十題近くあったが、その中で若妻会の「子どものむし歯」の取り組み方がすばらしかった。

ある日の若妻会の集まりで、子どものむし歯が多くて困っているという悩みが出された。したら実は私の子どももそうなんだという声が次々と出た。そこで皆で自分の子どもの歯を調べてみようということになった。

実態調査の結果、三歳児で七〇%、四歳児で九〇%、七歳児で一〇〇%のむし歯保有率だった。この実態は、保育所や小学校などの検診統計に頼らず、三カ月かかって自分たちで実施するという回り道を選んだが、そのこの意味は大きかった。自分たちで調べる調査は、一人ひとりの自分の子を自分で調べることで、そのことがむし歯に対する一人ひとりの関心を高めるといふ結果を生んだ。

なぜこんなに高いのかという声が出て、各自の体験から意見交換した結果、「それはおやつではないか」ということになった。そこで今度はおやつの実態調査をやることになった。

調査の結果、おやつとの与え方は多彩で、甘いものが四八%を占めていた。与えているのは、母親が七六%、祖父・祖母が二〇%だった。

若妻会の会長さんは、「いちばん与えているのは母親だったという結果を見て、子どものおやつをコントロールできるのは、自分たちだと分かった。自分たちがもう一度考え直さなきゃということになった」と語る。

帰りのバスは討論会

そこでアンケートの結果を資料として学習が続く。「おやつを与えるのは母親だけではないし、おじいちゃんや近所の人にも協力してもらわねば」「砂糖がなぜむし歯をつくるのか、みんなで調べてみよう」という声が出た。

それでおやつの与え方についての意識調査や砂糖の害について学習が進んだ。その学習の中で、砂糖は歯ばかりでなく、内臓までも悪くすることを学んだ。

さらに、子どものむし歯を予防するには母親が中心にならねばならないが、住民全体に理解してもらわないと効果が上がらないということで、予防対策のためのスライドをつくり、これを持って若妻会では町全体を上映して回った。

予防のためのスライドやパネルを保健婦さんの手でなく、自分たちでつくって町中回ったということがすばらしい。町の保健婦は、上からなんでも与えることをせず、分からないことについてアドバイスしたり、質問には答えるという形で、あくまでも黒子役に徹している。

衛生指導員たちはこの発表を聞いて、ウーンとうなった。「自主的な活動がすばらしい」「学習の教材は全部自分たちでつくっていて、よく勉強している」「人から教えてもらうんではなく、自分たちで学習して問題をつかむことによって、本当に自分たちでやらなきゃという気持ちになる」。

指導員が次々と感想を述べる。帰りのバスの中は、いつのまにか討論会となった。これは途中での夕食時も含めて、村に着くまで延々と三時間続いたのであった。

よく食べ、よく飲み、よく学ぶ

松川通いが始まる

松川町の「健康を考える集会」は、衛生指導員たちに大きなインパクトを与えた。

指導員たちは、健康管理の中でどういう役割を果たしたらよいか常々悩んでいたのも、集会への参加で眼からうろこが落ちたようであった。以来、毎年何人かのメンバーが、交代で健康を考える集会に参加することになる。

一般に、年配者のほうが自分の健康管理に熱心で、若い人ほど健康には無関心であるという

のはどこの町村でも同じだ。

それは若いうちは自覚症状が殆ど無く、年をとるにつれて体のあちこちが具合悪くなってくるから当然ともいえようが、若い人をどう健康面に目を向けさせるかということが、どこでも悩みの種になっている。

ところが松川町では、逆に若い人たちが、健康問題に熱心に取り組んでいる。農薬散布の際の防除着の改良や防除用ヘルメットの作製に取り組んでいるのは、すべて二十代、三十代の若い青年男女たちだ。子どもの虫歯予防に取り組んだのも若妻会である。

それは一体なぜなのか。

モルモットになろう

その答えの一つになると思われるものに、指導員たちの興味をひいた「モルモットの会」の活動がある。

「モルモットの会」といっても、別にモルモットを飼ってひと儲けしようというわけではない。自分たち自身がモルモットになって実験してみようかという、ユニークな発想から生まれた会なのだ。

事の起こりはこうである。

集まったのは、松川町K地区の果樹専業農家の男性グループ。年は三十代から四十代だが、みな健康には自信がある。むしろ病気のほうが寄りつけず、尻尾を巻いて逃げていってしまいそうな屈強な者ばかりだ。

ところが、総合健診（集団健康スクリーニング）を受けたら、コレステロール、中性脂肪、血糖、尿酸、GOT、γ-GTPなど、そのいずれかに異常のマークがついているのが殆どということが分かった。

こりゃいったいどういうわけだと、お互いに話しあってみると、どうも食生活が関係しているらしい。そこで本当に食生活が関係しているのかどうか、自分たちでいろいろなものを食べて、その後血液がどう変わるか調べてみたらという意見が出て、保健婦に相談してみることになった。

保健婦は、待ってましたとばかり、「そりゃいい。私らも手伝うでひとつやってみたら」とけしかける。そういうわけで、とうとう自分たちで実験（いや実践というべきか）を始めることになったという次第。

肉をたらふく食べて

集まったメンバーは十六人。

まず日常食べる機会の多いジンギスカンの焼肉会。たらふく肉を食べて、その前後の血液を調べる。次の月はアルコールの影響。野菜だけをおかずにして、しっかりと酒を飲む。次はバイキング方式によるパーティ。何種類ものおかずをつくり、自分の好みのものばかり腹一杯食べる。

こういう実践は出席率がとてもよい。最後まで落伍者は一人も出なかった。もちろんそれだけでなく、きちんと栄養士に「バランス食」を作ってもらって、それを食べる会も行なった。さて、血液検査の結果は？

焼肉会の翌朝の検査では、とくに中性脂肪の変化が目についた。バランス食のあとは、中性脂肪の変化が最も少なかった。アルコールの場合はその中間だった。ともかく一回の食事ですぐ変化するのは中性脂肪だと分かった。

ところが、中性脂肪といったってよく分からない。それならみんなで学習しようということになり、保健婦、栄養士に頼んで資料をつくってもらい、中性脂肪、コレステロール、尿酸、アルコールなどについて、会食会をやりながら学習を始めた。

この会のモットーは「よく食べ、よく飲み、よく学ぶ」である。こうして会を重ねるうち、いつもなら、のどにつかえるくらいよく肉をたべる人が、次第に脂身の少ないところだけを食べるようになった。また酒もバカ飲みはしなくなったという変化が出た。

メンバーたちは、「いつも総合健診で相談のほうへ回されたが、今年は良いと言われたので嬉しくて……。体重は6キロ減ったけれど、まだまだ落とすに！」とか、「来月に予定している今年の総合健診が待ち遠しいな。どう変化しているか、その読み取りの学習会が楽しみだに」と話している。

得になって楽しいこと

この取り組み発表を聞いて、衛生指導員たちはどう感じたか。
こんな意見が次々と出た。

「自分たちで発想したという点がいい。自分たちで考えたことだから、皆とても熱心になる」「酒をふんだんに飲んでご馳走を食べられるなんて、出なきや損だという気持ちにみんななるね」「みんなとても楽しそうだ。落伍者が一人も出なかったのも、やはり楽しいからだろう」「町で学習会を企画するのではなくて、自然と学習会を持とうという気持ちになっていったのがい」等々。

この取り組みが毎年の総合健診にきちんとつながってるのがよい。取り組むうちに、健診に対する関心が自然に高まっていったのは見事な結果である。

健康管理活動を広げていくためには、一つはそれが自分たちの得になること、もう一つは楽

しいことが大事だということだ。衛生指導員たちの度重なる集会への参加は、決して無駄ではなかった。

これはやがて、指導員を中心とした「地区ブロック活動」として花開くことになる。

健康大会から健康まつりへ

健康大会を開いたが

八千穂村では、毎年の健康健診が始まる前に、佐久病院の医師などを招き、講演会を開いていた。これは受診啓発と健康教育という両面を兼ねていた。

これは役場の計画で実施してきたもので、それなりの成果はあげてはいたが、講演会はどちらかというと、話を聞くということだけに終わって、ややマンネリ化の傾向にあった。そこで何か違う形のものがないだろうかと衛生指導員の集まりなどで、何回か話題として取り上げられるようになった。

そこで昭和五十六年十一月に、初めて「健康大会」を開くことになった。これは医師の講演会を主にしながら、保健関係や料理の展示、体力測定などをつけ加えたもので、よりみんなが

楽しく参加できるものにといいことであった。

指導員の高見沢佳秀さんは、八郡区で以前、お年寄りの関節の動き具合や幅跳びなどの計測をやった経験があったので、早速体力測定の仕事をまかされた。

その後、二回ばかり健康大会が開かれ、内容や当日の役割など若干の広がりは見られたものの、結局は、役場主導のもとに一部関係者の取り組みということで、住民自身が自ら企画して参加するという形にはなっていなかった。

焼鳥屋の二階で大議論

昭和五十九年の春、衛生指導員会長の佐藤英男さん、副会長の高見沢佳秀さんと今井恭夫さんの三人が、ある焼鳥屋の二階で、例によって酒を酌みかわしていた。

雑談の中から、話はいつの間にか医師たちの講演会の話題になっていった。「講演もいいけど、どちらかという話を聞くだけに終わってしまって、俺たち村民の身にしみた取り組みになっていねえんじゃないか」と高見沢さんが言い出したのが発端になった。

佐藤さんも「それもそうだな。だけど何かうまいやり方があるかい」と相づちを打ちながら、「おら等だけじゃどうもうまい知恵が出てきそうもねえな。まだ時間も早えから佐久病院の若い衆を呼んでいっしょに話をしてみろさあ」と提案。「そうだ。佐久病院の八千穂担当の衆と

今日も飲むのいいな」と今井さんも賛成した。

佐久病院健康管理部では、集団健康スクリーニングの実施で、健診が全県的に広がっていたので、それぞれ地区担当を決めて取り組んでいた。その中で当然八千穂担当というのもつくられている。

早速、たまたま病院に残っていた保健婦の佐々木徳子（現姓・菊池）、小須田文恵（現姓・征矢野）、事務の飯島郁夫、島田三代治さんたち、八千穂担当の面々が焼鳥屋に駆けつけてきた。病院の職員も、思いは同じようだったようで、顔を寄せ合つての話し合いが続く。結局、住民の代表が寄り集まって実行委員会をつくり、「健康まつり」というのをやったらどうだろうかという話になって議論がもり上がり、その夜は更けていった。

「健康まつり」という考えに至つたのは、秋田県象潟町きさかたの上郷健康センターかみごうが中心になって、昭和四十七年から開いていた「上郷健康祭」が頭にあったと思われる。ここへは、役場の衛生係と佐久病院健康管理部で二回はかり視察に行っている。

早速、次の衛生指導員会で会長より提案することになった。佐久病院からあまり口出すのは、役場担当者の面子もあり、好ましくないということで、指導員会として提案することにしたのである。

五十人の実行委員会をつくって

ところが当日、根がまことに実直な建具屋さんの佐藤会長さんは、「エー、この間、病院の人たちと相談したところ……」と始めたものだから、隣に座っていた高見沢さんはビックリ。あわてて会長の袖を引っぱったもののあとのまつり。

役場の意向はどうかと心配したが、結果は、出浦住民課長さんや担当者の方も賛同してくれて、取り組みのための予算やその他の工面も積極的にしてもらえることになった。村もやはり今までの「講演会」方式だけでは限界を感じていたようである。

こうして、しばらく準備を重ねた後、九月に公民館、区長会、農協、婦人会、商工会、老人クラブ、社協、婦人の健康づくり推進員、食生活改善協議会、衛生指導員会、佐久病院、役場（農政・衛生）など、村内の各種団体の代表者五十人が集まって、第一回健康まつり実行委員会が開かれた。

そして実行委員の手で、すべて計画立案、運営をすることで、十一月に「第一回健康まつり」を開くことが決まった。実行委員会の中に、「企画宣伝部」「展示発表部」「健康づくり部」の三部会がつくられ、実行委員がそれぞれ分担して取り組むことになった。

しかしここまでこぎつけたものの、さあ大変である。とても時間がない。指導員たちの顔に、本当にできるんだろうかと不安の色がたよう。企画・運営のほかに、指導員としても何かや

らなくてはならない。

ここで力を発揮したのは、やはり三役だった。結局、村民のみなさんの健康についての考えを知るために、アンケートを行なって、健康まつりの当日に発表しようということになった。アンケートの内容については、衛生指導員会議で、夜遅くまで何回も検討した。項目は大きく分けて、病気（とくにがん）に対する意識、健康健診についての考え、生活状態の調査、その他の四項目とし、それぞれいくつかの質問項目を設定した。

そして十八歳以上の全村民を対象に、各地区の衛生部長さんの協力を得て、アンケートを実施した。住民の関心も深く、回収率は七八・六%で、約三千人の回答が集まったのであった。

皆でつくった第一回健康まつり

バスで続々と会場へ

昭和五十九年十一月十一日。いよいよ「第一回健康まつり」の日である。朝九時には五十人の実行委員が村の福祉センターに勢ぞろいした。村民が本当に集まってくれるだろうか。皆心配げに外を眺めている。

実行委員も、それぞれの団体も、自分たちの身近な問題を取り上げ、夏以来苦労を共にしながら、今日までがんばってきた。新しいやり方でもあり、一つひとつの企画づくりに、燃えるような意気込みが感じられた。

衛生指導員も毎晩集まり、アンケートの集計を行なった。パソコンなどない時代なので、一人ひとりが「正」の字を書きながらの集計で本当に大変であった。パネルづくり、資料づくりも前夜遅くまでかかった。

十時の開会二十分前には、うその口区からの第一陣のマイクロバスが到着し、にぎやかに受付が始まる。山間部のお年寄りたちも気軽に参加できるようにと、マイクロバスが三台用意され、計画的に各地区を回ってきたものである。実行委員の心配をよそに、続々と村民が会場へつめかけてきた。

体力づくりの実演から

健康まつりの午前の部は、まず体力づくり。ジャズ体操、ストレッチ体操、ヨガなど。それぞれ得意とする村民が指導者となって教えている。

ホールでは、アップテンポの音楽と掛け声のもとにジャズ体操が進行中だ。婦人会の大橋清江さんが年に似合わず、正面でさわやかにリズムに乗って手足を伸ばしている。大橋さんはも

う三十年も「栄養グループ」で、村内の栄養改善に努力した人だ。さすがに足取りは軽い。老いも若きも四十人ほどがそれにつられて、心地よい汗を流している。少しハアハアと息をはずませている人は、日頃の運動不足がたたっているせいだ。

続いて、ゆっくりとしたストレッチ体操。体育指導員からは「いつでも、どこでも、誰にでも生活の中でできるのがこのストレッチ体操です」と説明がある。

ヨガは和室。そっと襖を開けると、ホールとはうって変わって、咳ひとつない静かさ。病院の小林栄子保健婦を中心に、なにやらのポーズ。

体力づくりの実演と同時に、ホールでは各種のパネルにより、展示発表が行われている。ガンを予防コーナー、老化防止コーナー、それに衛生指導員が全員でまとめた「健康管理二十五年の歩み」など、いずれも、現代のものを先取りしたような内容である。指導員がそれぞれ分担して、熱心に説明している。

その他、「あわてて失敗しないために」という救急法の映画上映や、希望者に対しての健康相談もあった。

手づくりのおやつコーナーでは、婦人の健康づくり推進委員が腕によりをかけてつくった各種おやつがなかなかの人気。

やがて昼食。婦人部の手づくりの「とり釜飯」がみんなに配られる。お昼のアトラクション

は、天神町の人たちの踊り。それを見ながら箸を動かす。病院のコーラス部も駆けつけ、「農村巡回検診隊の歌」で盛り上げてくれる。

アンケート結果を発表

午後になって、いよいよ健康まつりのメインテーマである体験・経験発表が始まる。がんや脳卒中になった体験から、予防の大切さを訴えた発表、有機農業で野菜づくりと健康づくり、環境問題と健康についての発表など、なかなか多彩なテーマが続く。

指導員の渡辺憲太郎さんは「衛生指導員活動について」と題して、指導員は村民と関係機関、団体とのパイプ役であることを強調し、その活動を紹介した。

そして最後は、井出正指導員が、衛生指導員が毎晩みんなで苦勞してまとめた「健康管理住民アンケート結果から」を発表。病氣に対する意識、健康検診に対する考え、生活実態などに分けて住民の考えを紹介した。そして「病氣になると怖い、大変だということ、村民のみなさんはよく分かっている。しかし病氣にならないために、また病氣を早く発見し早く治すということが行動としては出ていない。自分の健康を守ること、もっと積極的に取り組もうではないか」と結んだ。

これは長年、健康管理に取り組んできて、村民の健康意識はまだ不十分であるという、い

ささかショッキングな内容であった。

最後に若月院長が講評に立ち、「医者や保健婦だけが住民の健康を守るのではない、住民代表がその立場で働き、いろいろな意見を出すことが大事だ」とのまとめがあった。

新たな第一歩を踏み出す

かくして第一回の健康まつりは成功裡に終わった。集まった村民は最終的には三百人を超えた。単に講演を聞くのではなく、住民自らが実践や研究をして、その体験発表をする。これは松川町にも学んだことであった。

現在では、多くの地域で「健康まつり」（最近では、「健康福祉まつり」と変わってきている）が開かれているが、この当時は、住民の中から沸き上がってきたものは、まだ珍しい時代であった。その中で、企画・運営に自分たちで取り組んだ衛生指導員の果たした役割は大きなものがあった。

第一回健康まつりの反省から、次の年からは、「高齢化にそなえての部会」「生活環境の部会」「生活習慣と健康の部会」「健康の仲間づくりの部会」の四つに分けて取り組むことが決まる。

いろいろ苦労しながらも、村の人たち自身がつくり上げていった健康まつり。これからの健康な村づくりに、新たな第一歩を踏み出したのであった。

はじめての演劇に取り組む

健康まつりに劇をやる

年が明けて、昭和六十年になった。衛生指導員も四年の任期が過ぎ、何人かのメンバーが入れ替わった。会長には、前副会長だった高見沢佳秀さんが推薦された。

やがて第二回の健康まつりの時期がやってきて、指導員会議が開かれた。第一回ときには、指導員独自のアンケート調査の発表をしたのだが、第二回目も何か独自の発表をしたいということ、みなで頭をひねって考えたが、なかなか良い案が出てこない。

すると誰かが、「寸劇でもやったら」とポツンと言った。「それはよい」「それはいけそうだ」とみなが賛成。しかし、問題はいくつもある。劇をやったことのない指導員に果して劇ができるのか。脚本は一体誰が書くのか。いろいろ討議した末、結局、脚本は会長にやってもらおうということになった。実は高見沢さんは、青年団時代に少し演劇に関わったことがあった。

さて何をテーマとするのか。住民に何を訴えたらよいのか。

当時、指導員の活動でいちばん主だったのは、胃がん施設検診の受診勧誘で、なかなか受診

率があがらないので苦勞していた。指導員もみな三十歳代の人が多く、対象の四十歳以上の人に胃がんの施設検診を勧めにいつても、抵抗があったし、指導員も説明しにくかった。自覚症状もない年配者は、若い者のいうことをなかなか取り合ってくれなかったのである。

高見沢さんは、「よし、そのことをテーマにしよう」と決め、早速取材のために何軒か歩いた。そしてでき上がったのが、『ガンコ親父の胃がん施設検診』という一幕である。

内容は、ガンコ親父の武造が、衛生指導員の一雄から検診を勧められるが、初めは「胃がんなんかやたらにかかるもんか」と拒否。しかし家族の説得で受診すると、早期胃がんと分かり、手術をして命拾いをしたという筋であった。これは実際にあった話である。高見沢さんはその後、脚本を多く手掛けるのだが、いつも実話をもとにしている。実際の話や出来事のほうが、みなに訴える力が大きいと考えたからである。

練習にも次第に熱が入る

さてシナリオはできたけれども次は配役である。初めてのことでみな尻込みしている。わずか五人の出演だが、なかなか決まらない。仕方がないので、脚本を書いた会長の高見沢さんが主役の武造役を買って出た。そして三回も会議を重ねてやっと全員が決まった。

いよいよ練習が始まる。しかし、どうもうまいかない。保健婦役になった興水文雄さんが

まじめに一所懸命にやればやるほど、みなが吹き出してしまい、練習が中断してしまう。

困った高見沢さんは、佐久病院劇団部の羽毛田牧夫さん（元診療協力部長）に相談した。練習を見た羽毛田さんは、「この劇はお笑いではないので、興水さんには気の毒だけれど、保健婦役はやはり女性でなければ無理ではないか」とアドバイス。

そこで早速、指導員たちは役場に頼み込み、村の保健婦の中島幸枝さんに急遽出演してもらうことになった。練習も後半に入ると、あれほど嫌がって役者になった指導員たちに、驚くほど熱が入ってきた。

今回の劇には、役場や佐久病院の人たちも大きな応援をしてくれた。

役場の相馬文雄さんはマネージャー役を引き受けてくれた。佐久病院の桜井賢彦さんは、幾晩もかけてすばらしい音響効果の仕込みをしてくれた。照明の機材搬入やセットには、同じく佐久病院の新海盛夫さん、井出久治さんたちが活躍してくれた。プロンプター役をかってでた佐々木（現姓・菊地）徳子さん、何かと面倒見の良かった小須田（現姓・征矢野）文恵さん、飯島郁夫さん、嶋田三代治さんらの八千穂担当の面々も、毎晩欠かさず練習に参加してくれて、そのでき具合を見守ってくれた。

わずか二十五分くらいの劇だったけれど、あわせて十五、六回は練習した。詰めの段階に入ると衣装をつけメイクをして練習した。

しかしメイクをするといっても、ドーランを塗るのはみな初めて。

最初に真っ白い化粧を塗ってしまったから、ちょうどテレビでみる志村ケンの『バカ殿様』のようだともなで大笑い。ガンコ親父は口の回りは髭だらけということで、真っ黒に塗られてしまった。こちらはパンダになった。

すばらしい劇に大拍手

そして十一月十七日、いよいよ健康まつりの当日である。劇の発表は午後のいちばん最後だ。出演者たちはなんとなく余裕があった。指導員の一雄役の桜井三郎さんは、高見沢さんから「あがらないように一杯飲め」と言われたので、舞台裏でチビチビやっていたが、待ちくたびれ、気持よくなって寝込んでしまった。

武造の息子役の内藤勇市さんは、幕の横から観客が三百人以上入っているのを見て、「よし、やってやるぞ」と張り切っていた。その反面、周りの裏方の指導員、役場、佐久病院の担当者たちは、緊張のため、そわそわと落ち着かなかった。

結果は大成功で、多くの人たちの協力で、すばらしい劇になった。「良かった」「本当に良かった」。幕が下りたとき桜井さんと内藤さんは、思わず舞台で抱き合った。

それは寸劇どころか、本格的な演劇であった。満員の会場の人たちが瞬きもせず、熱心に観

てくれた。幕が上がって、一人ひとり役者と裏方が紹介される。そのたびにまた割れるような拍手。

そのあとの慰労会は裏方の人も入れて大いに盛り上がった。「あのときの酒の味は忘れられない」と、今でも指導員たちは言う。

劇の上演で仲間づくりができた

劇の効果はてきめん

衛生指導員の初めての劇『ガンコ親父の胃がん施設検診』はとても好評だった。その効果は早速いくつかが現れた。

一つは、劇そのものの教育的効果である。あちこちの区で、ガンコ親父がいっぱいいたが、それが胃がん施設検診を進んで受けるようになった。「演劇は、高名な学者の講演よりも、地域の人たちにとっては心に残るものである」と、かつて若月院長が言われたことを、衛生指導員は見事に証明したのであった。

さらに大きな成果は、指導員の仲間づくりができたことである。交代で新しくなった指導員

会が、劇を通じてお互いに仲良くなり、すぐくまとまりができてきた。みなで一つのを力を合わせてつくり上げた、そのことが組織づくりにつながったのである。このつながりが、後に衛生指導員不要論が出てきたときに、大きな力を発揮するようになるうとは、そのときは誰も予想しなかった。

第一回目の演劇上演の大成功に、指導員たちはみなで喜びを分かち合いながら、来年もぜひ劇をやろうと固く申し合わせた。

一旦は中止を決めたが

ところが一年たって、次の健康まつりの取り組みを考える時期が来たとき、衛生指導員会では、なぜかあのときの感動よりも、苦労ばかりがみな頭の頭に残っていた。「劇はよかったけれど、あんな大変なのはやりたくねえな」と誰かが言った。

いろいろ議論の結果、毎年は大変だからということで、今回は劇は休むことに決定してしまった。

その頃、指導員会が終わると必ず一杯やることが決まっていた。その夜も大勢の指導員が飲み屋に流れていった。指導員会に出ていた役場の担当者や病院の八千穂担当もいっしょである。その席でいろいろ話すうち、指導員たちは劇をやめたことに、どこかに引っ掛かるものがあった。

たようだ。

お酒がまわる中で、指導員の井出正さんが、病院の飯島郁夫さんにからんできた。「おめとう（お前たち）は、本当は劇をやって欲しいと思ってるすら。そんならそうとみんなに言ったらどうだ」と。

「それはやったほうがいいと思うけど、無理矢理やっても仕方がないし、みんなの気持がいつしよにならなければ意味がないじゃない」と飯島さん。井出さんはさらに声を荒げた。「かっこいいことを言うな！ 本当は劇をやってほしいとみんなに言え」。

飯島さんも井出さんの気持ちはよく分かっていて。井出さんもその夜は何かすっきりしないものがあつたようである。

若手の意見で劇を復活

それから数日したある夜、桜井三郎、内藤勇市、渡辺春雄、桜本源一郎さんら、指導員若手メンバーが焼鳥屋に集まり、一杯飲んでた。その中で、劇は毎年続けなければ意味がない、どうでも復活させようという話になった。

四人は、早速その場に会長の高見沢さん呼び出した。高見沢さんはなんのことやら分からず焼鳥屋に駆けつけたが、劇をやるうという若手メンバーの話を聞いているうちに次第に嬉し

さが込み上げてきた。すごいぞ！うちの若手たちは。

次の日、高見沢さんは役場にとんでいき、緊急に指導員会議を開いてもらうよう申し入れた。そんな人たちの前向きの姿勢に動かされ、結局その年も「健康まつり」で、指導員が演劇にとりくむことが決まった。

内容は、若手メンバーがすでに話し合っており、すんなり決まった。八千穂村の健康管理の歴史をやるというのである。脚本をまかされた高見沢さんはテーマの大きさに難渋した。昭和三十四年になぜ全村健康管理が始まったのか、当時の人たちはどんな考えを持っていたのか。高見沢さんは取材に走り回り、役場や病院の資料を引っ繰り返した。そして長編の『生きる』という脚本が漸く完成した。

一回目に比べて倍以上に長かったけれど、みな力が入っていたので、練習はやりやすかった。役者には、村から保健婦の中島幸枝さん、病院からも保健婦の佐々木（現姓・菊池）徳子さんと佐々木（現姓・高柳）ひろみさんが参加、協力することになった。

指導員の内藤勇市さんは専門が看板屋さん、同じく桜本源一郎さんは大工さんなので、舞台づくりはお手のもの。内藤さんは、立て看板をつくりながら、何とか工夫して人を寄せつけるような内容にしようと気持を打ち込んだ。

健康まつりの当日、集まった人たちは、自分の村の健康管理の歴史を熱心に観てくれた。

なくてはならなくなった演劇

さて、三年目。もう劇は「健康まつり」にはなくてはならないものになっていた。衛生指導員で反対するものは誰もいなかった。村の人たちも、健康まつりの指導員の劇を毎年待ち望むようになった。問題は、村の人たちに何を観てもらおうかということであった。

最初は健診を受けようとか、健康とは何かを考えようといった内容が多かった。しかし時代の流れの中で、村でもお年寄りの問題、寝たきり老人の介護の問題が始まっていた。テーマは必然的にお年寄りの問題に移っていった。

そのような中から、さまざまな地域で上演されるようになった名作『看る』が生まれた（第五作目）。この上演の様子は、「プロローグ」に示したとおりだ。現在、高見沢さんの書いた脚本は四十数本に及ぶ。この大部分は衛生指導員が上演している。

演劇は問題提起だという。地域住民に問題を提起し、そして住民自身がみずから考え、みんなで話し合う。そこから住民を巻き込んでの新しい活動が始まる。その機会を演劇がつくってくれる。

今や演劇活動は、指導員活動のいのちになった。

VI

衛生指導員に激動の嵐



健康まつりでのストレッチ体操

健診日程に指導員会が反発

日本一の長寿の村を

衛生指導員の「健康まつり」での演劇上演はとても評判になった。あちこちの地区からも上演を依頼されるようになった。それは八千穂村だけに限らなかった。毎年五月の小満祭に合わせて行われる佐久病院の「病院祭」にも、いくつか上演するまでもなった。これからの衛生指導員活動にとって、演劇上演が大きな弾みになったように思われた。

ところが、実際はそううまくは運ばなかった。一つは、昭和六十一年に役場の衛生係が代わって、健康管理の進め方がガラリと変わってしまったのである。

年度が新しくなって、佐々木（澄雄）村長は、「どうしたら日本一の長寿と健康の村になれるか、よく考えてくれ」と担当課に命じた。村長は以前から、「日本一の長寿と健康な村をめざそう」というスローガンをかけ、それを記した柱を国道一四一号線の道路脇に建てていた。

村長から言われて、住民課ではどうしたらよいかと頭をひねった。長寿を実現するには、疾病の早期発見や生活習慣の改善に力を入れなければならないが、よく考えてみると、今までの健康管理は、佐久病院におんぶにだっこの面が多かった。もっと役場が主体になって進めなけ

ればいけない。

その考えはよかったのだが、役場主導にこだわり過ぎて問題が生じた。

村の健診日程の作成が反発を招く

昭和六十一年十一月、村の総合健診の時期がやってきた。衛生係は、これは役場の仕事だと、全地区の健診日程を作成して、衛生指導員会にかけた。ところが予め健診日程が決められていたことに、指導員たちは反発した。

今までの健診日程の決め方は、衛生指導員会で、それぞれの地区の希望を出しながら、皆で相談して決めていた。「俺の担当地区は雪が降るのが早いので、年内にやってくれ」とか、「暮れは商店街が忙しいから、正月が過ぎてからにしてくれ」とか、希望を出し合って決めた。受診率を上げるためには、できるだけ皆の都合の良いときに健診をしたいというのが、衛生指導員の願いだった。

日程がかち合ったときは話し合って決めたが、時にはかち合った両者が譲らず、喧嘩になったこともあった。それだけ、日程編成には皆真剣に取り組んだ。

また衛生指導員は、自分の担当地区だけでなく、他の地区へも交代で参加して、お互いどうし援助しあった。

それはまた、指導員の学習の機会でもあった。「この地区はこんなやり方をやっているね」とか、「ああいうやり方はいいいね。うちでも取り入れよう」とか、「こうやったら受診率が上がるのか」とか、その地区の取り組みを見て、お互いの参考にしたのである。極端に言えば、他の地区のやり方を盗みに行ったといってもよい。

誰がどこの地区へ手伝いにいくかも、希望に応じて皆で相談して決めた。飯島郁夫さんは、佐久病院の健康管理部に入って、初めて衛生指導員会に参加したとき、その日程の決め方を見て「これはすげえな」とびっくりした。こんな住民主体のやり方は、どこの町村でもやっていないことであつた。

それが相談なしに、役場で一方的に日程が決められ、さらにお手伝いは、婦人推進員がいるため、指導員は不用になったと説明された。

これには衛生指導員たちも頭にきた。「勝手に決めないでほしい」「担当区になんと云つたらよいか」「担当区にこんなこと言えねえや」など意見が相次いだ。衛生指導員には、地区から推薦され、地区の声を代表する保健活動家としての責任がある。

各地区の健診が全部終わって、衛生指導員、衛生部長、婦人推進員の合同会議があつたときに、高見沢さんは会長として、こう云つた。「このやり方は合理的かもしれないが、どんな良い方法を考えても、一方的にやられては皆が納得しないし、一所懸命にやろうとしている者は

ど、がっかりしてやらなくなる。もうちょっと相談をかけてやってくれ」と。

婦人の健康づくり推進員の強化へ

もう一つ、衛生指導員に問題を投げかけたのは、「婦人の健康づくり推進員」の組織化のことがあった。

婦人の健康づくり推進員（以下婦人推進員と略す）は、既に昭和五十九年に四十人設置されていて、衛生指導員の補助的な役として、健康健診やその報告会とか、健康まつりの際に活動していた。その組織をもっと強化して、健康管理の仕事に本格的に参加できるようにしたいと衛生係は考えた。

殆どの町村では、すでに婦人推進員（名前は各町村で異なり、保健補導員とか、健康推進員とかいろいろある）という組織がきちんとできており、行政の手となり足となり活躍していた。県や佐久地区単位での組織もできており、年一回の集まりもある。

かつてその佐久地区の集まりのときに、指導員も行ってくれと村から頼まれ、小宮山則男さんや高見沢佳秀さんから三人が出席して発表したことがある。そのとき、当然ながら男性は八千穂村だけだったが、集まった各町村の出席者たちは、八千穂村の男性の衛生指導員という組織を羨ましがった。

しかし役場からすれば、衛生の仕事を進めていくのに、なんとしても他の町村の婦人推進員というのは魅力的に見えた。より深く地域に根ざした健康管理活動を進めるためには、女性の力を抜きにしては考えられないと担当は考えた。

婦人推進員の強化という考えは、健康管理推進には大きな力になると思われたのだが、これが衛生指導員との間に摩擦を起こすことになった。

衛生指導員廃止の動きが出る

婦人推進員の組織を確立

村の衛生係はいろいろ考えたが、健康管理をもっと推進するには、今の十四人の衛生指導員ではとても足りないと思った。そこで、四十人の婦人の健康づくり推進員の組織をガッチリと固め、本格的に活動してもらうことに決めた。

まず取り組んだのが、婦人検診の希望者取りまとめである。男性の衛生指導員が婦人検診の取りまとめをするのは、やはりやりにくい面がある。聞くほうも聞きにくいし、答えるほうも「あんた受けるの、受けないの」としつこく聞かれるのは嫌だ。そういうわけで、婦人推進員

による取りまとめはとても好評だった。そのせいか受診率が大幅にアップした。

衛生係は言う。「婦人推進員はよく動くね。小回りが効く。それに予め婦人推進員を集めて料理講習会をやっておくと、健診の報告会のときや、糖尿病教室やがん予防教室をやるときに頼めばどの区でもパツと料理講習会を開いてくれる」と。それに婦人は、日頃の付き合いが村の中にある。ふだんの人間関係ができているから、それがいざというときに効いてくる。

「婦人推進員だと『ちょっと来てえ』『ハイよ』と、すぐ人集めをしてもらえるが、衛生指導員は、日頃勤めている人が多いから、そういう気さくなことはむずかしいね」と係は言う。つまり、女性のほうが事業展開がとてもしやすいということだった。

衛生指導員としては存在意義が疑われる状況となったのだが、指導員自身にも反省点があった。演劇への取り組みはいいとしても、衛生指導員の日常活動、地域活動に問題がなくはなかった。とても熱心に取り組む人もいるが、そうでない人も若干いる。健診の取りまとめもなかなか出してくれなかったり、指導員会議にも、出て来ない人もいた。

これには、指導員に勤めの人が多くなってきたことと関係がある。

活動するには、夜か、休日のときしかない。どうしても取りくみが遅れがちになる。十四人が一、三の地区を担当して責任もっているから、一人でも報告が遅れても係は大変困る。それに対して婦人推進員は各地区ごとにいるので取りくみが早い。活動も昼間に出来る。

「指導員をなくします！」

婦人推進員が活躍するにつれて衛生指導員の役割が問題になってきた。同じような業務を持つ組織がなぜ二つあるんだということが役場内でも問題になった。役割をもう少し整理しろとも言われた。とくに財政の方からは、衛生指導員と婦人推進員の報酬のことが問題になった。会議の際の日当のことである。

昭和六十一年秋頃から、次第に、衛生指導員はいらないのではないかという声が囁かれるようになった。婦人推進員だけで十分だというのである。

佐久病院の八千穂担当と役場の衛生係とは、毎月一回事務局会議を開いて、健康管理の打ち合わせを行っている。六十二年の一月の会議で、飯島郁夫さんは、衛生係に「衛生指導員をなくすつもりなのか」と聞いた。すると衛生係は即座に「なくします！」と答えた。その理由は、とても財政が厳しいからだということであった。

飯島さんはビックリして、早速高見沢さんに伝える。高見沢さんはこれはエライことだと、トラさんに電話する。トラさんは第一期衛生指導員会長であり、村議会議員もやった。トラさんは、「そんなことは絶対ねえよ」と言いながら、「待て、おれが調べてくるから」と役場へ行っていった。

トラさんは、早速、佐々木村長のところへ行って、そのことを聞いたのだが、村長は「そんなことは聞いていないよ」という返事だった。まだ村長のところまで上がってはいなかったのだ。トラさんはホッと胸をなで下ろしたが、それで安心するのはまだ早かった。

自主的な指導員会議に

六十二年二月になって、住民課から、衛生指導員の三役（会長と二人の副会長）が呼び出された。そのとき、「今までは指導員のみなさんとは、月に一回会議をやっていたけれども、これから経費節減のため、何かやるときだけ指導員会議を開くことにする」と申し渡された。これを聞いて、三役は困ったと思った。指導員会議が開かれなければお互いのコミュニケーションがとれなくなる。どうすればいいかとお互いに話し合った結果、手当ては出なくとも、自主的な指導員会議を毎月一回、自分たちで開くことを決めた。

今までは会議の開催通知は役場から出たが、これからは出なくなった。そこで指導員会で通知を出すことにしたが、今までは必ず出席していた衛生係は出なくなった。

健康管理の仕事は、役場主導で進めることになったので、衛生指導員は会議で協議する議題がなくなった。そこで、病院の医師や担当者呼んで、学習会を主としてやることにした。

「これからの衛生指導員活動はどのようにやったらよいのか」「各地区ではどのように取り組

んだらよいか」について、かなり議論を交わした。衛生指導員は役場の単なる下請け機関ではないぞという思いがそこにあった。演劇の上演以来、一つにまとまった衛生指導員たちは、「村にどうしてもなくてはならない組織にしよう」と意気込みはさかんであった。

この状態で約一年は過ぎたが、やがて住民課では協議を重ねた結果、衛生指導員は健康管理の中でリーダーシップをとってもらうこと、環境衛生の仕事は従来どおりやることということで片がついた。衛生指導員会の規約にも、はっきりそのことが盛り込まれた。

しかし、各集団健診の受診勧奨と健診のお手伝いは婦人推進員の手に移っていった。

村民ドックでまたひと揉め

観光開発よりも人間ドックを

昭和六十一年ごろから、八千穂村では「八千穂高原開発構想」が進められていた。ゴルフ場を含めた観光開発である。その理由は、開発によって自主財源を確保したいということであったが、当時は南北佐久地域を通じて、スキー場やゴルフ場をつくるのが一種のブームになっていた。

早速、藤田観光らが乗り出してきたが、これをいちばん危惧したのは、八千穂村議会の小椋茂議員であった。議会が開かれるたびに執拗に質問を繰り返し、その経済効果には疑問があるとし、また八千穂村の美しい緑と水が破壊される心配があることを訴えた。

その代わり、以前から八千穂村では健康管理の村をうたっているのだから、がん対策として、人間ドックを全員にやったらどうかと提案した。

八千穂村では健康管理を始めて三十年近くにもなるが、まだがんによる死亡者が年間八人から十人は出ている。日本一健康で長寿の村を目指すならば、まずがん死亡をなくすことである。さらにがんで手遅れになると、一人で数百万円の医療費がかかる。もし一人助ければ、それだけの国保医療費が助かるではないかというのである。

これはなかなか説得力のある意見であった。議会でいろいろ論議の末、佐々木村長も最終的には賛成し、観光開発は中止、人間ドックをすすめることになった。

問題は人間ドックの財源をどうするかということであったが、別荘地を貸し付けるということで、なんとか確保できるという見通しがついた。そこで、六十三年度から実施と決まった。

「もっと住民の意見を聞いてほしい」

あまりにも早い決定に、衛生指導員も佐久病院の担当者もびっくりした。以前に一般健診から集団健康スクリーニングに移行するときは、一年間かけて、やるかやらないかと随分論議を重ねたことがあったからである。

そのときは佐久病院からの提案であったが、今回は村からの要望である。住民課ではそれを受けて三十五歳から六十九歳の約千人に実施することにしたが、人間ドックは、新しく八千穂村に開業した八千穂クリニックスの青木医師にやつてもらうことにし、佐久病院は従来の健診を続けてやるというふうに、一方的に決めてしまった。

驚いた衛生指導員たちは、「なぜそのように決めたのか」と衛生係に質問したら、衛生係は「そのほうがやりやすいから」と答えた。そこで「受ける側の意見を聞かなくてもいいのか」「もっと住民の意見を聞いてほしい」と指導員たちが反発した。

もちろん佐久病院も人間ドックは以前からやっていたし、十分受け入れられる態勢は整っていた。それに検査設備の整っている病院のほうが、本来は人間ドックに適している。

一方、人間ドックは最高によい健診だが費用がかかる。

村の健康管理を進めていくには、暮らしも直しながら、がん検診や婦人検診やその精検も含めて、年間にわたって各検診のたびに、いつも自分の体をチェックしていくチャンスがある集

団健診と健康教育のほうで、より適しているという点もある。だから、ドックをいきなり村の健康管理にするのはどうなんだろうかという意見もあった。

だが集団健診だけでは、がんの早期発見は無理な点もある。岩手県の沢内村でもドック式の健診をやっている。がんの早期発見にはぜひ人間ドックをとるという村の意見も、もっともな点がある。

それに最近は勤め人が増えてきているので、一回で検査がすべてできる人間ドックのほうが便利だと衛生係は主張した。

衛生指導員会も意見が真二つに

衛生指導員の間でも意見が真二つに分かれた。「人間ドックはいちばんいいから、すぐにでも進めるべきだ」という意見と「いや、個人負担のこともあるし、もう少し住民に説明し、よく検討してからの方がよくはないか」という意見があつて議論が沸騰した。

たまたま衛生指導員会の勉強会に出ていた佐久病院の井益雄医師が、「人間ドックもいいけど、集団健診にもこんないいところがあるんだよ」と、例をあげていろいろ説明したところ、ある指導員が「あんた、何を言うんだ」と食ってかかった。「ドックがいちばんいいのに決まっているじゃないか」と口論になり、もう少しで喧嘩になりそうであつた。あわてて、飯島郁夫

さんが止めに入るといふ一幕もあった。

人間ドックをやるといふ村の方針が、討議が十分でないまま、あまりにも早く決まってしまうので、衛生指導員にも病院側にも若干のとまどいがあったのは当然だったろう。

いろいろ議論があったが、結局人間ドックは一年おきに、従来の総合検診と交互に、佐久病院と八千穂クリニックの両方でやることに決まった。どちらを受診するかは住民の選択にまかせるというものであった。住民の意向が考慮されたのはまあよかったといえる。

問題は経費だが、日帰りドックの費用三万二千円のうち、個人負担は一万円で、残りは村で出すことに決まった。国保からさらに七千円の補助があるので、国保加入者は三千円の負担ですむことになった。わずかな費用でドックが受けられるとあって、総合健診と合わせた受診率は飛躍的に向上した。今まで集団健診を受診しなかった人が初めてドックを受診した例もあり、未受診者の掘り起こしには大きく役立ったといえよう。

しかし、一年おきに受けたとしても、村の負担は毎年平均約千五百万円と相当大きいものであった。つい一年前に財政難を理由に、衛生指導員会を止めるといわれた指導員たちには、なにか割り切れない感じが残った。

乗り切った激動の四年間

問題が続いた四年間

昭和六十年から六十三年までの四年間を、当時任期中だった衛生指導員たちは「激動の四年間」と呼ぶ。

就任当時は十三人の殆どが初対面だった。最初は早くお互いを知ろうと、また良き仲間づくりをしようと、何かにつけて飲み会をした。でも本当に心を合わせ、力を合わせることができたのは、健康まつりに初めて演劇に取り組んだときであった。監督を中心に、配役、スタッフ、役場、病院の担当が一つになり、すばらしい劇をつくり上げた。

これがきっかけとなって、指導員が一つにまとまり、地域のためにどう取り組んでいこうかと張り切っていた矢先、役場の担当が代わってしまった。それ以後、婦人の健康づくり推進員の設置と役割の移管、衛生指導員廃止の問題、それに人間ドックの実施と、さまざまな大きな問題が続いたことは、前に述べたとおりである。

役場の衛生係と衛生指導員は、健康管理の進め方で対立することもしばしばだった。ある意味では、衛生指導員の活動が試された時期だったし、成りゆきによっては、全村健康管理の根

幹を揺るがしかねない問題も含んでいた。

健康管理部の八千穂担当だった佐々木（現姓・菊池）徳子保健婦は、たまりかねて指導員会長の高見沢さんにこう手紙を書く。

「善し悪しは別として、八千穂村健康管理が始まって以来の厳しい状況にあると思います。村がこれまでやって来たことをどう評価するかによつては、三十年の歴史はある意味でひっくり返ってしまうかもしれません。（中略）

個々の感情のすれちがいの問題もあるけれど、大局に立って、八千穂村全体の歴史と今後を考えたととき、今やらなければならぬことは何かをお互いに考えなければいけないと思います。指導員さんたちも、冷静にもう一度原点に返って、これまで何のためにやってきたのかを振り返ってみる必要があるかもしれません」と。

これには、病院の担当者もみな同じ思いであつたろう。

指導員が小冊子をつくる

ともあれ四年の任期が終わって、十三名中十名の指導員がこれで交代することになった。そこで指導員たちは、四年間の活動記録と感想をまとめた『激動の四年間』という小冊子を作成した。

これには、指導員だけでなく、役場、佐久病院の担当者の手記も同時に掲載されているが、自主的にこのような手記集がまとめられたのは衛生指導員会では初めてで、それだけ任期中に出来事が多かったのだといえよう。

その中で、高見沢さんはこれからの指導員活動として、次のように述べている。

「やはり、基本は住民の意思を大事にし、住民の意見をどんどん把握して進めていかなければならないのではないだろうか。それには私たち指導員が各担当地区で、住民の要望によって定期的に会合を持ったり、学習会を開いたりして、住民の本当の、末端からの意見を聞いて、行政や医療機関へ上げていって、いい意味での住民主体の健康管理活動をしていかなければならないのではないか」と。

また井出正さんは、「現在進められている健康管理事業は、まだ住民の主體的な取り組みになっていない。毎日放送されている有線放送を聞き流していたり、配布されているチラシを読んでいる人も多いのではないか。行政、病院まかせに進んでいるのが今の実態であると思う。そうであるならば、地域内での指導員の活動が重要なポイントになってくる」と反省している。その他、各指導員たちの日常活動を通しての八千穂村への切々たる思いが、この小冊子に見事にまとめられている。

ちやつかり、巡回芸者」に

だが、苦しく、つらかった日常の取り組みも、後になってみれば楽しい思い出だけが心に残るものだ。この小冊子には、四年間の良き思い出も数多く語られている。指導員としていちばん楽しかったのは、やはり演劇への取り組みと研修旅行であったという。

杉本末吉さんは、この期間中「健康まつり」の演劇には三回出演し、その深い演技はいつも好評だったが、とても良い思い出になったという。また研修旅行については、「岩手県沢内村への研修旅行に参加して、先人たちの苦勞を知ったり、岐阜県上矢作病院かみやばを訪れてその活動を学んだことはとても勉強になった。また毎年の忘年会、新年会、夏のビール大会も楽しい行事だった。四年間を振り返ってみると、苦勞より楽しみが多くあった」と述べている。

研修旅行にいちばん心をくだき熱心だったのは、実はかつて「指導員をなくす」と言った役場の衛生係だった。観光だけでなく、もっと研修をやらなければいけないと、バス代を村で負担するよう予算をとってくれた。これはとても有難かったと高見沢さんは言う。それまではすべて自己負担だったのである。

研修旅行には、役場や病院の担当者もいっしょに参加し、夜は大いに飲みあった。これが、お互いの感情のもつれの修復にも役立ったのはいうまでもない。

衛生指導員会ではよく酒を飲んだ。酒は活動の源泉であった。当時、村保健婦の竹内敦子さ

んは、「最初はなぜこんなに佐久の男たちはお酒を飲むのだろうと思いましたか、恐ろしいことなんだん自分も染まってきた、いまや宴会がなければ何か物足りないような気さえます」と語っている。

またかつては酒の付き合いはいつも憂鬱のほうだったという病院八千穂担当の征矢野(旧姓・小須田)文恵保健婦は、「おかげ様で、何かがあった後は決まって酒が出てくる佐久病院氣質にすっかり染められ、今や片手におちょうし、片手にマイクのちゃっかり巡回芸者(?)になりすましています。人々とかかわりの中で、自分はいろいろな面で成長させられてきているんだなあと改めて感じています」と記している。

一方では、得ることも大きなものがあつた四年間だったともいえよう。苦しくも楽しかった四年間がこうして終わった。

激動の嵐は健康管理部にも

「うどん会」廃止の提案

「激動の四年間」は衛生指導員だけに限らなかった。ちょうど同じ頃、健診を担当していた

佐久病院健康管理部にも、激動の嵐が吹き荒れたのである。といっても衛生指導員のそれとは直接の関係はない。健康管理部の激動の嵐は、「うどん会」が発端だった。

当時、八千穂村の年に一回の健康診断は、二十三もある各区を回って行われていた。当時は勤め人も多くなっていたので、その人たちの受診の便宜をはかるために、受け付けは午後六時ごろまで延長していた。従って健診が終わるのは大体午後七時ごろになる。

その後で、衛生指導員や区の役員、婦人会、役場の担当者、病院の健診スタッフなどが、健診の反省会をかねて、いっしょにうどんを食べ、一杯やりながら交流会を持っていた。これが健診後の「うどん会」である。そこは時として村民の「本音」が出る場でもあった。それだけに話はずみ、つい遅くなることも多かった。

事の起りはこうである。

昭和六十一年の十一月に開かれた佐久病院と八千穂村との健康管理に関する合同会議で、病院保健婦が、恒例になっていた「うどん会」をやるのは止めたらどうかと提案したのである。その理由は、「うどんをつくるために、区の婦人会の人たちは、その準備や後片付けも含めて、夜遅くまで大変ご苦労している。その負担をできるだけ減らしたい」というものであった。

そのときはあまり議論はなかったのだが、衛生指導員たちも区の役員も、区の負担がそれほど大きいとは思っていなかった。

後で高見沢さんが、こう述べている。「それほど大変ということもなかったね。まあ年中行事のようなもので、それぞれの役が回ってくれば、今日はお手伝いに行く日だということで、交代でやっていたから。それに費用は村から出ていたし。大事なものは、病院の先生方や健診班の人といっしょに話し合えることだね。婦人会の人も、ふだん疑問に思っている病気のことで、いろいろ聞くチャンスだものね」と。区にとっては、健診後のうどん会は楽しみにしていた面もあったのだ。

若月院長大いに怒る

若月院長（当時）は、合同会議でじつとそのことを聞いていたが、その場では黙っていた。村長以下、村の人も多数出席していたので遠慮していたふしもある。しかし、数日後、足取りも荒々しく、健康管理部へ現れた。

室内をさっと一瞥したのち、奥のコナーのテーブルに陣取るや否や、「幹部たちはここへ集まれ」と呼び寄せた。松島部長、元木課長、横山保健婦長（いずれも当時）が三人並んでその前に坐る。当時主任だった飯島郁夫さんは、どうしたらよいかとモジモジしていると、「君もそこへ坐れ」と一緒に坐らされた。

そして開口一番、「何だ、この間の提案は！　これで健康管理部もダメになった。運動精神

がなくなった。君たちはとうとう健診屋になりさがったか」と大声でどなりつけた。同じ部屋にいた他のスタッフも一瞬びっくりして顔を上げる。若月院長は、保健婦の提案の本音が婦人会のことよりも、「うどん会」をやると保健婦自身夜遅くなってとてもつらいからだということとを、すでに見抜いていたのだった。

たしかに、地区にとっては年に一度のことかもしれないが、病院や役場の保健婦は健診の三カ月の間、毎晩夜遅くまで出なければいけないということはある。だが「うどん会」は、住民といういろいろ話し合えるまたとないチャンスだ。それを切り捨てるなどというのは、運動精神はどこへ行ったのかというのである。

次第に巡回健診に慣れてきた職員には、できるだけ「合理的に」仕事を済ませて、面倒なことを起こさないで過ごそうという風潮も一部生まれていた。健診が終わればできるだけ早く帰りたいと考えている職員もないではなかった。その官僚化を若月院長は叱ったのであった。

「お前たちの目は死んでいる」

若月院長の健康管理部に対する批判は、その日だけにとどまらなかった。あらゆる機会を通じて行われていった。

ある日の監査の講評の席で、病院幹部が四、五十人集まっている面前で、たまたまそこに出

ていた飯島郁夫さんは若月院長から一喝された。「君たち健康管理部はなんだ。すっかり官僚化して健診屋になってしまったじゃないか」。出席者も監事もびくつきりして若月院長の方を見る。「そんなことで健康管理が出来ると思うか」と、若月院長の叱責は止まることを知らない。監査の講評が終わってからもお、それは続いた。漸く終わったのは夜十一時を過ぎていた。そういうこともあって健康管理部では、六十二年から毎年若月院長に年のはじめに、健康管理の取り組みについて講話をしてもらうことを決めたのだが、その席でも毎年、健康管理部に対する批判は続いた。

平成四年の途中で健康管理部に入り、平成五年の年頭挨拶に初めて出た井出真一さんは、若月院長がその集まりで、まず最初に「お前たちの目は死んでいる。やる気があるのか!」と言われたので、度肝を抜かれたという。若月院長の批判は少なくとも数年は続いたのであった。

しかし「うどん会」は実際はやめることはなかった。それは、人間ドックと集団健診受診が一年おきとなり、健診会場が各区の公民館から、村福祉センターに移行して行われるようになった平成八年までは続いたのである。

VII

セミナーと地区ブロック活動



住民への「健康アンケート」に取りくむ衛生指導員たち

指導員たちとセミナーをつくる

皆が出れる学習の場が欲しい

前にも述べたように、四年間の任期を終えて、平成元年から衛生指導員十三人のうち十人が交代した。高見沢佳秀さんはもう一期続けることにしたが、会長は指導員三期目の渡辺憲太郎さんがやることになった。

渡辺さんは、前記の小冊子の中で、「衛生指導員の大事な仕事は村民との対話と教育だと思う。それには、保健・衛生・医療面での学習会も月に一回は持たないと無理である」と、学習会の大切さを訴えている。

衛生指導員会は、従来から佐久病院の協力を得て、月一回の学習会をやっていたのだが、激動の四年間の中でその開催も滞りがちになっていた。指導員OBからも、指導員を辞めていちばんさびしいことは、学習会に出られなくなることだ、何とかOBも含めて皆が出れるような学習の場が欲しいという声も出ていた。

それより少し前、昭和六十二年に小諸厚生総合病院で行われた保健担当者の意見交換会に出た健康管理部課長代理（当時）の飯島郁夫さんは、思わぬ話を聞いて目が覚める思いがした。

小諸厚生病院では、健康管理課長（当時）だった依田発夫さんらが中心となり、すでに昭和五十八年から「実践保健大学」という講座を始めており、その卒業生たちが町村単位で、デイサービス施設をつくる住民運動の中心となって活動していることを知ったのだった。

興奮した飯島さんは病院に飛んで帰り、保健婦の小林栄子さんや中沢あけみさんたち、職場の何人かに呼びかけた。「俺たちもやろう。住民参加の健康管理を実現するには、まず住民のリーダーづくりからやればいいんじゃないか。よくよく考えてみれば、佐久病院には八千穂村の衛生指導員という立派なモデルをつくった歴史がある。それを佐久地域に広げようではないか」と。

指導員が中心となって

実は地域の保健活動家を養成するための保健大学を初めてつくったのは、群馬県の利根医療生協の「生協保健大学」であった。こちらは昭和四十九年から開かれており、多くの卒業生が活動している。

後になって、利根医療生協の木村朝次郎専務さんから、「モデルは八千穂村の衛生指導員にあったのですよ」と言われて飯島さんは驚いた。「やっぱり八千穂村が原点だったんだ」と。

早速、健康管理部の主任者会議で、飯島さんはこのことを提案した。みな一も二もなく賛成であった。ただ上手くいくかどうか分からないのに、名前だけ「大学」とつけてもどうなの

かという意見もあって、当面は「地域保健セミナー」ということで始めようということになった。

飯島さんは、指導員の高見沢さんにこの話を持ちかけた。この実施には衛生指導員が中心となつて活躍してほしいと考えていたからである。

高見沢さんも「指導員会で月一回行っている学習会を、佐久地域の人たちといっしょにやつて、いろいろな意見を聞いてみたい」と大賛成であった。そして衛生指導員たちやそのＯＢの中に賛同者を拡げていった。

早速カリキュラムづくりが始まる。小林栄子保健婦は、休みの日を利用してひそかに東京通いを始めた。関係しそうな講座を探し、自費で片端から受講していった。

小林さんはこう述懐する。「保健婦仲間で、いろいろ向上したいと議論が多い中で、何をやっていいか分からないモヤモヤした気分を持っていて、苦しい時だった。このセミナーの取組みは、自分にとつても救いになった」と。

カリキュラムづくりといつても暗中模索である。担当者を決め、農村保健研修センターへ泊まり込みで案を練った。単なる医学講座ではなく、リーダーとして地域で活動するための理念と実践方法も取り入れた。また一方的な講義ではなく、グループワーク、実習をできるだけ取り入れ、また演劇上演は必ず入れることを決めた。

漸くカリキュラム案ができ、飯島さんは勇んで、企画案を持って若月院長に病院として実施の許可を願うに行った。

ところが若月院長から、「今の君たちにそんなことができるのかね」と一喝されてしまった。自ら健診屋と批判した健康管理部の若造たちが考えたことを、若月院長はまだ信用していなかったのだ。

思わず全身がふるえた

困った飯島さんは、高見沢さんに訳を話す。ちょうど八千穂村と佐久病院の合同会議が開かれていて高見沢さんも出席していた。高見沢さんはセミナーに期待を持っていたので、「よし、住民の立場から話してみよう」と、休憩時に若月院長をつかまえ話かけた。

「俺たちも佐久の他の地区の人たちと、指導員会でやっているような学習をいっしょにやってみたい。いろいろな人の意見を聞いて交流してみたい。とくに他の町村でどんな取り組みをやっているか知りたい」と訴えた。

若月院長は黙って耳を傾けていたが、「みなさんが勉強したいという気持ちはとても大切だね」と答えた。そのとき、若月院長の目がキラリと光ったのを高見沢さんは見逃さなかった。まるで自分の心を見透かされているようで、とても恐ろしかったと回想している。

セミナーはすぐには実現しなかった。スタッフもさらに内容の検討を重ねた。

村の「健康まつり」に、健康管理部の担当者や衛生指導員たちが熱心に取り組んでいる様を見て、これなら大丈夫だろうと若月院長は判断したのであろう。一年経って漸く許可が出た。最終的に若月院長の「よし！ やろう」の一言があったとき、飯島さんは思わず全身がふるえたという。

地域活動の推進役はセミナー同窓会

「劇は俺たちがやるぜ」

時期が少し遅れたが、平成二年二月十日に第一期の佐久地域保健セミナーが開講した。

このセミナーには十回の講座が組まれていて、一カ月に二回の割りで進められるが、受けやすいように土曜日の午後の時間帯が当てられている。定員は三十人のところ、第一期には三十九人も応募があった。

衛生指導員会では、毎年数人が交代で参加することを決めていたので、今回は現役から会長の渡辺憲太郎さんを先頭に、高見沢佳秀、岩崎正孝、杉本末吉のみなさんとOB会会長の井出

佐千雄さんの五人が参加した。

参加者の大半はJ A女性部と町村の保健補導員の現役、または役を終えた人たちだった。

保健補導員は任期は二年だが、それで交代してしまうのは、町村の保健婦にとっても残念だし、補導員さん自身も寂しいという声があり、なんとか勉強を続けたいということで多く応募があったようである。この点では衛生指導員も同じ思いであった。

このカリキュラムの特徴の一つは演劇の上演があることである。しかも開講第一日に組まれている。

当初は都合で、衛生指導員が健康まつりで上演した『看る』をビデオで見る予定だったが、「それじゃ、おもしろくねえな。俺たちが上演しよう」と、指導員たちが劇の上演を買って出た。

もちろん受講生の五人だけでは出来ない。今回は受講しなかった他の指導員も全員応援に駆けつけた。舞台装置をつくるのはお手のもの。指導員の熱演は、初めての受講生には大きなショックと感動を与えたようだった。

女性の受講者からは、「高齢化が進む現代社会の様相を目の当たりに見る思いで、じっと涙の伝わる頬を押さえながら見入った」とか「どこにもあり得る話で、わが家も全く同じく泣かされたことを思い出し、涙がポロポロでした」とかの感想が寄せられた。

この劇は、毎回のカリキュラムに入っていて、第二期のセミナーには、第一期の卒業生が上

演することになった。そして第三期には第二期の卒業生が上演するというふうに、順に受け継がれていった。現在では、セミナー同窓会の演劇班が上演している。受講生同士のすばらしいつながりであった。

卒業後は同窓会を結成

セミナーは、大成功であった。劇をはじめ、各講座における衛生指導員の言動はみんなの注目を浴びた。ある婦人の受講者からは、「八千穂村の衛生指導員のみなさんの活動の一部を聞かせていただき、地域に根ざして積極的に取り組んでおられる姿に感心した」との声が寄せられた。

またJ Aのある生活担当者は、「住む場所、組織等、いろいろな違いはあろうとも、問題意識を同じくする人同士が手をつなぎ合うことができたことは、何物にも勝る。これからの地域づくりの力になり得るのではないだろうか」と述べている。

最後の旅立ち交流会の席で、受講生はこのまま別れるのは惜しい、何か集まりを持ちたいという雰囲気になっていた。そのとき、佐久市の坂口光邦さん（元教員）が立ち上がり、「同窓会をつくろうじゃないか。会長には八千穂村の高見沢さん」という提案をされた。

もちろん満場一致でこの提案は承認され、第一期生の同窓会が発足した。第二期、第三期と

卒業生が増えるにつれて、これはやがて、全体の「セミナー同窓会」として発展することになる。

平成三年六月、第一期卒業生の補講が行われたとき、高見沢会長はじめ参加者の提案により、同窓会に食と環境班、高齢化社会班、演劇班、機関紙班の四つの班が結成され、地域での「班活動」が始まることになった。

種をまく人になろう

指導員の岩崎正孝さんは、食と環境班の班長になったが、地区を廻っての料理講習会の他に、毎年六月には千曲川環境ウォッチングをやることを決めた。

岩崎さんはこう語る。「川上村川端^{かわはけ}下の水はきれいで冷たかったねえ。それに比べると、白田の水は汚かった。川がドロドロしていて、とてもこの中に手が突っ込めるかという感じだった」と。現在では、子どもたちもいっしょに参加している。

演劇班の班長になった指導員の青木秀夫さんは、第二期の受講生である。地区の要請であちこち劇を上演して歩いた。佐久地区だけでなく、隣の山梨県のある町からも頼まれて三百人を前に上演したこともあるが、いちばん印象に残っているのは、八千穂村の二十世帯しかない「うその口」区で劇をやったときだという。

小さな公民館で、ほんとに膝つきあわせての上演だったが、みんな涙を流して夢中で観てくれた。「若月先生が劇を始めたときは、おそらくこんなふうだったんだなあ」と思ったら、胸が一杯になったという。

そのほかに第三期生卒業直前に、市町村単位での「支部活動」も始まった。同じ地区同士の取り組みだが、これには各町村の保健婦さんたちも積極的に支援してくれた。八千穂村の支部長には指導員OBの井出左千雄さんが推された。

かくして同窓会の主な活動は三つになった。一つは会全体としての取り組み、二つは共通の関心を持った人たちでつくられた班活動（後に音楽班が加わる）、三つは市町村単位での支部活動である。その共通のスローガンは「種をまく人になろう」である。

この同窓会活動は次第に佐久地域に根づきつつあるが、そのルーツは、あり方や生い立ちも含めて、間違いなく八千穂村衛生指導員にあったのである。二十二年度末には、同窓会員は合わせて三八九人（うち男性四十七人）になった。

（この地域保健セミナーは、これと平行して行われてきた「お年寄りのケアセミナー」と平成十五年に統合し、あらたに「佐久地域保健福祉大学」が発足した）。

女性推進員とともに手を組んで

地区ブロック会をつくる

衛生指導員たちは、ときには各市町村の保健補導員や保健推進員たちの集まりに出席することもあり、ともに学び、ともに討論してきて、女性たちといっしょに保健活動をすすめることの必要性を感じていた。

だが八千穂村の健康管理はというと、健診の受診勧誘とか希望者の取りまとめなど、実際的な仕事はすべて女性の健康づくり推進員の手に移っていて、指導員の活動は宙に浮いてしまっている。

一方、新しい指導員規約の中では、衛生指導員は健康管理の中でリーダーシップをとることと書かれてある。どうリーダーシップをとったらよいのかが課題だった。

昭和六十三年に新しく衛生係になった須田秀俊さんも、そのことで悩んでいた。

役場の中では、同じ仕事をする組織が二つもあっては無駄だから、一本化してはどうかという意見も多くある。何とかして地域の中で衛生指導員がリーダーシップを発揮できる場をつくらなければいけない。それには衛生指導員を「親方」にすることだ、すなわち責任を持ってやっ

てもらう場をつくることだと須田さんは考えた。そこで出来たのが「地区ブロック会」である。まず十四人の衛生指導員の担当地区を中心に、全村を十四のブロックに分ける。それにブロックから出ている四十二名の女性の推進員をそれぞれ二、五名づつ割り当てる。各ブロックの指導員をリーダーにして、地区ごとに活動するというものである。

衛生指導員は演劇活動はさかんにやっていて、これも大きな地域活動の場であった。だが、積極的に参加している人たちはよいが、そうでない人は自分の活動の場がない。演劇の主役からはずれた人は、いつのまにか地域活動からも遠のいてしまう。今度は一人ひとりを主役にするというのである。

一方、女性の健康づくり推進員も、ただ役場の下請け仕事だけでは面白くない。仕事量はかなり多く、中にはとても出来ないから辞めたいという人も出ている。逆にもっと学習したいという声も大きい。衛生指導員と一緒にやることは願ってもないことだ。「地区ブロック会」は、その二つの組織を上手く組み合わせた地区活動のしくみであった。

自分たちの好きなテーマで

平成元年からブロック会が始まる。ブロックごとにやる活動は、同じ地域なので集まりやすい。その上三人の保健婦が各ブロックを分担して指導や相談に当たった。さらに会議には、役

場の衛生係と病院の健康管理部も参加する。

いちばん喜んだのは女性の推進員だった。経験の深い衛生指導員が、ああだこうだといういろ教えてくれる。受診勧誘のとき、あの家はこういうふうにやったほうが上手くいくよとアドバイスしてくれる。それに合同の学習会や視察研修旅行もある。

松川町の「健康を考える会」の発表会にも、交代で二回も見学した。今までも衛生指導員たちは何回か見学しているが、このグループでは初めてだった。これがブロック会の活動を根本的に変えるきっかけになった。

見学に参加したある指導員は、「今まで衛生指導員として活動していたけど、どうしても役場と病院におんぶに抱っここの面が多かった。松川町を見て、住民のグループが自分たちでテーマを考え、研究し、発表しているのにはびっくりした」と語る。

衛生係の須田さんは、「このやり方だ!」と思った。一年間かけて自分たちの好きなテーマで研究や調査をする。そしてその結果を発表する場をつくる。一年で出来ないことは何年でも継続してやる。このやり方を八千穂村でもやろうと企画したのであった。

必ず新しい発見がある

衛生指導員の中には、「こういう調査や研究などは、すでに医者がやっている。今さら我々

がやることはないではないか」という声もあった。しかし、須田さんは、「自分の目で確かめてみると、必ず新しい発見がある。自分たちが取り組むことが大事なのだ」と説得した。

この新しい取り組みは平成三年度から始められた。そして取り組んだ結果は、必ず毎年の「健康まつり」で発表することにした。

そこで各ブロックごとに衛生指導員、女性の健康づくり推進員、衛生部長さんたちが集まって、まずテーマを検討することから始めた。

「基本的には自分たちの好きなことをやってよい」ということであったが、こんなことは初めてなのでみな慣れていない。いざ選ぶとなるとなかなかテーマが決まらず、どこでも苦労したようだ。

上畑宮前地区ブロックでは、渡辺憲太郎さんを中心に、「昔と今の弁当の移り変わり」というテーマでやることにした。作り手と食べ手のつながりと時代の変化が、弁当の中に映し出されることに気づいたからであった。

弁当箱も各家庭にある古い弁当箱を探してもらい、それぞれに当時の献立をつくってそれに盛って供覧した。三十年昔のアルミの弁当はいつも梅干しを同じ場所に入れるため、その部分が腐食して穴が開いているものが多かった。

おかずの内容をみると、卵焼きと魚は常に使われたが、その他では、昭和三十年代はでんぶ、

煮物、切りイカ、漬物、四十年代になるとウインナーソーセージやとりのから揚げ、エビフライなどの冷凍食品が目立つようになる。五十年代は漬物に代わってレタス、ミニトマトが主になった。

弁当の移り変わりは「おかず」の移り変わりである。たった一つの弁当にも、その時代の食生活の姿が見える。ただ弁当は当時の家庭での食事にくらべて一般に豪華で、親のこまやかな愛情が伺われ、皆思わずホロリとしたという。

さらに進む地区ブロック活動

自分の体の歩みを知る

中央・高岩ブロック会では、指導員の井出高正さんを中心に、女性の健康づくり推進員や区長、衛生部長さんとともに、「健診で見た私の体のあゆみを知る」というテーマで取り組むことにした。

ブロック会でいろいろ話をしていく中で、昭和三十四年に健診が始まってから、三十二年間も毎年欠かさず受診している人が多いということが分かった。そこで皆でお互いの健診結果か

ら見た体の変化を、経年的にグラフにしてみようじゃないかということになったのである。

検査項目では、データの変化が分かりやすい血圧、コレステロール、血色素の変化を取り上げた。また肩こりや腰痛など、体の痛み具合が分かる農夫症候群の項目も取り入れた。総合判定や生活の変化の様子も分かる範囲でグラフ化してみた。

これはなかなか良い着想であった。年を追うごとに次第に検査異常や疾病が増えていくのがグラフでよく分かったし、自分たちの体を見直すよい機会となった。

中には昭和三十五年から欠かさず健診を受けていた九十五歳になる男性で、血圧もコレステロールも血色素も三十二年間殆ど変わらないばかりか、農夫症はむしろ減っていたという例があった。これには皆びっくりしたという。

生ゴミで堆肥づくり

天神町ブロック会では、指導員の岩崎正孝さんが中心になってゴミ収集の問題に取り組んだ。今まではゴミの提出の仕方が一定していません、集められたゴミの山は大変汚かった。村では、ゴミの収集袋を指定の袋にして、燃えるゴミと燃えないゴミとを分けて提出するように呼びかけていたのだが、なかなか徹底しなかった。

それに、他地区の親が、子どもを学校へ送りながらついでにゴミを捨てて行くというものもあ

る。袋も指定の袋ではなく、買い物に使うビニール袋が主だった。「再利用だからいいじゃないか」とうそぶく人もいた。

そこで、きちんと指定の袋に入れて提出するように、手分けして街頭指導を行った。岩崎さんも毎日、現場に足を運んだ。衛生部長さんに熱心な人がいて、熊手を持って行って「それはダメだ」と注意してくれる人もいた。やがて次第にこのやり方は徹底し、全村に普及していった。

さらに岩崎さんは、ブロック活動の一つとして、生ゴミを堆肥として利用する方法に力を注ぐ。

現在の地球は著しく汚染が進んでいる。せめて自分たちの生活の中から出る生ゴミくらいは堆肥化して地球に戻してやりたいというのが、岩崎さんの願いであった。

そこでアンケート調査を試みたら、生ゴミを利用しての堆肥化センターを作ってほしい、コンポスター（生ゴミなどで堆肥をつくる容器）を支給してほしい、講習会をして良い堆肥づくりを教えてほしいなどの意見が多かった。

堆肥化センターについては村では計画がないということで、岩崎さんらは、コンポスターの使い方についての講習会に重点を置き、それによる堆肥の作り方をくわしく説明してまわった。多くの人が集まって受講し、次第にコンポスターの利用者が増えていった。

その他にも様々な調査研究が行われた。「葉草について」「足腰の痛み予防」「歯の健康を保つには」「台所仕事の変化」「高齢者問題に取り組んで」などである。各ブロック会の発表は、毎年の健康まつりの日と決められたが、これがまた健康まつりの内容を高めるのに大いに役立った。

村の靈園に酒を埋めて

変わった研究では、清水町・千ヶ日向ブロック会で、指導員の小林茂松さんと内藤恒人さんが中心に行った実験がある。最初は「体をこわさないお酒の飲み方」というテーマで学習したが、どうもありきたりで面白くない。ちょうどその頃念仏講で、ある古老から、「仏が抱いた酒はとてもうまい」という話を聞いた。

昔は土葬だったから、お酒の好きな人が亡くなると、一緒に酒の一升ビンを埋める。他の人が亡くなったとき近くを掘るのだが、そのビンが出てくる。それを飲んでみると、全然酒の味が変わっていないばかりか、むしろ味がよくてとてもうまいというのであった。

酒好きの二人がこれを見逃すわけではない。早速これを試してみようということになった。

そこで村の靈園を利用して、お酒の一升ビンを埋めることにした。内藤さんは電気工屋さんだから垂直の穴を掘るのはお手のもの。あっという間に機械で深さ一メートルの穴を掘った。

ビンには後で出せるように目印の紐をつけ、温度計とともに埋めた。

温度計は地中の温度を測るためで、毎日ウオーキングをしている女性推進員が週二回計った。一冬をはさんで十カ月間埋めたが、温度は最低マイナス二度、最高十九度だった。これは酒蔵の温度と似ているという。

十カ月経って地中から掘り出し、靈園、台所放置（一度開栓と未開栓）、新酒の四本のビンと並べて利き酒形式でテストをした。その結果、地中に埋めたものが最もまろやかでうまいということになった。

これはアルコール分が少しとんだのではという意見もあったが、村内の酒造会社の成分分析ではアルコール度には変化がなかった。かくして奇妙な実験は終わったが、人間の五感の精度の高さが証明されたと二人は満足げだった。

だが、酒蔵会社の杜氏^{とうし}さんの話では、酒は新酒がいちばんうまいので、時間が経つほどまろくなるということだった。さてどちらが本当なのだろうか。

VIII

八千穂村のよいところ悪いところ



健康相談をする受診者

健康管理に助っ人現れる

青年団の気概を受け継いで

平成三年九月、新しく高橋秀一村長が就任した。就任に当たって村長はこう述べた。

「昭和三十四年に全村健康管理を始めたときは、こんなことをやっている町村はどこにもなかった。当時としては画期的なことだったと思う。永年の健康管理で成果は大いに出ている。私も当然これを引き継いでいくが、マンネリ化にならないよう健診メニューを増やして充実していきたい」と。

その言葉どおり、その後徐々に健診内容は充実していった。実直で使命感にあふれた村長だった。

村長と同級生には、かつて衛生指導員会長を務めた井出佐千雄さんや小宮山則男さんがいる。また助役には、以前に指導員を九年務めたことのある油井理一郎さんが選ばれた。健康管理と衛生指導員活動に、さらに追い風が吹いたことはいうまでもない。

平成五年になって、指導員の四年の任期が来て多くの交代があったが、岩崎正孝さんと井出

高正さんはさらにもう一期続けることとし、それぞれ会長と副会長になった。二人とも熱心に取り組んでいた地区ブロック活動と月一回の学習会には、さらに力が入った。

岩崎会長さんは、昭和四十三年当時、八千穂村青年団の団長をしていたが、そのときに「八千穂夏季大学」を立ち上げた一人である。当時は青年団活動がさかんであったが、このままでは農村青年は取り残される、なんとかしなければという思いから、自分たちの血となり肉となる学問の場をつくろうということで、夏季大学の開催を思い立った。

でもみんな昼間は仕事がある。大学の講座は夜の八時から十時までと設定した。初年度のテーマは「現代におけるヒューマニズム」、務台理作氏の同名の著書がテキストだった。二年目は「人間」をテーマに「現代における人間」と「神と人間」の分科会が持たれた。

難しいテーマだったが、都会の学生に負けるものかとみな真剣だった。講師には東大や慶応大の教授のほか、作家の遠藤周作氏も姿を見せた。

討論形式の講座なので、時には延々夜が白むまで議論が続くほどだった。当時、講師の一人だった野沢北高校の中島二郎教諭は、「高校の教室とは違った真剣さと、若い青年の意気込みがあった」と話している。

衛生指導員も青年団に入っていた人が多く、ここで勉強した人もかなりいる。指導員たちが今も熱心に学習活動が続けているのは、かつての青年団の気概を受けついでいるからなのであ

ろう。

若々しくピチピチして

平成六年になって、衛生指導員にとって画期的なことが起きた。新しく八巻好美保健師さんが着任し、それに新しい衛生係（後に係長）として須田芳明さんが決まったのである。この人事が、ときにはぎくしゃくとしがちであった役場と衛生指導員との関係を大きく変えることにつながった。

八巻さんは当時白田町の保健婦をしていたが、高橋村長と当時の住民課長だった佐々木徳治さんが八千穂村へ引っ張ったのである。「保健婦は若くなくて、更年期の人でいいと言われたので安心して来た」と八巻さんは笑ったが、もう四十歳を過ぎていたけど、更年期どころか、若々しくピチピチしていた。

当時森智子さんという保健婦さんがいて、夜遅くまで頑張ったり、衛生指導員といっしょに劇に出たりして、皆の評判もよかった。七年も務めたが、なにしろ保健婦が二人しかない時期が多く、随分苦労した。八巻さんが来て漸く三人になった。

八巻保健婦さんは明るくて、気さくで、人なつっこい。「衛生指導員というのは半分ボランティアでしょう？　だけど、夜、指導員会をやるよと言えば、すぐ皆が集まってくる。そういうこ

とがすごいことだと思う」と八巻さんは率直に感心する。「お互いに仲よくやろうね」というのが八巻さんの第一声だった。

組織は楽しくなければいけない

八巻さんも須田芳明さんも、衛生指導員の夜の勉強会には必ず出た。指導員といっしょに話したり飲んだりする機会も多くなった。「会議が終わったあと、俺たちとよくつきあってくれた」と指導員たちは今でもよく言う。

「組織というのはまず楽しくなければいけない。そこが一番ポイントだと思うね。どんなに立派な組織をつくっても、楽しくなければ三年とは持たない」というのが、須田さんの持論だった。

さらに須田さんは言う。「行政というのは上からの押し付けだけでは駄目だ。それで一時は住民は動くかも知れないが、長続きはしない。お互いに身近で話ができ、言い合いができなければ、組織は動かないじゃないですか」と。

今までは、衛生係と指導員とは上と下の関係で、仕事でつき合っているという意識が強かった。それが八巻さんと須田さんの二人が来てから、役場の保健衛生担当と住民という仕事の関係の域を超えて、お互いに友だちに近い関係になった。思ったことは何でも気軽に言い合える。

これが衛生指導員活動をいつそう活性化させることになった。

八巻さんは誰とでも気軽に話す。村長室へ入っていった、血圧測定しながら「こんなことじゃだめじゃないの」とずけずけ言える人である。

それに人とのつながりを進めていくのがうまい。人をやる気にさせてくれるような、人を巻き込むのがすぐれているというところが八巻さんにある。「実はそれを八巻さんから学んだのだ」と須田さんは後で述懐する。

二人が来てから村の保健衛生のやり方が変わってきた。

須田さんは控えめに、「ともかく皆は村が好きなんだよ。この村のために皆でやろうじゃないか。ただそれだけなんだよ」と言うのだが。いつの間にか衛生指導員たちも、単に健診業務だけでなく、「いっしょに活気のある八千穂村をつくろう」という考えに変わってきた。

ユニークな茂松・恒人コンビ

同じブロックの同級生

農村では同じ名字の人が多い。とくに山の中へ行くほどそれが多くなる。八千穂村でいえば、

最も多いのが佐々木で、次いで井出、篠原、須田、渡辺、小宮山などの姓が多くを占める。だから呼ぶときは姓で呼ばず、みな名前で呼ぶ。とくに親しい場合は、「さん」までも省く。

衛生指導員の「茂松^{しげまつ}!」「恒人^{つねと}!」と言えば村の人ならすぐ分かる。正しく言うと、小林茂松さん、内藤恒人さんだが、以前に聞いたことのある名前だと言われる方はかなり記憶力がよい。お酒を墓場の土の中へ埋めて実験したという、例の霊園コンビである。

二人とも平成五年に衛生指導員になった。しかも同じ地区ブロックの担当である。このコンビが、後に指導員の会長と副会長をやるようになるのだが、その活躍たるやなかなかユニークだった。二人とも大の酒好きだが、単に酒好きだからということだけじゃない。

茂松さんは、変わった能力の持ち主だ。話好きで唾を飛ばして大声で喋るのだが、話しているうちに皆をいつのまにか友達にしてしまうのである。理屈は全然言わない。それでいてみんなを「じゃあ、やろう!」という気持ちにさせるのがうまい。

また茂松さんは、人の悪口は絶対言わない、うそはつかない、裏表がない、打算がない、言ったことは必ず実行するという人である。どこかの国の政治家に聞かせたいようなことだが、それで皆から好かれた。

頼まれたことは一度もいやとは言わないから、衛生指導員の演劇では、大体主役をやることが多かった。会社の仕事は三交代で夜勤も多く不規則。「今日は練習が終わったら、夜勤に行

かなくちやいけねえ」と言いながら劇に熱心に参加していた。

唯一の欠点は台詞の覚えが悪いことだ。だから演出の高見沢さんにはしょっちゅう怒鳴られて放し。それでもしよげた様子もなく、ハイハイと懸命に演じていた。

ケチヨンケチヨンにやられる会長

指導員会の会長になったときは、皆からケチヨンケチヨンにやられることも多かった。「こんなにケチヨンケチヨンにやられる会長なんて見たことない」と、後に保健衛生係長になった佐々木勝さんは言う。

議論がいろいろ分かれても、無理にまとめようとはしない。だが、最後はいつのまにか自然とまとまってしまうのだ。佐々木係長さんは、「住民組織の中で、上に立つ人っていうのは、こういう人かな」と思ったそうだ。アクが強くなって、押しつけもなくて、皆をその気にさせてくれる人ということなのだろう。

茂松さんは、痴呆の母親の面倒をよく見ていた。母親は茂松さんを自分の夫と違って、オムツを代えるのは、嫁には許さず、茂松さんにしかやらせなかったらしい。

したがって茂松さんは、勤めながら毎日オムツ交換をしていたし、デイサービスへ行くようになってから、毎日その送り迎えもした。勤めながらの介護はとてもつらかったと思うが、その

大変なことをおくびにも出さなかった。

茂松さんの特技は、人の名前と顔はすぐ覚えてしまうことだ。だからいつか交通事故を起こすんではないかと皆が心配している。

というのは、車を運転していて誰か知っている人が道端を歩いているのを見つけると、窓を開けて「オーイ」と声をかけるのである。相手が気付くまで窓から首を出しながら、声かけをやめないものだから、いつかガチャーンとやるのではないかということなのだ。そんな天衣無縫なところが茂松さんにある。

意見は厳しいが発想は豊か

この茂松さんを支えたのが、副会長になった恒人さんである。

茂松さんは大まかで、どちらかというとムードメーカーだが、恒人さんはざつくばらんに思ったことをスパッと言うタイプ。ときには厳しい意見も言うが、発想豊かでブロック会議でもいろいろなアイディアを出してくれる。

「おらどうしていいか分かんねえよ」と茂松さんが時々弱音を洩らすこともあったが、「そりゃ、こうすりゃいい」といつも蔭から助けていたのが恒人さんだった。年は茂松さんのほうが上だが、茂松さんはたえず恒人さんを頼りにしていた。

恒人さんは自営業の電気会社をやっていて忙しかったから、ブロック会議には作業着のまま駆けつけることも多かった。後に社長になったが、演劇のときはいつも裏方で、持ち前の技術を生かして音響係を担当した。CDを借りてきて、BGMをつくるのは得意だった。

全く性格は異なる二人であるが、良いコンビであったといえよう。

このコンビにもう一人、会計担当として吉沢憲一さんが加わり、三人で指導員会の三役を受け持つことになった。憲一さんは若いけど、吉沢電設の社長さんである。茂松・恒人コンビほど目立たないが、社長だけあってしっかりしている。二人と地域ブロックは違うが、学習会活動はマメであった。この三役が中心となって、指導員活動はさらに広がっていった。

これには役場の強力な支援があったことは言うまでもない。課長さんや係長さんもよく手助けしてくれた。住民課長の佐々木徳治さんは親分かたぎで、面倒見がよかった。これはよいと思えば、とことんまでやってくれた。

その後任の飯塚豊課長さんも、指導員活動を随分と支えた。指導員が交代で長野県農村医学会に研究発表するようになると、毎年役場のマイクロバスを仕立ててくれた。

役場と衛生指導員との間には、今までよりもずっと親密な関係が生まれつつあった。これを切り開いたのは、やはり茂松・恒人コンビと会計の吉沢さんだったといえようか。

酒は涙か生きがいか

アル中の例を題材にして

高見沢佳秀さんが、『酒は涙か生きがいか』という劇をつくったのは平成四年のことである。その年の八千穂村敬老会に、衛生指導員OBを中心にした公民館演劇クラブによって初演され、その後、平成六年と十四年に「福祉と健康のつどい」で再演されている。

そもそもこの劇をつくったきっかけというのは、当時衛生係だった須田秀俊さんが、「近くにお酒に浸りきりの人がいて、家族がとても困っている。なんとかアル中の問題を取り上げて、皆の関心を高めてもらえないか」と、プランを持ってきたことによる。

その頃は、劇のテーマとして、お年寄りの在宅介護の問題がかなり続いていたので、高見沢さんも大賛成、早速表題の脚本が出来上がった。

例によって、アル中の父親が毎晩酒浸りで、夜遅く泥酔して帰ってくる。家族が「そんなに飲むと体に悪い」と忠告しても、一向に聞き入れる様子もない。そのうち暴力を振るうようになる。しかし最終的には家族や親戚の人たちの努力で、父親は改心して酒をやめるという筋書きである。

つまりここでは酒の「涙」の部分を描いたのであるが、もちろん高見沢さんは酒の効用もちゃんと心得ている。衛生指導員の小林茂松さんが会長になったとき、高見沢さんから、「何か問題が起きたときは、必ず皆で集まって酒を飲め。そうすれば必ず本音が出てくるから」と言われた。これを茂松さんは忠実に守った。

最近では、月一回の衛生指導員会が終わると、誰言うことなく、「じゃあ、行くか」と皆で飲みに行くのが通例になってきている。もちろん指導員会にいつしよに出ている佐久病院の八千穂担当も同じだ。

酒でコミュニケーション

飯島郁夫さん（元事務長）が健管センターに医事課から移ってきたのは昭和四十九年である。すぐ八千穂担当になって指導員会にも出るようになった。その時、若月院長（当時）から、「多少経費がかかってもよいから、地域活動をしっかりやれよ」と言われた。飯島さんは、これを「地域の人といろいろつき合っていくには酒を飲まなきゃ駄目だよ」と解釈した。

衛生指導員とは面識がなかったので、最初はお互いに顔も分からなかった。指導員会に出ていろいろ話したり酒を飲むうち、次第に心安くなっていった。よく飲んだのは、小宮山則男、今井恭夫、岩崎正孝さんたちである。とくに会長になってからの高見沢さんとは、しきりに飲

むようになった。

月一回の指導員会を含めて月に二、三回、多いときは四、五回もいっしょに飲んだ。そこで話の主題となるのは、いつも衛生指導員のあり方のことである。「指導員の活動はどうあったらよいのか」「指導員会をまとめていくにはどうすればよいのか」など、誰もが悩んでいたことだった。

二人は、八千穂村の飲み屋は全部歩きつくし、さらに佐久町、白田町へも足を延ばした。何回も飲み屋へ通ううち、飯島さんは、飲み屋にいる猫の顔は全部覚えてしまったという。

その中で、「衛生指導員は、住民代表として各担当地区で会合や学習会を開き、住民の健康意識を高めると同時に、そこで出た意見を役場や病院へつなげ、住民主体の健康管理をつくりあげること」という、高見沢イズムが出来上がっていた。

病院の八千穂担当と衛生指導員たちとが、あまりにも親しく何回も飲んだりするので、役場からは、「ありゃ、病院の衛生指導員だ。役場のもんじゃないぞ」というやつかみの声も聞かれた。

しかし、それも須田芳明さんが保健衛生係長になり、続いて佐々木勝さんが後を継ぐことになって、次第に消えていった。これには二人の積極的な取り組みもあったが、もう一つは酒の力があった。二人とも指導員会の後の飲み会には必ず出るようにしたのである。これで指導員

とのコミュニケーションがよくとれるようになった。

「看護師はみな豪傑だね」

実のところ佐々木係長さんは最初は戸惑っていた。佐々木さんは十五年前に設計士として役場へ入った人である。建設畑をずっと歩いてきて、十年目になって急に移動となり、保健衛生係長を命ぜられた。保健衛生といっても経験がないし、よく分からない。役場というところは課が違ふとやっていることがよく見えないのだ。おそろおそろ課長に聞いたたら、「衛生指導員といっしょにやるところだ」と言われて一瞬跳び上がった。

衛生指導員と役場とはかつていざこざがあったことがある。うまく衛生指導員をまとめていかねば、これは大変なことになる。「これはえらい所へ来た」と思った。

だが、指導員会の飲み会に毎回に出るようになって、お互いに打ち解けて話が出来るようになった。いろいろ話を聞くのも、これは勉強だという気持ちだった。

小林茂松さんは、「酒を飲まない奴とは本音で話が出来ねえ」とはつきり言う。幸いなことに二人とも酒好きだった。「須田芳明さんや佐々木勝さんが飲みに来てくれて、本音で話し合えるようになったのは嬉しい」と、内藤恒人さんをはじめ指導員たちは皆口を揃えて言う。今では衛生指導員の信頼が最も厚いこの二人である。

佐久病院の八千穂担当も積極的に付き合った。「やはり、佐久病院の力って大きいね」と佐々木さんが感に堪えたように言う。この中には酒の力も入っているらしい。

衛生指導員の篠原始さんもこう言う。「佐久病院の看護師はみな豪傑だね、酒を飲んでも凄い」と。まさか全部が豪傑とはいえないだろうが、サケ病院の名だけは汚してはいないようだ。

八千穂村の良いところ悪いところ

グループワーク方式で

八千穂村と佐久病院で、年に一回健康管理合同会議が行われる。両者合わせて約百人近い出席がある。

「タラの芽会」が両者の親睦の会だとすれば、こちらは健康管理の一年を振り返って、新たな取り組みを論議する大事な会議だ。といっても、後で必ず懇親会があつて、一杯飲む。中には会議よりこちらが楽しみだという人も何人かいるが。

ところで、七、八年ほど前、岩崎正孝さんが指導員会長のときに、「ただ話を聞くだけの会議じゃ面白くねえな。なんとか皆が喋れるよいやり方はないか」という意見が出た。

たしかに数人の人が若干意見を述べるだけで、大体説明を聞くだけに終わってしまうことも多い。たしかに、これだけ大勢いると、発言しようとしてもちょっと気後れする。

それに衛生指導員は多少慣れているけれども、女性の健康づくり推進員さんが発言するときには、メモを見ながら、しかも手が震えていて、大変な思いで伝えているという様子が伺えた。もっと気楽に、誰でも一言ぐらいは喋れるようにしようではないかと相談した結果、グループワーク方式でやろうということになった。

これは、出席者が七、八人ずつ十ぐらいのグループに分かれて、同じテーマで皆が発言し、意見を交わすのである。

村との事務局会や指導員会で打ち合わせをくり返し、指導員が進行役、役場と病院のスタッフが支援、各グループにはテーマにあった助言者を依頼することなどが決まった。

グループの討議が終わった後、そのまとめを全体会議で発表するのだが、グループごとに意見がいろいろなのが面白い。これには進行役の能力が要求されるが、その点、衛生指導員は抜群だった。

人情が厚く気持ちがやさしい

新しい方式になって、皆の表情が生き生きしてきた。楽しみながら大勢の人が気軽に発言で

きるようになり、会場の雰囲気はずっと和らいだ。それに知らない人同士のコミュニケーションもよくなり、職種や所属にこだわらない仲間づくりができてきた。

年々討議の進め方や発表の仕方もうまくなり、指導員のリーダーシップも向上した。ここが住民参加の一つの場になったといえよう。

平成十五年度の合同会議では、「八千穂村の良いところ、悪いところ」について、グループ討議も含め皆で話し合った。

衛生指導員の篠原さんは、「八千穂村に住んで良いと思うところは、自然のまま緑が多く、水と空気が良く四季がはっきりしていること、人情が厚く、気持が優しく人がよいこと、乳幼児、高齢者に対しての健診の充実、未就学児の医療費の無料、子育て支援にきめ細やかなところ」と八千穂村の良い点を述べた。

その他、出席者からは、「保健や福祉がきめ細かくて暮らしやすい村」「声かけをすると、皆がついてきてくれる村」「保健師と住民が隔てなく方言丸出しで話し、友だちのような村」などの発言があった。

一方、八千穂村の健康管理を指導していただいている専門家たちからは、厳しい意見が続いた。

佐久保健所保健師の堀田みさこさんからは、「昭和四十三年にはまだ他ではやっていない学

童の貧血検査を始めているし、五十三年には中学生のコレステロールの検査を取り入れ、大人だけでなく、これから育っていく子どもたちのことを忘れていなかったのはすごいが、最近はその子どものコレステロール値が増えてきている。いまは食べるものがいっぱいあって、子どもの食事が親の手を離れてしまった。食を通して健全な子どもを育てることに、もう少し目をむけてほしい」との発言があった。

子どもの虫歯が多いのは問題

また在宅歯科衛生士の宮島典子さんは、「住民健診では内科健診のあと、皆当たり前のように歯科健診を受け、歯科指導のコナーに立ち寄っていくという意識の高さには驚いたが、しかし三歳児健診でみると、六十五%の子どもに虫歯があり、長野県平均よりはかなり悪い。子どもの生活がある程度の年齢になると、親の目が届かない所にきている。口が健康だということとは、自分自身の健康にとって、とても大事なことなんだということを住民の皆さんに分かってほしい」と要望した。

地域の中で、理学療法士として活躍されている中村崇さんからは、「八千穂村はこの界限ではいち早く、ヘルスアップ教室という形で転倒予防を始めた。それは良かったのだが、問題は転びそうな人が来ない。転ばない人だけが来る。バスを出しても誰も乗らない。東京だと一カ

月五万とか十万とか出してもやってくる。健康に対して過保護になっているのでは。また引きこもりの原因は腰や膝の痛みにあるので、痛みをとる作戦にぜひ取り組んでほしい」と述べた。いずれも耳に痛い発言であった。

最後に佐久総合病院の西垣良夫健康管理部長から、「私たちは村といっしょに健康管理の仕事をやっているので、客観的になかなか見られないが、全国の八千穂村健康管理に対する評価はものすごい。やはり全国のみなさんがしっかり見ている。衛生指導員が女性の健康づくり推進員と連携をとりながら、リーダーシップをとってやって来た歴史はたいへんなものだ。今後問題については、まだ高血圧や塩分摂取量も多いし、肥満や子供の虫歯の問題もあるので、さらに村といっしょに取り組んでいきたい」と締めくくった。

健康管理合同会議は、衛生指導員を中心に、八千穂村住民と村役場と病院とが率直に意見を述べ合う場として、すっかり定着してきている。

みんなで育てる八千穂の子

「やちの子教室」が大人気

子どもの健康問題については、平成十三、十四年の合同会議でも十分討議されたのだが、これからの八千穂村健康管理の大きいテーマの一つである。

新しく指導員OB会長に推薦された高見沢佳秀さんは、「子どもの健康意識も高めていかなくてはならないが、それには若い母親を教育しなければダメだよ」と言う。

OB副会長の今井恭夫さんも「子どもの問題には親に責任がある」と言っただけのように述べた。

「若い母親でなかなか地域にとけ込めず、自分の殻に閉じこもってしまう人がいる。子どもが遊びに行くといえば、大体外ではなくて中で遊ぶが、三人寄れば、みな違った遊びをする。一人はパソコン、一人はゲーム、一人はマンガというふうな。つまり同じ遊びができないんだね。これは親の行動とも関係がある」と。

昔と違って、今は女性の人たちが集まって何かやるということがなくなった。だから若い女性も育児の知識がない。

「今の嫁さんたちは子どもをつくることを知っていても育てることは知らないね。いろいろな機会を設けてやらないと自信が出てこない」と今井さん。

八千穂村では、今「やちの子教室」というのを教育委員会が主催で開いている。保育園に行く前の子ども、つまり三歳未満の子を持つているお母さんたちが、月に一度集まって、お互いの悩みを話したり、保健師さんの話を聞いたりしている。

歯科検診もある。ときにはボランティアも出てくれて、紙芝居をしたり、七夕の行事をしたり、夏には水遊びをしたり、結構楽しいらしい。時間がきてもなかなか皆帰らない。八巻保健師さんたちが熱心に指導している。

教育費の増加が負担に

「あれはとてもいいよ。一回行ったら楽しいから毎月行く。若妻の教育になっているね」と指導員副会長の内藤恒人さんは大いに評価。だが、「そこに集まった人たちも、子どもの年齢が過ぎるとまたバラバラになってしまう。本当は地区でまた続いていくといいのだが」という意見も。

村では、そのほか、住民課主催で、一歳未満の子どもと母親を集めて、「子育てランド」というのを毎月開いている。村では結構若妻と子どもの健康教育には力を入れているのだが。

「子どもに虫歯が多いというが、お年寄りがいるとアメとムチではなくて、アメだけになっちゃうからね」と内藤さん。OB副会長の佐藤義隆さんは、「いや、それができるだけでも子どものためにはいいんだよ。今は核家族になって育て方も知らない父親や母親が増えたからね。親を教育したらどうかというのはそれにつながっている」と。

共働きが増えたのも、子どもをみるのが疎かになった一因でもあろう。父親の夜勤が増えたなど、仕事そのものが不規則になってきている。これは八千穂村だけのことではないが。

その理由の一つに教育費の増加がある。今の一般的な家庭の教育費は収入の三割だそうだ。これは年間収入六百万円の家庭でのことだが、それより収入の少ない人は四割、五割になる。佐藤さんは、「夫婦共働きじゃなければ、とても学校へ出せない」と言うし、高見沢さんも「一人の働きで子どもを大きくするなんて無理だよ」と言う。

競争社会、カネ中心社会の歪みが大きく家庭にのしかかっているのだ。

親子セミナーを開いては

「健康管理を本当に進めていくには、子どもでなくて親だよな」と高見沢さん。「衛生指導員がどのようにして親の意識を高めていくかが問題だ。各地区で若いお母さんや父親を集めて、いろいろな問題をクローズアップしていけば、皆関心を示してくれると思うんだけどな」と。

「八千穂村では大人も子ども同じ検査内容で健診をやっているから、いっしょに生活指導をやったらどうか」と佐久病院の小林保健師が提案する。

「臼田町ではプログラムを開発して、親子の検診結果が同時に同じ報告書の面に出るようにしている。この家は全体に甘いものが多いとか、子どもは良いけれどお父さんの食生活はだらめだねとか、見比べができるようになってる。ただ同じ家族でもプライバシーがあるから、そういうのは嫌いだという家族には出してはいけど」と。

「そりゃ良いアイディアだ。親と子の会話ができるね」と内藤さんがたちまち賛成。「だけど、お父さんは異常が多いけどどうしたの、と文句を言われそうだな」とも。

佐藤さんからは、「衛生指導員会で、健康についての親子セミナーを企画したらどうか。皆に問いかければかなり集まってもらえるのでは。もちろん行政からもバックアップしてもらって」と提案があった。これには皆大賛成。

他にPTAの人たちと合同で学習会をしたらどうかという意見も出た。

「それには現役の指導員だけでは力が足りないから、ぜひOB会の人たちの力も借りたいね」と現指導員会長の吉沢憲一さんが言う。「OBは八十人いるし、経験が豊富だから」と。高見沢さんも、「まずOB会のみなさんに村の現状をよく分かってもらって、皆で協力できる点はやっていこう」と前向きな発言。

「なにしろOB会は八千穂の宝だもんね」と小林保健師が持ち上げる。「そうなんだよ、栄子さん、いや保健師長さま」とちよっとおどけてみせた内藤さん、「結局はおれたちがOB会を利用すればいいんだよ」と。「そうだよ。そういうことだよ」と皆が同調したところで話は終わった。

OB会の今後の活動に大いに期待しよう。

エピソード・主役は住民

親子二代の佐々木村長

ところで、平成十五年九月、三期十二年にわたって務められた高橋秀一村長さんに代わって、新しく佐々木定男村長さんが誕生した。佐々木村長さんは、健康管理の初期に村長をやられた佐々木庫三さんのご子息。親子二代にわたる村長さんとは珍しい。

佐々木村長さんは、就任にあたって、「健康で長生きするために佐久病院とともに歩んできた村ぐるみの健康管理には、長い歴史と村民の熱い思いがある。衛生指導員を中心に、健康づくり推進員、住民のみなさんといっしょに、さらにこれを進めていく。そのために、これらの組織はずっと堅持していきたい」と述べた。

ご父君と似て、もの静かな語り口だが、その奥底には、固い信念と決意が伺えた。八千穂村の健康管理はゆるぎなく、さらに続けることが決まった。

劇に出て人生観が変わった

衛生指導員たちは、相変わらず劇の練習に余念がない。恒例になっている「健康と福祉のつ

どい」(従来の「健康まつり」が、最近是这样名前が変わっている)での劇の上演が、十月十九日に迫っているからだ。

今回の劇は、『痴呆と家族』。痴呆についての劇は今までも何回かやっているが、痴呆症高齢者が増えていることもあって、今回も痴呆の問題を取り上げた。脚本はやはり高見沢佳秀さんの書き下ろし。今回は、今まで裏方ばかりやっていた指導員会長の吉沢さんが初めて出演するというので、練習にも熱が入る。

いよいよ当日。出演者の熱演で劇は大いに盛り上がった。衛生指導員になって三年の間に、皆の演技が向上しているのには驚く。今回の配役には指導員の他に、女性の健康づくり推進員(以下推進員と略)が二人加わった。

その中の一人、佐藤千代子さんは三十七歳の長女役をやった。六十二歳になって初めて劇に出たのだという。後で佐藤さんはこう語る。「今までは人の後ろに付いて前には出なかつたけれど、私をこんな大勢の中から選んでくれてとても嬉しい。劇に出て人生観が変わった」と。たまには指導員が裏方になって、こういう方々に表に出てもらうことはとても大事なことだ。別に、よい演技者をみつけるといふことだけではない。表に立つことによって、その人の人生観を変えてしまうこともあるのだ。これも健康教育の一つといえようか。

後ろからサポートする

佐久病院に何回も見えたことのある医師のスマナ・バルアさん（バングラデシュ出身・現W
HO医務官）は、地域と教育の会の全国集会での講演でこんなことを述べている。

これは、中国の偉大な教育者、晏陽初（一八九三～一九九〇）の「人々の中へ」という詩で
す。

人々の中へ行き

人々と共に住み

人々を愛し

人々から学びなさい

人々が知っていることから始め

人々が持っているものの上に築きなさい

しかし、本当にすぐれた指導者が仕事をしたときには

その仕事が完成したとき

人々はこう言うでしょう

「我々がこれをやったのだ」と

教育者の哲学だと思っています。学生が自分たち自身で努力しているのだ、と感じるくらい、教師は表には出ずに後ろからサポートするのです。（後略）

これは主に教師を前にして語った言葉だが、健康教育に携わる者にも、当てはまるのではなからうか。担当者は脇役になって、常に住民を主役に導くのである。

役場の佐々木衛生係長さんも衛生指導員に対して、上からこうしろ、ああしろとは言わない。ある程度、衛生指導員にまかせて、自分は側面からサポートしている。衛生指導員は自分でやったと思っているが、実際は係長さんの目論見どおりに事が進んでいる。

「係長は女性をまとめるのがうまいじゃん」と指導員副会長の内藤恒人さん。「いや、男をまとめるのがうまい」と、元会長の茂松さん。「最近はいいように乗せられているね」と現指導員の篠原始さん。勝手にいろいろ言っているが、みな納得している。

「だけど、やはり女性のほうがいいね」と係長さんがつい本音を。指導員や推進員が自発的に仕事ができるように、裏から支えているのはたいしたものだ。行政はこうでなくてはいい。

自ら黒子役になって

最近、衛生指導員たちも分かってきたようだ。自ら黒子役になって、推進員や住民を表面に立てようと考えている。

大石区の衛生指導員の篠原始さんは、「福祉と健康の集い」の目玉になっているブロックごとの研究発表で、従来のように指導員が発表することはせず、推進員が分担して発表するように仕組んだ。

始さんは言う。「女性は引っ込み思案になりがちだし、自分からマイクを持って喋って発表する機会が少ないからね。一人ひとりを表に出すように考えた」と。

「マイクを持たせれば、みな結構よく喋るね。始さんは推進員をヨイシヨするのがうまいんだよ」と、恒人さんは半分やつかみ顔。ある程度任せるということで、皆が生き生きとしてくるのがよく分かる。

ある日の衛生指導員会で、八巻保健師さんが感心したように言う。「始さんて、最初に会ったときは、どこかのヤクザかと思ったけれど、つき合ってみると、若々しいし積極的だわね」と。そういえば、吉沢さんにしても恒人さんにしても、若々しく女性の推進員にはもてるらしい。

たまたま今年の研修旅行の思い出話になった。バスの中で、恒人さんが女性に囲まれている

写真がある。とても幸せそうだが、どう見ても二十代に見える。だが、くわえタバコをしているのがちよつとまづかった。

「あれでくわえ煙草がなかったらもつと良かったね」と誰かが言ったので皆どつと笑った。笑い声は、ドアを振るわせて、秋空へと忙しく抜けていった。

(完)

あながき 八千穂村が大好きです、ありがとうございます。

定年で病院を辞めて1年くらいたった頃でしょうか、松島先生から八千穂村の健康管理について「衛生指導員ものがたり」という題で、シリーズ的に病院の機関誌『農民とともに』に書いてゆきたいので、一緒に担当して欲しいんだけど、というお電話がありました。「飯嶋君と横山さんとボクの3人が交代で、受け持てばいいから楽でしょ」と、もう書くのが当たり前といった感じでしたから、私は力量も無いのに取り付くことになりました。

実は、定年前に八千穂村のことをキチンとまとめて来なかった思いがあり、まとめ方として衛生指導員に焦点を当てる形というのが、ちょっと気を楽にしてくれて、頑張つて整理しようと思ったものです。八千穂村の健康管理における住民組織との協働的な、村ぐるみの「健康な地域づくり」の象徴である衛生指導員をテーマ名にするところも、面白いと思われました。

始めるとなると松島先生は、矢張りばやに私たちに招集をかけて、編集方針や字数、そして連載するテーマを40項目くらいあげ、「初期のこのあたりまでは横山さん、後期の方は飯嶋君かな」などと分担を決め、「すぐにも書いてみてよ」などと大変な意気込みです。普段はどこからか言うとおっとりと構えられる先生が、編集となると意欲満々で、つぎつぎと発想が湧い

て、獲物を見つけた鷹のようにまっしぐらに突き進んでこられます。

しかし私の方は、テーマを見ればフツフツと文章が湧く先生のようにはいかないわけで、しかも私の分担は初期の頃なので、昭和35年から40年代といえは約30年も前のことです。思い出だけではとても持たないので、それこそ衛生指導員さんに電話をかけたり、古い資料を引っ張り出したりして、どういうストーリーで起承転結をはかるかを、考えるのは容易ではありません。うろろろとして遅くなっていると「そろそろ締切りだけど、できたかしら」と優しいお声が催促の電話がかかります。

ちょうど平成12（2000）年の4月に私は、上田市にある長野大学に教員として就任したばかりで、慣れない福祉の授業の展開にてんてこ舞いの頃でした。福祉を目指す大学生に介護概論や介護技術、現場実習クラスの担任などを受け持って、上田通いの毎日です。

専門外の介護の授業を担当せざるを得なかったのは、大学には看護や保健といった教員がこれまで1人もいなかったもので、その資格だけでどうしても懇願されてしまったことと、身の介護体験があったこと、介護保険の開始に向けたケアマネのテキストを少し勉強してあったことからです。そして、何といっても八千穂村との40年近いお付き合いの中で、次第に高齢化してゆく村の姿や、人々の暮らしの変化を身近に感じ、地域の健康管理の仕事の中に、介護に目を向けた活動が必然的に始まっていて、八千穂村を通して地域の実情がわかっていったことか

らです。また、後に北信総合病院長となられた今は亡き磯村孝二先生と脳卒中中の登録システムによる寝たきり予防の仕事がやれたこと、保健婦の井出今さんがそれを受けた形で、どこよりも先に八千穂村で、地域リハビリに身を張って取り組んでくださったことなどもあり、これらが授業に大いに役立って大変ありがたいことでした。

しかしそれだけに、八千穂の原稿に取り掛かるにはネジを180度くらいひねって、頭をそちらに向けていないことには始まりず、ぎりぎりセーフといった危うい状況で、松島先生にはずいぶんご迷惑をおかけしておりました。

昭和40年代に入った主婦たちの工場通いのテーマの時などは、村内に納屋工場があちこちで始まり、兼業化が一気にすすんだ頃でした。萩原篤（元事務長）さんの研究データではいろいろ判っていても、記事には生の声を伝えたいという思いがありました。衛生指導員の何人から当時の工場で働いていた方を紹介してもらい、電話で思い出していたく形で取材して、改めて健診会場では聞けなかった当時の『三ちゃん農業』や母ちゃんの工場づとめの様子が理解できたものです。

また、貧血とか栄養などを取り上げる時に、ヤギを飼って栄養を補おうという話題になったけれど、どこからヤギを手に入れるのかと調べてみると、なんと当時は（今もかな？）佐久市の種畜牧場が日本中のヤギの買い付け市場のような役割をしており、『ヤギ牧場』といわれて

遠くは九州や秋田の方からも買いに来るような、全国区の貴重な場所だったということがわかりました。ものを書くということはその気になって取材したり、データをそろえたりしないと話が弾みません。こうして衛生指導員や八千穂村のことを文章にすることで、改めて自分のやってきた仕事や郷土の価値など知ることができ、とてもありがたい時間となりました。

私は八千穂村が大好きです。よそで八千穂村の名前を聞くと胸がどきどきと高まります。考えてみれば八千穂村は、私の38年間の佐久病院での仕事のすべてを通した拠点です。戦後の農村の復興から、次第に高度経済成長に伴う変貌をしてゆく姿、農村社会の中で起きる様々な暮らしの出来事や、心身への影響をずいぶん教えていただき、一緒に歩んで勉強させていただいた「母なるふるさと」といった思いになると思います。

今回、八千穂村健康管理50周年記念の冊子を纏めるにあたって、『衛生指導員ものがたり』が別冊で出されることになり、改めて振り返ると、まさに健康管理の仕事は衛生指導員に支えられて成り立ったことばかりです。佐口での冷えの研究、大石では農民体操、耕運機の事故や農繁期の疲労調査、うその口では泊り込み健診もありました。穴原や崎田では農薬調査、栄養グループで活躍された方々との交流、各集落の全戸訪問などや健診のあり方・事後指導の進め方などの検討まで、そうした農村医学の原点となるような事柄は、ほとんど八千穂村から学んだことばかりです。その陰にはいつも衛生指導員の面々の存在があります。集落に入る時の拠

点はまず彼らの家や畑で、地図を片手に訪問先を教わりながら、いつの間にか村内の出来事や昔の風習、農産物のことなどの話題になり、それがずいぶん勉強になって楽しい仕事になっていました。

若い時代のこうした体験は一生の宝です。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

2011年3月

佐久総合病院健康管理部元保健婦長

横山 孝子

あとがき 住民参加の実例を訴えたい

「衛生指導員ものがたり」を書こうという話が出たのは、今から15年ぐらい前のように記憶しています。

当時私は、健康管理センター・健康管理部に所属し、集団健康スクリーニングという健診やがん検診の実施、地域との打ち合わせなどで長野県下を飛び回っていました。健診は、日曜日の午後に病院を出発、そして帰院は金曜日の夜というスタイルで、月1〜2回これに参加するというものでした。

もちろん地元の健康管理活動にも力を入れるという職場の方針の中、八千穂村担当にもなっていました。八千穂村全村健康管理の活動は、夜の時間帯の参加が多く、終わると「一杯」となるわけです。村の「飲み屋」さんで行かない店は一軒もないという状況でした。

秋ごろだったと思います。ある日「巡回健診隊」（当時の若月院長が命名）の定宿となっている飯田市のY旅館に、皆とは別行動で松島松翠先生（現名誉院長）が到着しました。松島先生は当時佐久病院の副院長兼健康管理部長をされていて、長野市での会議が多く、飯田に21時半頃着の列車で健診に参加されることがしばしばありました。

長野で宴席があったらしく、その夜先生は珍しく酩酊されていました。そして私と飲み直そうということで、宿の食堂でビールを傾けました。

そのとき、先生が突然、「飯嶋君、いっしょに本をつくらないか。〃八千穂村の衛生指導員ものがたり」というのはどうかね」と話されたのです。思いもかけないことと、私にそんな能力があるわけがないことが重なって、呆然としたのを憶えています。そのあと先生はいろいろな力説されたのですが、失礼ながらよく思い出せません。きつと、世間では保健や福祉の活動に「住民の参加」が必要とよく言っているが、実際にはほとんど出来ていない、その実例を分かりやすく訴えたい、というようなことだったと思います。

しかし、その話はその後先生の口から出てきませんでした。酔った席での冗談かと、私も内心ほっとしていました。先生も仕事がどんどん忙しくなり、平成6年1月には院長に就任され、それまでの若月院長の後を継ぎ、佐久病院の運営・経営の要として日夜奮闘されるようになったのです。

平成11年の秋ごろでしょうか。松島先生が地域ケア科の事務室にひょっこり顔を出されました。平成12年の4月から先生は院長から名誉院長に就任されることになっていました。私は1年半ほど前に地域ケア科に異動し、介護保険対応に追われているところでした。

「飯嶋君、前に話したと思うけど、横山孝子さん（前健康管理部保健婦長で前年に定年退職）

と3人で『衛生指導員ものがたり』を共同執筆したいんだけど。『農民とともに』へ連載形式でやればいいと思うけどどうだろう」とまた突然の話です。何年も前の、あの夜の会話を憶えておられたことに驚きました。横山さんとは長い間一緒に仕事をして気心がしれた仲だし、先生がついていれば何とかなるだろうと、うかつにもつい引き受けてしまいました。

それから、仕事の合間を縫って時々取材活動が始まりました。横山さんも他の仕事があり、なかなか忙しそうでした。松島先生が一番熱心で、裏付けとなる資料探しや、インタビューに何回も同行しました。この10数回にも及ぶインタビューのテープを、その都度、活字にしていただいた市川順子さんには心から感謝いたします。八千穂村役場のみなさん、衛生指導員OB、関係するみなさんにもご協力を頂きました。編集会議も時々開かれ、浅沼信治さん（当時農村保健研修センター所長）にいろいろお世話になりました。プランからいくと私の担当は後半部分になっており、実際には1年以上先に原稿作成かなという感じでした。そして平成12年4月『農民とともに』第85号から「衛生指導員ものがたり」の連載が始まりました。

ところが、です。私自身にとんでもないことが起こってしまいました。平成12年の秋、清水茂文院長（当時）に呼ばれ、次年度から事務長をやるようにと言われてしまったのです。もちろんそんな能力などありませんし、再三お断りしたのですが、これもついに受けてしまいました。それからの激動の日々、能力のない私はとても原稿を書く気分になれませんでした。し

かし、自分が関わった時代へと、「ものがたり」は進んできてしまいました。

松島先生も心配し「書けるだけ書いてみて、あとは僕がなんとか書くよ」と言ってくれました。そして私への取材もしてくださいました。これが当時のことを思い出すきっかけとなり、少し書いてみようかという気もおきてきました。冬休み、5月の連休、夏休みなどに少し気分を切り換え、ある程度まとめて原稿らしきものを作ることができました。西垣良夫先生（副院長、前健康管理部長）にも激励して頂きました。書きっぱなしの原稿を修正や脚色をして「ものがたり」風にしてくださいしたのは松島先生でした。ですから、この本の制作に私が関わったのはほんの僅かにすぎません。でも仕事をとおして、苦しいこともあったけれど楽しい活動을思い起こすことができました。

松島先生にご迷惑をおかけしたことを、この紙面をお借りしお詫びと感謝をしなければなりません。横山孝子さんもご苦労さまでした。また、取材に協力してくださいましたみなさまに、心から感謝致します。高見沢佳秀さん、井出佐千雄さん、小宮山則男さん、岩崎正孝さん、内藤恒人さんや衛生指導員だったみなさん、地域保健セミナー（保健福祉大学）同窓会の方、みなさん、一緒に働いた仲間たちとは今でもおつきあいすることがありますし、心かようものがあります。最後に、この『衛生指導員ものがたり』を出版してくださる佐久総合病院、統括院長夏川周介先生、院長伊沢敏先生はじめ、職員の方々に、心よりお礼申し上げます。

2011年3月

佐久総合病院元事務長

飯嶋 郁夫

著者紹介

松島 松翠（まつしま しょうすい）

昭和29年、佐久総合病院外科に就職。以後、外科に従事しながら、次第に健康管理の仕事に転じ、八千穂村の全村健康管理の仕事や農薬中毒の解明と予防に力を注ぐようになる。昭和35年健康管理部長、昭和48年長野県厚生連健康管理センター部長を兼務。平成6年院長、同11年名誉院長。

横山 孝子（よこやま たかこ）

昭和35年、佐久総合病院健康管理部に保健婦として就職し、八千穂村の健康管理の活動にほぼ初期から関わる。その後、併設された健康管理センターを兼務し、全県下の集団健康スクリーニングの開始に伴う仕組みづくりや、地域連携活動などにかかわる。

平成13年から18年まで、長野大学社会福祉学部助教授。平成20年より佐久大学看護学部非常勤講師として「健康管理と生活習慣病」を担当し現在に至る。

飯嶋 郁夫（いいじま いくお）

昭和44年、佐久病院に就職。総務課、医事課を経て、健康管理部に異動。同時に発足した長野県厚生連健康管理センターの業務も兼務し、地域健康管理活動の推進役となって活動が続ける。平成4年同課長、その後地域ケア科課長を経て、13年事務長、16年美里分院、同18年退職。

衛生指導員ものがたり

『八千穂村全村健康管理50年』別冊

2011年3月31日 第1刷 発行

著 者 松島松翠 横山孝子 飯嶋郁夫

発 行：JA長野厚生連佐久総合病院
〒384-0301 長野県佐久市臼田197
電話 0267(82)3131

印 刷：株式会社 佐久印刷所



見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォントを
採用しています。

頒布価 1000 円(税込)